
永遠のフィレーナ
6
機密への旅路
作/首藤剛志
絵/高田明美
AM JuJu

前巻までのあらすじ

　支配者デビス帝国に滅ぼされた、フィロセラの王女フィレーナは男奴隷の闘技士（バトラー）として育てられた。しかし自分の出自を知り、逃亡奴隷となって帝国の打倒を決意する。帝国のシンボルともいうべき神殿を破壊したフィレーナのうわさは、帝国各地で「フィレーナ」を名のる反乱軍を生み出した。それから３年、「嵐のフィレーナ」を倒したフィレーナはさらに巨大な「鯱（オルカ）のフィレーナ」をも倒し南部海岸地方で最大の反乱軍となっていた。そんなある日、フィレーナは岬の灯台で「北の海、蒼き流れの源に、海の民の魂の拠り所あり」という文字を見つけ、その灯台の光が指し示す方向へひとり旅立った。



アニメージュ文庫

永遠のフィレーナ 6

機密への旅路

首藤剛志

絵/高田明美

AM JuJu

Pocket Editions of Animage
by Tokuma shoten

主な登場人物



フィレーナ

デビス帝国に滅ぼされた国・フィロセラ王国の王女。灯台の光の指し示す方向へ旅をつづける。



リラ

フィレーナの名目上の妻。ネストが倒れた後、首都ボーを脱出し、フィレーナを探す旅に出る。



ネスト

元・闘技作家（バトルライター）。帝国警察の硝子矢（グラスアロー）によって殺されたかに見えたが、密かに帝国の更正病院へ収容される。



テス

帝国人民心理更正病院に勤務する新米の心理病理観察看護人。ネストの先祖返り現象を調べる。



ラズル

帝国の優秀種のエリート。だが、リラの一撃によって男性機能を失い、すべてを捨てて彼女を追い回す。

口絵・本文中さしえ／高田明美

帝国地図／道原しょう子

目次



プロローグ

フィレーナは狼犬のギャッピーとともに歩き続けた。
朽ち果てた灯台が、かすかに指し示してくれた北西の方向へ……。
〔北の海、蒼き流れの源に、海の民の魂の拠り所あり〕
灯台の壁面にそう書かれたフィレーナの祖国フィロセラの文字を、デビス帝国支配下の今、だれも使うものはいない。
フィホーパー（海の希望）と呼ばれていた灯台も、海を航海するもののいない今は、針路を指し示してくれる本来の役目を、とうの昔に、放棄させられている。
ほんのわずかの間、フィレーナに見せてくれた光が、その名のとおり希望に結びつくものか、分かるはずもなかった。
けれど、フィレーナは、その光に向かうしかなかった。
フィレーナは、後ろを……かつて、祖国だったフィロセラを、もう、振り返ってみようとは思わなかった。
振り返ったところで、何があるというのか……。

硬化剤で、コンクリートのように固められた砂浜に何が生まれるというのか……。
フィロセラの再興も、帝国への反乱も、硬質化した海辺に暖かい何かを生み出せるとは思えなかった。
ぬくもりらしきものが、あったとしても、それは、無残な殺戮によって流される生ぐさい血でしかないだろう。
フィレーナは、ひたすら歩き続けた。
南部海岸地方から山岳地帯へ……。
どんなに険しい山もフィレーナの歩みを止められそうになかった。
雨も風も雪も嵐も……一日たりとフィレーナの歩みを阻めなかった。
北西へ……北西へ……。
〔北の海、蒼き流れの源に、海の民の魂の拠り所あり〕
その地を目指して……。
やがて、山岳地帯を越えたフィレーナの前に、広大な広がりが見えた。
晴れた強風の夜……。
三つの月に照らされたその広がりは、まるで、海のようにゆっくりとうねっているように見えた。
だが、それは、かつての海がそうだったような生命を育む母のような広がりではなかった。
海のように魅惑的で、人を誘い込む美しさを見せてはいたが、それは、人間がだれも立ち入

ろうとしない世界だった。

それは、果てしなく続いて見える砂漠だった。

フィレーナは、初めて立ち止まった。

フィレーナは、砂漠の果てを見つめた。

そして、北西の地平線に、きらりと光る何かを見つけたような気がした。

それは、気のせいかもしれなかった。

「どう、思う？」

フィレーナは、ギャッピーに呟いた。

ギャッピーは、何も答えなかった。

ただ、フィレーナが見つめる地平線を、じっと見つめている。

フィレーナは、肩に掛けた袋を降ろし、中を見た。

「おまえと僕……頑張って……七日分の、水と食料……かな」

袋の中は、どう見ても三日持てばいいところだった。

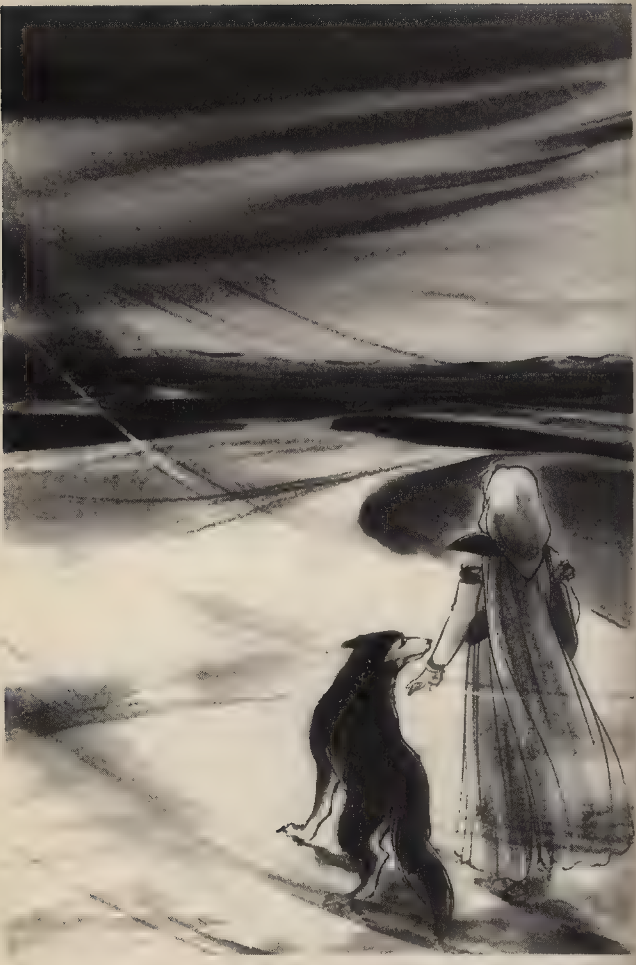
嗅覚のすぐれたギャッピーが、袋の中身の量に気づかぬはずはなかった。

「でも……僕は行くよ……」

フィレーナは、砂漠に向かって歩き出した。

ギャッピーは、止めはしなかった。

しばらくその場に留まって、フィレーナの後ろ姿を見送っていたが、やがて、その後を追っ



フィレーナとギャッピーの前には、海のように広大な不毛の砂漠が広がっていた

てゆっくりと歩き始めた。

ギャッピーの中に流れる放浪のオオカミとしての血が、二日で砂の海を渡れると判断したのか、それとも、主人にあくまで忠実であろうとして死をもいとわない犬の血がそうさせたのか……。

フィレーナとギャッピーは、黙々と砂の海を歩き続けた。

朝……。

二つの影は、灼熱の太陽に陽炎だつ砂漠の中、危なげにゆらぎながら消えていく。

だが、その方向は、確実に北西だった。

第1章

それぞれの旅

「狼のフィレーナ」が、「鯱のフィレーナ」を統合し、南部海岸地方を手中に収めたという噂は帝国各地の反乱組織に、みるみる広まっていった。

*

反乱軍同士の覇権を握るための「狼のフィレーナ」と、「鯱のフィレーナ」、そして、南部海岸地方を守備する帝国軍が絡んだ三つ巴の戦いの結果は、地獄だった。

要塞都市デビの上層部は、反乱鎮圧のために禁じられた兵器、超爆弾を使用した。

超爆弾は、強力な熱と爆発力を持ち、一度、炸裂すれば、周辺の生命を根こそぎ消滅させるばかりでなく、使用された土地を数百年にわたって不毛にしてしまう悪性の後遺症を持つ兵器だった。

超爆弾は、敵味方もかかわりなく、この星に住むものすべてに、幾世代にもわたり、悪影響をもたらす。

その超爆弾を、帝国は、世界制覇の切り札として、たびたび、使いはしたものの、目的を達成した今は、帝国令によって厳重にその使用を禁止した。

さらに、超爆弾の、存在自体すら人民の歴史から消し去ろうとしていた。
しかし、反乱軍鎮圧にせっぱつまった要塞都市デビの上層部はあえて超爆弾の使用に踏み切った。
南部海岸地方のラサ草原で、帝国の旧式戦車「竜」の発射した二発の超爆弾が炸裂した。
それは、戦車搭載用の小型爆弾だった。
だが、小型ではあっても、その超爆弾のたった二発で、「鯱のフィレーナ」の軍は、壊滅的な損害を受けた。
けれど、要塞都市デビも、ただですみはしなかった。
同じ帝国人であっても、超爆弾禁止という帝国中枢の基本命令を破れば、許されるわけにはいかない。
制裁という名目で、要塞都市デビに向け発射された帝国中枢が開発中の新爆弾は、デビに住むすべての人々の命を一瞬のうちに奪い去った。
南部海岸地方における「狼のフィレーナ」の勝利とは……超爆弾と新爆弾の猛威から、幸運にも逃れられた「狼のフィレーナ」軍が、生き残れたというだけのことだった。
生き残れたからといって、これから先も生き残れる保証はない。
むしろ、南部海岸地方の反乱軍を統合した「狼のフィレーナ」軍は、帝国にとって的の大きくなった射落としやすい標的のようなものだった。
いつ、帝国から南部海岸地方へ向けて大型の超爆弾が発射されるか……それは、帝国中枢の

思惑次第……「狼のフィレーナ」軍の命運は、帝国に握られているも同然だった。

　超爆弾が、発射されたときの損害を最小限に押さえるために、「狼のフィレーナ」の作戦参謀格のバンニルは、南部海岸地方の各地に勢力を分散させなければならなかった。

　さらに、帝国上層部を刺激しないように、帝国軍との戦闘も、極力避けるようにした。

「狼のフィレーナ」が、南部海岸地方を手中に収めたといっても、しょせん、帝国の上層部にとっては、南部海岸地方という名の帝国の辺境の檻の中に閉じ込めた、身動きの取れない猛獣でしかなかった。

　檻から飛び出したり目障りになれば、生かすも殺すも帝国上層部の思惑次第だった。

　それでも、「狼のフィレーナ」の南部海岸地方制圧は、帝国に反旗を翻そうとする者たちにとって、大きな刺激には変わりなかった。

　規模の大きさからいえば「狼のフィレーナ」を凌ぐ大反乱軍は、帝国全土に幾つかあった。

　しかし、辺境の地とはいえ、要塞都市を占領し、一つの地方を制圧した反乱軍は「狼のフィレーナ」が、初めてだ。

「狼のフィレーナ」侮るべからず……。

　勢力の大きな反乱軍の頭目たちは、だれもが当面の目標を帝国との戦いよりも、むしろ、反乱軍の全国統一においていた。

　すべての反乱軍を統合して帝国へ挑戦できるだけの力を持つ反乱軍の頭につくこと……。

　いったい、だれが、その覇権を握るのか……。

その、候補者の一人に、本人が望みもしないのに、一躍名乗りを上げてきたのが、「狼のフィレーナ」に他ならなかった。
各地の有力な反乱軍の頭目たちは、「狼のフィレーナ」の台頭に、焦りを感じずにはいられなかった。
「狼のフィレーナ」に負けるな……一日も早く周辺の反乱軍を統合して、より巨大な反帝国勢力を作らねばならない……。
さらに、勢力の小さかった「狼のフィレーナ」が、数倍の兵力の「鯱のフィレーナ」を統合したという事実は、小規模の反乱組織や集団にも活気を与えた。
彼らは、口々に「帝国打倒」を唱えたが、当面の目的は、そこにはなかった。
彼らの本当の思いは帝国を倒すことよりも、そのまえの段階……。
……たとえ、今は少数の勢力でも、われわれにも、反乱軍統一が、できるかもしれない……
「狼のフィレーナ」の勝利は、帝国全土で起こる反乱や暴動の首謀者たちの野望に、油を注ぐ結果になった。
各地区の反乱や暴動は激しさを増した。
そのほとんどが、それぞれの反乱軍の力を蓄えるための帝国に対する掠奪行為だったり、反乱軍同士の覇権争いにすぎなかった。
戦いが起こるたびに、帝国の幹線道路は避難民でごったがえし、帝国の主要都市は、難民の群れで溢れた。

黒い悪魔の一人が、兜の中から抑揚のない声で報告する。

*

「これが、帝国全土における今日一日だけで記録された暴動、反乱です」
巨大な壁面に写しだされた帝国地図に、無数の光が、輝いている。
それは、空気の澄み切った高地で見る夜空の星の数より多く見えた。
首都ボーの帝国中枢総合病院……その地下二十階の会議室……。
帝国機密情報兵団（通称黒い悪魔）の最上層部の定例会議が、今日も開かれていた。
「なかなかに、華やかですな。あのひとつひとつの光の下で、帝国人民と属国人、奴隷に流民、いったいどれほどの命が消えているのか」
思わず呟いたもう一人の黒い悪魔の声も、表情がない。
だが、その声に堰を切られたかのように、他の黒い悪魔も次々に口を開いた。
「われわれはこの騒ぎを、このまま手をこまねいて見ているだけなのですか」
「帝国指導者からの指令は変わらない。南部海岸地方で、『狼のフィレーナ』が最大の反帝国勢力になったのを確認してから以後は……全国で起こる反乱暴動にわれわれ帝国機密情報兵団は、手を出すな。……その一辺倒だ」
「表の帝国軍だけで、鎮圧しようというのか」
「可能、不可能でいえば、鎮圧は可能だ。だが、帝国軍の損害は、軽くはすまない」
「われわれの力なしではな」

「そもそも、われわれ帝国機密情報兵団は、戦いの陰で敵に秘密工作し、帝国の損害を最小限にとどめ敵を倒すために作られている」

「そのわれわれに動くなと指導者は言う……少なくとも今日まではそれがわれわれへの指令だ」

「ということは……帝国指導者の狙いは……」

黒い悪魔たちはそこまで話して、口をつぐんだ。

……帝国指導者は、今回の帝国人民の損害を悪いこととは思っていない。

……いや、もしかしたら、むしろ、それを望んでいるのかもしれない。

……馬鹿な……帝国の繁栄を願うはずの指導者がなぜ……帝国人民の損失を望むのか……

「詮索は無用だ……」

黒い悪魔の一人が、ぽつりと口を開いた。

「われわれは指導者の指令を実行するために存在する兵団だ。指導者が動くなという以上、それが、われわれに与えられた指令だ」

もう一人が頷く。

「われわれより遥かに優秀な指導者たちが考えていることだ。帝国の損害も計算のうちに違いない」

「帝国と人民にとって指導者たちが計算した、これが正しい行き方なのだろう」

「確かに、ここ数十年……帝国は平和すぎた。刺激がなさすぎた。世界制覇のために、いつも

戦いに明け暮れた帝国にとっては、平和という名の休日が長過ぎたかもしれない」
「それにしても、賑やかで、美しい……」
壁面地図に無数に瞬く光の点は、さらに数を増していく。
……帝国機密情報兵団は動くな……
帝国指導者の指令は今日も変わらない。
黒い悪魔たちは、壁面地図を黙って見つめているしかなかった。

＊

「どうしてこんなことになったのか……」
ラズルは、ため息をつき苦笑するしかない。
……この台詞を言ったのは、今日になってから何度目だろう。
荒れ果てた岩地から遠く見つめる首都ボーの城壁は、沈みかかった夕陽で赤く染まっている。
……数カ月前まで、おれは、あの壁の中で、優秀な税務官だった……
しかも、もしかしたら首都ボーの税務長官という税務局最高のポストを狙えるかもしれない未来を嘱望された若手だったのだ。
そんな明日も、今は目の前の落日より早く落ちてしまった。
流れ星のように一瞬のうちに消え去ってしまった。
今は、しだいに衰えていくあの日の光すら、眩しく見える。
ラズルは、目をしばたかして、城壁の向こうへ沈んでいく太陽を見つめるしかない。

……夕暮れか。いつもなら仕事を終え、一夜の女を求めて同僚たちと享楽街のブキーガナ地区へ、繰り出しているころだ……

ラズルは、また、ため息をつき呟く。

「それが、どうしてこんなところにいる」

これもまたラズルの口癖になっていた。

原因はいうまでもない。情けないほど分かっている。

享楽街の舞踏場で、狐の仮面を被った小娘を、からかったあげくが、思いもしない反撃を受けて、気がつけば、子孫を残せない身体にさせられていた。

ラズルは、帝国人民の種のレベルで、上から二番目の優秀種に属していた。

めったに帝国人のなかでも誕生しないが、ひとたび生まれれば帝国を支配する指導者たちの一人になれる資格の最優秀種に、ほんの今一歩のところだったのだ。

今一歩……本当にわずかの差でラズルは最優秀種として生まれてくることができなかった。

だが、もしかしたら、自分の子供には、最優秀種が生まれてくる可能性がないとはいえなかった。

ラズルのような優秀種は、最優秀種を産み出すために存在しているようなものだ。

優秀種にとって子供を創れない身体は、存在価値がない……少なくともラズルは、そう思っていた。

……その、当の本人自身が、酔ったうえでの小娘への悪戯ごときで帝国人としての存在価値

をなくしてしまうとは……
泣くに泣けない……自分を笑うよりないではないか……。
せめて、その小娘をいたぶり、自嘲の種を育てようと、街を捜してみたが、今一歩のところで、逃げられているばかりだ。
自分を笑う涙さえ流せないのだ。
……おれは、いったい、なんなんだ……
「フィレーナ」
ラズルを、呼ぶ声が背後からした。
……フィレーナ？　そう、おれは今、フィレーナと呼ばれている。……首都反乱集団「浮き草のフィレーナ」の指導者……全国に星の数ほどある反乱軍の名前……フィレーナの一人になってしまった。
帝国の優秀種だったおれが、小さいとはいえ帝国に反乱する集団の指導者とは……その意外性だけは、他のフィレーナに、引けを取らないほど笑えるかもしれない。
……しかも……
「そろそろあそこへ繰りだしましょうぜ。夜が来る」
声を掛けた副将格の男がラズルに言った。
ラズルは、頷いた。
……そう、あそこ……首都ボーの享楽街、夜になって享楽街に繰り出すのだけは、昔と変わ

らない。……ただし、昔は遊びだったが、今は仕事といっていい。

……首都警察の浮浪者狩りに追われ浮き草地区から逃亡した身元も知れぬ連中の食い扶ちを確保するために、警備の手薄な享楽街で暴動を起こし、早い話が帝国人民を襲い破壊と掠奪を繰り返す……それが、「浮き草のフィレーナ」の毎夜の仕事だった。

……ま、やっていること自体は、薬や酒に酔って享楽街でやりたい放題暴れ回っていた帝国人の昔と、さして変わりはないのかもしれない。

いや、むしろ、暴動反乱の名で、こちらも襲われる相手も死にもの狂いなだけ、充実しているといえないこともなかった。

……そう、充実度からいえば、帝国の役人としてあくせくし、絶えず不平不満を胸の中に充満させ鬱憤のはけ口を捜していたころと比べれば、どうせ、おれは、落ちこぼれの浮き草だと、笑って暴れていられる今のほうがましなのかもしれない……。

自分をせせら笑うのも、慣れればかえって快感かもしれない。

ラズルは、頬を引き吊らせるように、一人笑いをすると、副将格の男に向き直った。

「で、今夜の騒ぎに参加するのは何人いるんだ？」

「享楽街を襲うのを嫌がるやつは、いませんや……うまくすりゃ帝国の女を、モノにできるかもしれねえし……」

副将格は、猥雑な笑みを浮かべて答えた。

子孫を創る能力を失ったラズルには、癇に触る笑いだ。

ラズルは、ぶっきらぼうに言った。

「何人、行くかと聞いているんだ。数だけ言えばいい」

「ざっと、千人はいますぜ。……みんな、待ち構えてまさあ……」

「多すぎる。目立つとかえって危険だ」

「享楽街ですぜ。行き先は……行くやつを制限すりゃ喧嘩になりまさあ」

副将の後ろ……岩場の下には目を血走らせた男たちの大集団が、ラズルの号令を、今か今かと待ち受けている。

「それに最近、帝国警察の警備がなまくらで、城壁の出入りは前ほど難しくねえ」

確かに副将格の言うとおり、首都の警備はたびかさなる暴動鎮圧に音を上げたのか、手薄で杜撰になってきている。

首都の汚水処理のために城壁の下を無数に通る下水道など、反乱暴徒の侵入と逃亡のために作られているといってもいいほどだった。

「襲撃の人数を減らす理由は何もありませんぜ」

副将が、ラズルに挑戦的に言った。

ラズルは、副将を見据えて決めた。

……最近、こいつは生意気になった。もうこいつは、いらない……

ラズルは、そんな表情をおくびも見せずに、副将に言った。

「分かった。だが、居残ったものに、死ぬかもしれぬ仲間たちの墓を四百……用意させろ」

副将は、うんざりした顔でぼやいた。

「また墓ですかい？　それも、四百も……そんなにゃ死なねえよ。だいいち、死んだところで屍体を、墓までどうやって連れてくるんでさあ」

ラズルは、毅然とした表情を作って、副将を睨みつけた。

「屍体がなくても墓は作る。おれたちは死んで捨てられる奴隷や属国人ではない。小さくともわれわれは帝国に反旗を翻す『浮き草のフィレーナ』という名のれっきとした反乱軍であることを忘れるな。『浮き草のフィレーナ』の名の下に死んでいった勇者に、墓は残さねばならぬ」

この台詞を言うとき、ラズルは、背中の痒くなるような照れを感じずにはいられない。

だが、ラズルは、かなりこの台詞を本気で言ってもいた。

……おれは、少なくとも他のフィレーナとは違う。全国にフィレーナの名を騙る反乱指導者多しといえど、おそらく、唯一の帝国人の……それも優秀種出身の反乱指導者のはずだ。奴隷や属国人が指導者の反乱軍とは違う。そこのところの違いだけは、きっちりけじめをつけてやる。おれは誇り高い帝国人民の血を引く反逆者なのだ……

有象無象の寄せ集めである反乱暴徒の死者にどんなことがあっても墓だけは作る……このラズルの発想は、世を捨てた浮き草稼業の人々にとって魅力的なものだった。

今まで、世捨て人として自他ともに存在価値を認められなかった彼らが、反乱に加わることによって、墓という存在を持つことができる。

生きることに何の意味もなく、金にも名誉にも力にも意欲のない彼らが、唯一避けられない

もの……死……。

だが、その死によって墓が残るというのなら、無気力な彼らにとって帝国への反乱は、浮き草の暮らしからの魅力的な転職といえた。

「墓こそ、われわれ勇者一人一人が生きた証だ……違うか？」

墓の能書きを聞かされると、副将は、それまでの横柄な態度を一変させる。

「……分かりやした」

そして、ラズルに対して卑屈な笑いを浮かべた。

「やっぱ。あんたは、わしらの指導者だ。あっしゃ、どこまでもあんたについていきやすぜ……墓……四百ですね」

副将は、四百の墓を作ることを仲間に伝えに、岩場を転がるように降りていった。

「屑め……その墓の一つは、おまえの指定席だ」

ラズルは、副将格の後ろ姿に吐き捨てるように呟いた。

＊

その夜、首都ボーの享楽街ブキーガナ地区で起こった暴動は、いつものように惨憺たるものだった。

破壊掠奪を受けた舞踏場、酒場、遊戯場、恋愛宿泊施設は三十を越え、帝国人の死者は、登録確認できた者二百十五名……遊興用奴隷百三十四……そのうち、帝国警察の無差別鎮圧の際の白熱光の巻き添えで死亡した者は八十六人を数え……生きてはいるものの反乱暴徒によ

って暴行を受けた男女七十二……なお死者の多くは暴行された痕跡(こんせき)の者が多かった。
反乱暴徒「浮き草(デラシーナ)のフィレーナ」の死者は三百名以上……現場に残された負傷者は、その場で処刑されたため、帝国警察に記録された生存者はいない。
ちなみにその翌朝、首都の城壁を遠く見る岩場に立てられた死体のない墓標の数は、三百六十四あった。
その中にあの副将格の墓もあったが、あの男が帝国警察に殺された現場を見た者はいなかった。
「……副将などいくらでも代わりがいる……」
ラズルは、前夜、暴動のどさくさに紛れて、あの男の心臓に突き立てた硝子剣(グラススオード)の血糊(ちのり)を拭(ふ)きながら呟いた。
そして……。
「……どうしてこんなことになった」
戦いの後にも、いつもの口癖がラズルの唇(くちびる)からこぼれる。
そして、いつも戦いの終わった後、思い浮かべる顔がある。
それは……狐の仮面の小娘……リラの子供っぽい顔だった。
……あんな小娘を、なぜだ？……
女なら不自由していないはずだ。
ラズルの身体は、子孫は創れないが、女性を抱くことはできるはずだった。

だが、享楽街で、仲間が女性を無理やり、抱く場面を、嫌というほど見せられても何も気持ちが高まらなかった。
ラズルはそんな自分に当惑した。
あの小娘の狐の仮面の下のあどけない顔を見たとき……落胆こそすれ、決して抱きたいなどという気持ちは持てなかったはずなのに……今はあの顔が頭から離れない。……どうしてだ？
ラズルは、そんな気持ちに、結論をだそうとした。
……おれをこんなに変えたあの小娘を、おれの手でどうにかしない限り、おれは一生、女というものを抱く気になれないかもしれない……
あの無邪気に思えるひた向きな表情……おれの人生を変えたあの小娘のあの表情を、泥をかけ踏みにじってでも変えてやりたい。
そう……あの小娘の生きざまを変えるのは、このおれでなければならない。
だが、この混乱した世の中で、あの小娘がおれにまた会う日まで、あの表情を持ち続けることができるのか……生死すら当てにならないのに……。
ラズルは、自分の前から消えたリラに妙な焦燥感を感じていた。
そして、馬鹿馬鹿しいほど、リラの無事を気づかっている自分に慌てた。
……なんなんだ。おれのこの気分は……
ラズルの中で、リラは、もう小娘ではなく女として膨らんでいた。
だが、ラズルはそれに気がつく自分をまだ、拒んでいた。

リラへの復讐への裏返しの感情だと思い込もうとした。
しかし、その気持ちを憎しみと呼ぶにはあまりに切なく歯切れが悪かった。
……今、あの小娘はどうしているんだ……
ため息とともに、この思いが必ず頭をかすめていく。
その思いはもうラズルの日常にまで成長してしまっていた。

＊

超爆弾の脅威を避けるため、分散した「狼のフィレーナ」の軍の中で、司令部的な位置を占めるオルカの軍は、南部海岸地方制圧のシンボルともいえる要塞都市デビを見上げる海岸に陣どっていた。
そこは、かつてフィレーナが生まれた海に生きた都市国家フィロセラがあった海岸でもあった。
だが、フィレーナ本人の所在は秘密にされていた。
もともとフィレーナ自身、女性であることを隠すために、人前に出ることは少なかったが、灯台の灯りの示す方向に旅に出た今は、姿を見せようにも見せる姿がなかった。
だが、帝国の刺客から身を守るために姿を見せないが、南部海岸地方に分散する軍のどこかにフィレーナはいることになっていた。
フィレーナがいなくても、統率力のあるオルカと参謀のバンニル、同じく参謀のナスカの力で、「狼のフィレーナ」の軍は、今のところ、支障なく機能していた。

実際、フィレーナは反乱軍のシンボルとして名前だけ存在していればよかった。
なまじ、姿を現し刺客に襲われ殺されでもしたら、それによって起こる反乱組織の動揺のほうが恐ろしいといえた。
影武者や妙な芝居をして、南部海岸地方にいないフィレーナをでっちあげるのもよそう。
それが、オルカとバンニル、そして、ナスカの一致した意見だった。
……南部海岸地方を制圧した「狼のフィレーナ」は、フィレーナ本人の生死にかかわらず、どこかに生きている。そして、「狼のフィレーナ」軍がある限り、確かな姿は見せないにしても、反乱軍の先頭に立って指揮をし続ける。
フィレーナを、そんな伝説的な存在に位置づけておこう……。
そして、とりあえず、オルカとバンニルの二人だけが、「狼のフィレーナ」軍の中でフィレーナの居場所を知っているということにした。
それでも、南部海岸地方を制圧したフィレーナを、一目、見たい……と、思う人々の足は止められない。
いくら、司令部的な役割のオルカの軍の中にフィレーナはいないと言っても、……ならば、面会の仲介の労を取ってくれ……と、申し出る者は、引きも切らない。
特に、断るのに困るのは、フィレーナの近親者と名乗ってくる人たちだ。
わずか一カ月に、フィレーナの母と名乗る女だけで、一万人を越えた。
その中には、十代の少女もいたというから、手のつけようがない。

ついでだが、フィレーナの子供だと名乗る老人が七人いた。

いちおう、フィレーナが、フィロセラの王家の子であることは、オルカやナスカもフィレーナから聞かされて知っていたから、両親は、存命していないはず……で、お引き取り願えるが、判断に困るのが、妻だ、婚約者だ、結婚の約束をした……と、言って現れる無数の女たちだ。

「この子の親に会わせて！」

赤ん坊を抱きしめ、泣きわめく娘もいる。

それをなだめるのは、決まってオルカだった。

女たちが嘘を言っているとは言い切れない。

フィレーナの名を騙り、女を騙す男は少なくないのだ。

実際、オルカなど「狼のフィレーナ」と合併するまでは、「鯱のフィレーナ」を名乗っていたし、結婚を約束した女性は、酒に酔ったどさくさを加えれば、手と足の指だけでは、数えられないほど、身に覚えがあるから、女たちを冷たく突き放せない気になるのだ。

……何で、フィレーナのために、おれが冷汗をかかにゃならんの……

などと、ぼやきながらも、できる限りこまめに会ってやるのは、本来、オルカが女性好きなせいかもしれない。

唯一、フィレーナが女である秘密を知っているバンニルは、そんなオルカを笑って見ているが、フィレーナの恋人だ、夫だ、妻だ、婚約者だ、と名乗る男（？）が現れると、……おのれら、どういうつもりで恋人じゃ！……判断がつかず天を仰いでしまう。

そんなときだ。バンニルは、ふっと妙な感慨に襲われる。
……フィレーナ……おまえを嫌いではないが、ともかく、おまえはややこしい……
……そう……フィレーナは女だったんだな……
だが、それ以上、考えるのはとりあえず止めにした。
第七バンニルにとって、フィレーナが女であろうが、男であろうが、まず「狼のフィレーナ」の指導者であることが第一のはずだった。
だが次には……。
……そう……あいつは、女か……
やはり、少しだけ考えていた。
そして、今日も、フィレーナに面会を希望する女たちが、オルカの軍に押し寄せてきている。
「その娘……フィレーナに会いたいのではなく、連れている狼犬に会いたいと言うのか？　狼犬のギャッピーに……」
バンニルは、見つめていた南部海岸地方の地図から目を離して、面会の希望者を報告に来た部下に振り向いた。
「追っぱらえ……追っぱらえ……女の面会はもうまっぴらだ」
オルカが、いつになく投げやりな口調で首を横に振った。
「さすがのオルカさんも、懲りましたか」
ナスカが、にが笑いを浮かべて言った。

「憩りたね」
大男のオルカが、蚊の泣くような声で呟いた。
「きのう、会った女の中に、昔……おれの闘技士時代、おれを世話した女がいた。子供を三人連れていた。おれの子じゃない。狼のフィレーナの子だそうだ。それも、相手の男は三人とも違う『狼のフィレーナ』だそうだ」
ナスカは、笑みを引き締めて、事実だけをさりげなく言った。
「私の知る限り、狼のフィレーナの名を使って、女に子供を産ませた男は、延べにして三百人はいる」
オルカは頷いた。
「たぶん、おれ以外の男で『鯱のフィレーナ』の名を使ったやつもそれぐらいはいるだろう。石を投げれば、何かのフィレーナには当たるさ。だが、その女、おれの顔を覚えていなかった。闘技士オルカのことはすっかり忘れていたよ」
「で……？」
バンニルが、オルカに聞いた。
「しゃあない……子供は引き取ることにした」
オルカは、伸びをしてぼやいた。
「これじゃ、オルカ軍じゃなくてオルカ慈善孤児院になっちまうな」
「孤児院になるか、女子寮になるか知らないが、会ってみよう。フィレーナの狼犬に会いたい

と言う娘にね」

バンニルが、立ち上がる。

「おいおい、まさか、その娘、狼犬の子犬なんか連れてきてやしないだろうな」

オルカが、投げやりに言った。

「それなら、ここを動物園にするさ」

「動物園ね……帝国人以外は人にあらずなら、鯱に狼にはぐれ蜘蛛に、奴隷に流民に孤児に難民、確かに、ここは動物園かもしれませんな」

ナスカは、そう言って肩を竦めた。

＊

フィレーナに面会を求めている女たちの隅で、その娘は膝小僧を抱いて座っていた。

他の女たちは、フィレーナに会えるかもしれないと言う期待で、それなりの化粧や身だしなみを整えていたが、その娘は、髪はぼさぼさ、顔はどろだらけで、肩からずだ袋を掛けてぼろをまとった小柄な姿は、まるで浮浪児の少年のようだった。

本人が女であると言わなければ、男の子と間違えられても仕方のない格好だった。

「フィレーナの狼犬に会いたいと言うのは、おまえか？」

バンニルに声を掛けられた娘は、顔を上げ見返した。

「あなたは……？　私が会いたいのは、狼犬のギャッピーなんですけど」

「ギャッピーの名を知っているおまえは……だれなのかな」

「ギャッピーが来れば分かります。ギャッピーに会わせてください」
「あの狼犬は、ここにはいない」
娘は、バンニルをしばらく見つめ、軽く溜め息をついて呟いた。
「そう……でしょうね」
娘は立ち上がった。
「じゃ……どこにいるか知りませんか？」
「残念だがね……」
「分かりました。どうも」
娘は、ぺこりと頭を下げて、もうバンニルの顔を見ようとせずに歩き出した。
「どこに行く気だ？」
バンニルは呼び止めた。
娘は首を振った。
「分かりません。でも、ギャッピーのいるところを捜します。そこにフィレーナもいるはずだから」
「そんなに簡単に引き下がっていいのかね」
バンニルは、いささかあきれて言った。
この娘のあっさりとしたそぶりは、今までフィレーナに会いたいとやってきたどんな女とも違っていた。

普通なら、フィレーナに一目会わせろと一悶着、起きるはずなのだ。
「私が、あの犬がいないと言った言葉を、簡単に信じるのかね」
「ここにいないことはなんとなく分かっていました。ここにいれば、ギャッピーのほうで私を見つけてくれるはずですもの」
「ほう……いかにも自信ありげだね」
「ギャッピーの鼻は凄いんです。ギャッピーがここにいれば、私がどんな格好をしていたって嗅ぎ分けるはずです。ギャッピーが、私を忘れるはずないし、フィレーナから離れるはずもないもん……そのギャッピーが出てこないんですもの。ここにフィレーナがいるはずもない……でしょう？」
娘は、少し寂しげに、しかし、人なつっこいほほ笑みを、バンニルに見せた。
そのほほ笑みをバンニルは、前に見た覚えがした。
それは、フィレーナがときおり見せる、わけもなく寂しげな微笑を思い出させた。
フィレーナの微笑とこの娘のほほ笑みは、対になるとより似合って見える気がした。
……この娘は今までの女とは違う。ガセではなく、確かにフィレーナに関わりがある娘に違いない。
バンニルは、そう確信した。
この娘がフィレーナの狼犬ギャッピーの名を知っていることもあるが……なにより、娘のほほ笑みが、バンニルをそう信じさせた。



バンニルはギャッピーをたずねて来たリラをフィレーナの知り合いだと確信した

「おまえの名は？」
　バンニルは娘に聞いた。
「フィレーナなら私の名を知ってます」
　娘は答えた。
　バンニルは苦笑しながら言った。
「正面からフィレーナとギャッピーに会いに来たわりには慎重だな。まるで、フィレーナとおまえの間には、だれにも聞かせたくない秘密でもあるような言い方だ」
「だれにだって秘密はあるもん。……でしょう？」
「まあな……私もフィレーナの秘密を少しは知っているかもしれん。フィレーナについて、おまえと話してみる価値がありそうだ」
「そう、思います。私も……」
　娘はまた、人なつっこい微笑を浮かべた。
「フィレーナに会いたいと言わず、ギャッピーに会いたいと言ったのはなぜかな？」
　バンニルが聞いた。
「フィレーナに会いたい人は多すぎるわ。私、簡単に会えるとは思えなかった。それにここにいるかもしれないフィレーナが、私の会いたいフィレーナとは限らないもの。でも、ギャッピーと一緒のフィレーナは一人だけ……ギャッピーに会いたいと言えば、フィレーナのほうだって私がだれだか分かるはず……」

「狙いどおりにいったわけだ……少なくとも、私は会ってみようという気になった……おまえの名を確かめる前に……私の名を言っておこう」
　バンニルは自分の名を告げようとした。
　が、娘は、その名を聞く前に答えていた。
「あなたは、はぐれ蜘蛛のバンニルさん……狼のフィレーナの参謀さんですね」
「そして、おまえはリラさんか。フィレーナの闘技士時代の奥さん……名目上のね。フィレーナから聞かされている。私だけはね」
　バンニルは、暗にフィレーナが女であると知っていることを匂わせるつもりで言った。
　リラは、さり気なく答えた。
「今でもそのつもりです。あの人が『狼のフィレーナ』の指導者さんだろうと、なんだろうと……フィレーナでいる限り……あの人が嫌と言わない限りは……」
　バンニルは、軽く頷いてからリラに聞いた。
「だが、なぜ、おれをはぐれ蜘蛛のバンニルだと……？」
「そんな気がしていたんです。なんとなく、フィレーナが気を許しそうな感じのおじさんだから……」
「気を許しそう……？　フィレーナが？」
「ええ……たぶん」
　リラは微笑んだ。

リラは、首都ボーを抜け出してから、フィレーナを追って南部海岸地方に辿り着くまで、携帯通信電算機で「狼のフィレーナ」の情報を追い続けていた。
当然、作戦参謀格のはぐれ蜘蛛のバンニルの名前も情報の中に入っている。
南部海岸地方まで、リラがどんな苦労を経てやってきたか、リラの格好が物語っていたし、リラ本人も語る気もなかった。
けれど、フィレーナの回りにいる人々がどんな人物なのか想像するのがつらい旅の間のわずかな楽しみだったのは確かだ。
「いつも考えていたんです。バンニルさんってこんな人だろうなあって……私の知っている人にきっと似ているんじゃないかって……」
「その人は、おれのようなやつだったかな？……」
「かも……」
「だったらそうとう扱いにくいやつだろうな？」
「お酒……飲みます？」
リラが、いきなりそう聞いた。
「ん？……少しはな」
「たくさん……飲んじゃいます？　死ぬほど飲んじゃいます？」
リラは、たたみかけるように言った。
「それほど飲めたら、今ごろおれは生きちゃいない。飲んでごまかしたい問題は山ほどあるの

でね」
「死ぬほど飲めない？」
「残念ながらそこまでばかになりきれない」
リラは、ふっと溜め息をついて、笑った。
「よかった。じゃあ、フィレーナにとってバンニルさんは扱いにくい人じゃないわ。あのおじさんよりは、きっとまし」
リラは、バンニルの中に、ネストを思い浮かべていた。
「死んだのか。そのおじさんは」
リラは、コクリと頷いた。
「もし、生きていたらたぶん、フィレーナが一番会いたがってる男の人だと思う……」
そして、黙ってうつ向いた。
リラの瞳から、じわっと涙が溢れ、泥に汚れた頬を、伝って落ちた。

＊

ネストは死んでいるはずだった。
ネスト本人も、そうなって仕方ないと半ば諦めていた。
なにしろ、メガデラシーナの墓地でネストの身体を貫いた硝子矢は、意識があるうちに数えただけで十本を越えていた。
酒で麻痺した感覚が、当然、身体の受けるはずの激痛を思いのほか、和らげてくれているら

しいのが、儲けものだった。

鈍い痛みが、身体中を覆いつくして、むしろ心地よさすら感じていた。

……これで、すべてサヨナラだとしたら、死ぬのもまんざら悪くない……

そう思いながら、地面に膝をついた瞬間、ネストの意識は途切れた。

そのままのはずだった。

ネストが死んでしまったのなら……。

だが、次の瞬間、ネストの身体の内側から熱っぽい風が吹き込んだ。

まるで、身動きできないまま、電子レンジの中で焼かれているようだ。

外から炎を当てられるのではなく、内側の細胞から沸騰していくような、いてもたってもいられない、いらいらとした焦燥感……いや、それは感じではなく、実際に体内の水分が吹き飛んでいき、かさかさに焦げていく、いがらっぽい内側からの乾きだ。

そして、身体中を無数の細かい針で突かれているような、かゆみとも痛みともつかぬ膚ざわり。それは、皮膚だけでなく体の内側からも襲ってくる。

まるで、内臓から脳の内側まで毛足の荒い刷毛で、まんべんなく触られているようだ。

もしも、自分の体を動かすことができるなら、ただちに細切れにして、そのひとつひとつの感触を擦り潰してしまいたい……。

……おれをばらばらにしてくれ!……

頭のてっぺんから足の先まで全身を口にして、絶叫したい衝動に身悶える……。

それは、ネストが何度も体験した感覚だった。

そして、これだけは二度と味わいたくないと思いつつ、何度も繰り返していた感触だった。

酒びたりになった細胞から、アルコールが抜けていく禁断症状だった。

いくら屍体から酒が蒸発していくといってもこっちは死んでいるんだ。死ぬときぐらい、こいつは勘弁してもらいたかった。

ネストは、呪う相手もなく、頭の中で何かを呪い、わめきつづけた。

畜生！　こんな目にあわすやつはだれだ！

だれでもない呪うべきは自分だ……。

こんな状態がいつまで続く？……まさか、永久に？……そりゃあない……それじゃ、地獄だ……いや、こいつは本当におれが死んだ先の地獄かもしれん……。

死後の世界など信じたことのないおれだが、これが死後の地獄だとしたら、おいおい、死ぬのは、そうとう考えものだぞ……。

ネストは自分でいささか、みっともないと呆れるほど、慌てた。

……たまらん。おれは死ぬのを止めたい。返せ！　戻せ！　死ぬのは待っただ！……

そして、身悶えと、声にならない絶叫に疲れ果てた末に、オブラートで包んだ鈍い幕のような感覚が、頭を覆った。

頭中に雲がかかり、何もかもがけだるく、何も考えたくない、何も感じたくない、虚脱の時だ。

これも、ネストにはお馴染みの感覚だ。
おいおい、この気分まで味わわなきゃならんのか?
それは、アルコールが体から完全に消えた証拠といっていい気分だった。
この、酒が抜け切ったときに、ネストが決まって襲われる居場所のない宙に浮いたような気分を、人によっては、酒が抜けてすっきりしたというが、ネストにとっては、無駄に生きているように感じる空しい時だ。生きている時間で一番嫌な時だ。
酒による頭の麻痺が消え去ったとき、あまりに頭がクリアになりすぎて、感じるものが多くなりすぎて頭が重くなり、逆に何も考えるのを止めようとして、何をしたらいいのか分からなくなって力が抜けてしまうのだ。
この状態が一週間も続くと、何をしたらいいのか決めるために、また、酒が欲しくなる。
……それで、おれからは酒が切れない。
ネストは、そこまで考えて、我に返った。
……待てよ。ここが、死後の世界だとしたら、酒を飲もうにも、バーも酒屋もあるはずがない。これが続くんじゃ、いっそ死んだほうがましだ……
ネストは、すでに死んだ気でいながら、さらに死にたくなった。
無駄とは思ったが、自分の手を首に持っていった。
自分に首があれば、自分で締め殺そうとしたのだ。
指先に首筋を感じた。

首がある。そして、首筋を流れる脈の動きを感じた。
……脈？……ということは……おれは……生きている？……
ネストは、それまで閉じていることすら忘れていた瞼を、そっと開いてみた。
いきなり、目に光が飛び込んできた。
それは、淡い明かりだった。
どうやら、窓から差し込んでくる月の光のようだった。
その月が、三つあれば、ここが地獄でも天国でもないデビス帝国支配の現実の世界なのだが、窓辺に行きそれを確かめる気力はまだなかった。
ネストは、かろうじて首を曲げてあたりを見た。
何もない小さな部屋だった。
あるとしたら、ネストの寝かされているベッドだけのようだった。
ネストは、寝たまま自分の身体に触ってみた。
身体中に開いているはずの硝子矢の跡は、まるで消えていた。
ネストは自分自身に向かって照れ臭そうに呟いた。
「生きているらしいな……」
だが、なぜ……どうして……どうやって……おれは生きている？……そして、ここはどこだ？
おおよその見当はついていた。
帝国は、まだ、おれを生かしておくつもりらしい。

メガデラシーナの墓場で一度死んだおれの身体を、最新の帝国医学で蘇生したに違いない。できそこないの優秀種のおれを……。

ネストは苦い笑いを漏らした。

硝子矢が体を貫いた瞬間まで、殺されていいと思っていた。

だが、生かされたと知った今は、違う。

……帝国よ……おれを生かしていいのかな?……

帝国の現実から、浮き草のように漂い逃げていたおれは、いいかげん眠くなっていたのだ。酒にまみれて夢ごこちで、この世からサヨナラしていいと思っていたのだ。

だが、ご丁寧に禁断症状の苦痛まで付録をつけて、こうして生かされたおれは、生きていく目的を見つけねばならないだろう。

一度死んだおれは、二度と同じ死に方をする気はない。

……帝国さん、おれは元気に怒り出すだろう……

眠りたがっていた男を、起こしてしまった報いは、それなりに受けてもらう。

しかし……。

とりあえず考えるのはここまでにした。

……どうやら、今は夜らしい……生きているなら眠ることもできるだろう……

墓場で、硝子矢を浴びてからどれだけの時間が経っているのか知らなかったが、ネストの神経は酒の禁断症状からの離脱で疲れ切っていた。

その日のネストは、自分が生きていることを確かめただけで、深い眠りについた。
眠りから覚めたら、ネストは、帝国に肉薄した新しい旅を始めるつもりだった。

＊

ネストの見た同じ月の光を浴びて、フィレーナは砂漠を歩いていた。
砂漠に出て十日が経っていた。
できる限り節約していた食料も水も尽きていた。
優秀な狩人であるギャッピーが食料を調達しようとしても、獲物になる生き物自体が、不毛の砂漠には見あたらなかった。
動くものといえば、風に舞う砂塵と、刻々と形を変える砂の海の風紋だけだった。
ただ、生き物の存在を感じられるとしたら、三日に一度ぐらいのわりで、かすかに砂の上に記された曲がりくねった小さな溝のような物を見つけたときだけだった。
おそらく、蛇のような生き物が砂の上を動いた跡なのだろうが、それもいつのことか見当もつかず、一陣の風であっという間にかき消されてしまう、はかない痕跡にすぎなかった。
体力の消耗を考えて、炎天下の昼間の移動は控えたものの、十日目ともなれば、フィレーナの歩みは、疲労の限界を越えていた。
月の光を浴びて、青白く冷たく光る砂の海をフィレーナは喘ぎよろけもつれながら、ただ意志の力だけで足を動かしているといってよかった。
ただ、少し後ろを、つかず離れず見守っているギャッピーの足取りだけは、ときおり、立ち

止まって大きく息を吐く他は、フィレーナに比べて遥かに確かだった。
それは、果てしない荒野を当てもなく旅することに慣れた孤独な狼犬の、人間とは桁違いの能力だった。
フィレーナは、そんなギャッピーを振り返りながら思う。
……凄いな。とてもかなわない……
こんな敗北感は初めてだった。
奴隷だったフィレーナだが、人間としては、帝国人はおろかどんな人間に対しても感じたことのない、まるで手の届かない能力への敗北感だ。
だが、フィレーナもギャッピーも苛酷な砂漠の中を歩いている生き物であることに変わりはない。
砂漠はどんな生き物に対しても、乾きによる死をちらつかせる冷たい態度を変えない。
どんな生き物に対しても砂漠の厳しさは同じ条件なのだ。
人間だから砂漠に弱いとは思いたくなかった。
比べようのない動物の能力の差を、なぜかフィレーナは認めたくなかった。
二つの月の光は、砂漠を行くフィレーナとギャッピーの二つの生命を分け隔てなく浮かび上がらせている。
……僕だってギャッピーと同じ動物だ……ギャッピーに負けたくない……
その気持ちが、ぎごちないフィレーナの足取りの支えになっていた。

やがて、三つの月のそれぞれが、砂の海の向こうに沈むと、一瞬の闇(やみ)の後、地平の向こうが爆発(ばくはつ)したかのように白熱する。

それも一瞬、あたり一面は、みるみる赤銅色(しゃくどういろ)に燃え、巨大な太陽がすべてを焼きつくさんばかりに浮かんでくる。

……また朝だ……

フィレーナは、ほとんど絶望的な気持ちで、ギャッピーを振り返る。

……この熱砂の中で、あと何日、生きられるのか……

いや、今日の日光次第では、身体中の水分を抜き取られて完全な干物になってしまうかもしれない。

ギャッピーはフィレーナを見返すと何も答えず、いきなり走り出した。

朝になると、いつもギャッピーは同じ行動を取る。

砂漠の中の日陰を見つけて駆けていくのだ。

フィレーナは、力を振(ふ)り絞(しぼ)って、後を追った。

転がるように砂丘を滑(すべ)り降りると、岩場が見える。

干からびて化石化した木が、岩場に寄り掛かるように倒れていた。

その隙間(すきま)に、日光を避けるわずかな影ができている。

フィレーナは、ギャッピーを抱き締めるようにして、日陰にうずくまる。

「お休み……夜まで生きていたらね……」

その台詞を言い切らぬうちに、疲れ切ったフィレーナの身体を、泥のような睡魔が襲う。
ギャッピーは、フィレーナが寝入ったのを見届けると、ゆっくりと頭を下げて目を閉じた。
どれほど、眠ったろう……。
フィレーナは、聞きなれない音を耳にして目を覚ました。
かすかな砂の動く音だった。
それは、フィレーナの太腿のすぐそばに聞こえた。
フィレーナは目をやった。
蛇がいた。
赤い舌を出し、ゆっくりととぐろを巻き出した。
頭の上に二本の角のような突起がある。
それは、フィレーナが闘技士養成所で見たことのある蛇だった。
むかし、闘技に使われていた動物……フィレーナが見たのはアルコール漬けの標本で、ほとんど絶滅したといわれていた蛇だ。
その蛇の毒は、一咬みで一瞬のうちに、数百人の人間を殺す力があるといわれていた。
「百人コブラ」……確か、そんな名前がつけられていた。
闘技士のあだ名によく使われる名前だった。
「百人コブラ」なんて闘技士とは、闘ったことはなかったが、まさか、その本物にここで会うとは……。

フィレーナは、息を潜めて剣に手を伸ばした。
蛇は、かま首を、とぐろを巻いた身体の上に乗せたまま動かない。
今だ！
フィレーナは、剣の先を蛇の首に突き立てようとした。
だが、一瞬早くそれを止めるものがいた。
ギャッピーが、フィレーナの手首を軽く咬んだのだ。
……どうして？……
フィレーナの剣が、蛇のそばの砂地に落ちた。
フィレーナは、蛇が反撃に出る一咬みを予想して思わず目を閉じた。
だが、蛇は少しだけかま首をもたげたが動かなかった。
……馬鹿な……なぜだ……
フィレーナは呆然として蛇とギャッピーを見較べた。
ギャッピーは何ごともなかったように、横たわった。
そして、目を閉じて眠り始めた。
蛇も眠ったように動かない。
静かだった。
だが、そのとき、フィレーナは回りに他の気配を感じた。
それも、無数に感じられた。

フィレーナは、回りの日陰の中を目をこらして見た。
そこに、さまざまな虫がいた。
頭上の狭い日陰には身を寄り添わせるように、小さな蛾や蝶や蚊の類が羽を休めていた。
足元の日陰には、小指の先ほどの名も知れぬ甲虫や、むかでやうじのようなものが数え切れぬほどいた。
どれもこれも眠ったように動かない。
かすかに震える触覚だけが、生きていることを証明していた。
信じられなかった。
だれもいない……何もかも死に絶えていると思っていた砂漠に、これほどの生き物がいようとは……。
そして、今、同じ日陰で身を寄せ合って眠っている。
何もかも干からびさせて死へ誘う強烈な日の光から、それぞれの命を守るために……。
ここには、敵もない。味方もない。食うものも食われるものもない。
共通の脅威から身を守る日陰があるだけだ。
砂漠という地獄の中で、生命が休息し眠ることのできる数少ない場所の一つがここなのだ。
彼らも、すべてを焼きつくす日の光が消えた夜は、互いに生存のための苛酷な戦いと競争を続けるに違いない。
だが、今は休む時だ。眠る場所だ。

ここでは、戦いも生存競争もいらない。

こんな時と所で、まだ闘うことを忘れない生き物がいるとすれば、それは、人間だけなのかもしれない。

が、ここには人間は、いない。

フィレーナだって、今は日の光から身を守る動物にすぎない。

なぜ、ギャッピーが、蛇を殺すフィレーナを止めたのか、フィレーナには分かる気がした。

砂漠には、僕と同じ生き物がこんなにもいる。

フィレーナはなんとなく嬉しかった。

そして、小さな生き物たちを押し潰さないように、そっと頭を岩に寄せ掛け、目を閉じた。

やがて、フィレーナの寝息が、他の生き物たちと同じように、聞こえ出した。

夜がやってきた。

フィレーナが目覚めたとき、かたわらでとぐろを巻いて眠っているはずの蛇は、もういなかった。

かすかな物音をさせて、生き物たちが次々に岩場の陰から出てゆく。

夜が来たからといって、岩場でいきなり生存競争を始める不粋な生き物はいなかった。

明日も生き物たちの休息の場になる岩場を、死骸で汚すような本能を、どの生き物たちも持ち合わせていないようだった。

やがて、岩場から生き物の気配が消え、フィレーナとギャッピーも旅を続けることにした。

三つの月に浮かび上がった砂漠は、物音ひとつせず、凍りついたように冷え冷えと広がっている。
何もかも死に絶えて見える砂の連なり……。
だが、フィレーナは知っている。
この青ざめた砂の海にも、必死で生きている生き物たちのいることを……。
フィレーナは、何気なく夜空を見上げた。
三つの月の光に負けそうになりながらも、数限りない星が瞬いている。
そのけなげな瞬きの一つ一つが、フィレーナには、砂漠に生きる生き物たちの命、ひとつひとつに思えた。
フィレーナは、星に胸の中で語りかけた。
……僕はこの砂の中に一人じゃない……。もちろんギャッピーがいる。……でも、二人だけでもないよね……ほら、こんなにたくさん生きているじゃないか……
帝国の言い伝えで死者を星に譬えるのは、よくあることだった。
だが、フィレーナは、今、その星を生き物として意識していた。

＊

「あれは……?」
月光を受けて、砂丘にそそり立つものが見えた。
自然の風化によってできたものには思えない。

その日の夜を徹して歩き続けたフィレーナとギャッピーは、砂に埋もれ掛けた塔のようなものを見つけたのだ。

フィレーナは、我を忘れて走った。

近づけば近づくほど、それは人工的に作られたものに違いなかった。

砂地をかきわけて入り口の扉を見つけたとき、フィレーナの胸は高鳴った。

だが、それは一瞬だった。

塔の中の床には、硝子の破片が至るところに落ちていたのだ。

それは、塔の頂上に備えつけられた鏡玉の残骸だった。

その塔が、陸の灯台であることは、確かだったが、その灯台がどの方角をフィレーナに指し示してくれようとしていたのかは分からなかった。

……ここまでだってのかい……

みるみる力が抜けていく。

フィレーナは、塔の頂上にずるずると座り込んだ。

やがて、また、灼熱の太陽が昇ってくる。

けれど、フィレーナにはもう、日陰に隠れる気力はなくなっていた。

フィレーナは、ぼんやりと明るくなっていく砂漠を見下ろしていた。

赤銅色の地獄……この光景は何度目だろう。

でも、もう、今日で見納めかもしれない。

虚ろなフィレーナの瞳に砂丘が広がっていく。
だが、フィレーナは、はじかれたように立ち上がった。
砂丘には向こうがあった。
朝日に赤く染まってはいたが、それは緑だった。
木々だった。
森だった。
それも、鬱蒼とした密林だった。
そして、遠く密林のただなかに、緑の塔が立っていた。
その先端が、朝日を浴びてきらきらと光っていた。
それは灯台……密林という緑の海に立つフィホーパー（海の希望）の、鏡玉の反射に違いなかった。

＊

波浪がサフィラ斜型平野から突き出した岬を激しく咬み砕いている。
「この灯台の光が指す方角にフィレーナは、旅立った」
バンニルは、リラを岬にあるフィロセラの灯台に案内した。
「私も行きます」
リラは北西の方向を見つめながらきっぱりと言った。
「無茶だよ。おまえが女の身で、ここまで無事に来れただけでも奇跡といっていい。ここで、

われわれと一緒にフィレーナを待ったほうが安全だ」
「いいんです。だって、たいして無事じゃなかったもの。今までだって……フィレーナと会ってからというものずっと……私、ご無事にいったとはいえないもん」
　リラは、屈託のない微笑を浮かべて言った。
「そうはいかんよ。これからはな。おまえさんが、フィレーナの妻だか夫だか知らんが、フィレーナにとって大切な人であることはよく分かった。むざむざ、危険に身を晒すような真似はできん」
「ありがと……でも、私のことは私が決めるんです。私、フィレーナと会って、きっと人生、めちゃくちゃ変わりました。フィレーナがいなければ、今でも接待用奴隷でそこそこ生きているかもしれない……けっこう奴隷でも、それなりにだれかに抱かれちゃって幸せがって生きてたかも……でも、フィレーナと会っちゃったんです。で、今の私ありなんです。これから先も、フィレーナがいなければ、私が、私でなくなっちゃうような気……します……うん」
　リラは、自分に言い聞かすように頷いた。
「フィレーナは、ここに帰ってくると言って出ていった。待つべきだと思うがね」
「あの人がそういっても、当てになんないもん。あの人がその気でも、周りがそうしてくれないかもしれない。こうやってパンニルさんと話している今だって、どこかであの人、命がけ、やってるかもしれない。いつ、私に無断であの世に行っちゃうか分かったもんじゃないもん。そんな人を待つだけしかできないなんてたまんない……でしょ？」

リラは、バンニルの顔を覗き込むように聞いた。
リラのひたむきな瞳を見ると、バンニルは何も言えなくなりそうだった。
「しかし……」
「しかしもかかしもない。私には足があるだけ……フィレーナを追いかけて会えなければ、それは、運がないってあきらめがつくわ。でも、待ってて会えなければ、悲しいだけだわ」
「行き違いの恐れもある」
「それも運だとあきらめられる。一生、行き違ったら、そもそも最初にフィレーナに会ったのが行き違いだと諦める。そう、決めたんです。私」
バンニルは、頷くしかなかった。
「せめて、護衛をつけようか」
「目立つだけ、正直、足手まといです……それでお酒でも飲まれたら最悪。私、これでも女の子だもん」
「反乱軍の男どもは、かえって危険か……」
バンニルは、苦笑した。
「そうは言いません。でも、私って、どっちかっていうと美人でしょう?……どんな男の人だって、その気にならないとはいえないでしょう? 私が美人ってこと、こういう状態の時は、そうとうやばいんですよね……うん」
自分で自分に頷いた。

バンニルは思わず呟いた。
「よく言うな」
「口はただ。それぐらい言わせてもらわなきゃ……とっても、フィレーナなんかにつきあえないもん」
「おまえさん、フィレーナといるときもそんな感じなのか？」
「もちょっと、言いたい放題……かな？」
「さぞや、賑やかで楽しかろう」
バンニルはリラを行かせることにした。
この娘なら、フィレーナに追いつき、本当に会えるような気がしてきたのだ。
「旅に入り用のものを言いなさい。できるだけ用意しよう」
「大したものはいりません」
あっさりそう言ってから小首をかしげ少しだけ考えた。
「うーん」
「言ってごらん」
「硝子硬貨が、少しだけあれば邪魔(じゃま)にならないかな？」
「少しだけか？」
「多ければ、もっと邪魔になんない……かな？」
リラは、ぺろりと舌を出した。

次の日、リラは、オルカの軍に現れたときと同じ着の身着のままの格好で、フィレーナの後を追った。

多ければ多いほどいいと言っていた金は、実際には服に縫い込める程度の小額しか受け取らなかった。

ただ、情報を集める携帯通信電算機だけは、回路や電源をできるだけ強化して、小脇のずだ袋に入れ、しっかり、握り締めていた。

北西へ北西へ……旅は続いた。

狼犬を連れた若者の情報は、どんな小さなものも聞き逃す気はなかった。

リラは、必ずフィレーナを見つけ出す気でいた。

＊

それぞれの人々のそれぞれの旅が、始まっていた。

第2章

目覚めて……そして……

フィレーナは、砂漠の果てに辿り着いた。

そこは、砂の侵略をがっちりとくい止めて広がる密林だった。

密林の木々は、葉は、草は、みずみずしく青かった。

その緑は熱と乾きの砂の海が目の前にありながら、日の光にやつれて枯れ衰えた様子はかけらほども見えなかった。

その密林は、まるでこちこちにひび割れた土色一色の油絵の上に、今さっき、新しい筆と封をきったばかりの緑の絵の具を塗りたくったように、いきいきと濡れて見えた。

密林と砂漠の境は、植物の持つあふれんばかりの水気と砂の乾きがせめぎあい、激しく陽炎立っていた。

むせかえる水蒸気と緑の匂いに、飛び込んだフィレーナは、目を閉じて大きく伸びをし空気を吸いこんだ。

からからに乾いた身体に……喉から、胸から、腹から、内側からじわじわと水気がしみこんでいくのが感じられる。

フィレーナの身体のありとあらゆる細胞が、水分をむさぼるように吸いこんでいるのが分かる。

そして、潤いを取り戻すやいなや、本来の果たすべき役目を取り戻そうと、一斉に、活動を始めた。

かさかさの皮膚は、フィレーナの身体を潤した水気を、次々に汗にして流し始める。

フィレーナの身体は頭の髪の先から、足の爪の先まで、身体の中からびしょぬれになった。

泣きたくなんかないのに、目から涙が迸り出て止まらない。

一気に機能を回復したフィレーナの身体は、まるで、栓の壊れた蛇口のように、水気を出し続けた。

なに……構いはしない。

水分は、周りの空気の中に、溢れている。

いくらでも吸収できる。

そして、むせかえるように生の息吹きを感じる空気。

ここは砂漠じゃない。

膨大な水と酸素をたたえた陸上の海……森林なのだ。

フィレーナは、密林の中に、なんの躊躇もせずに飛び込んだ。

見ず知らずの領域に踏み込むとき、フィレーナが、これほど無警戒で無防備な気持ちだったことは今まで一度もなかった。

ギャッピーも、それを止めはしなかった。
豊饒な森の空気は、しっとりと甘くフィレーナの身体を包みこんだ。
フィレーナは、地に足こそつけていたが、まるで、泳ぐように、木々と密生した蔦や羊歯の間をよろめきながら走った。
木漏れ日となった太陽の光が、砂漠での容赦のないいたぶりが嘘のように、ここでは、優しく、フィレーナの体の上ではじけている。
やがて、新しい匂いが、フィレーナの足を止めた。
豊かなミネラルと酸素を含んださわやかな水の香りだ。
それは、すずしげで、軽やかな音を立てて流れていた。
名も知れぬ巨木の剝き出しの根の間を、小さな水の流れがあった。
フィレーナは、長い間会えなかった恋人に再会した青年のように、肩を竦め、照れ臭そうに呟いた。
「いたね……会えたね」
フィレーナは、水の流れをそれと意識せずに生き物に見たてていた。
フィレーナはギャッピーに振り返って言った。
「会えたよ。水に……」
ギャッピーは、頷くように優しく鼻を鳴らした。
フィレーナは、水の流れに顔をつけた。

とろけるように、滑らかな膚ざわりだった。

そのくせ、ちりちりとした軽やかな刺激が、細かく泡だっている。

「水だね……水だよね……」

何度も何度も確認するように呟きながら、フィレーナは、水を飲んだ。

喉を、食道を、胃を、……水は……そうとも、私は水だ……とでも言いたげに、大手を振ってぐんぐん侵入してくる。

……いいさ……僕の身体にどんなにわがもの顔で踏み込んできても……僕は許すよ……君たちのなすがままさ……

フィレーナは、息が続かなくなるぎりぎりまで、水面から顔を離さなかった。

やがて、息を吸うために顔を上げたフィレーナは、水の流れに体の濡れるのを任せたまま、巨木の剝き出しになった根を枕にして、横たわった。

そして、水を飲み続けているギャッピーに、呟いた。

「僕……疲れた……悪いけど先……寝るね……」

ギャッピーは、ちらりとフィレーナを見て、何ごともなかったように水を飲み続けた。

そのそぶりは、あたりに危険のない証拠だった。

フィレーナは、目を閉じた。

水の流れが、子守歌だった。

……これほど落ち着けた気分で眠れるのは、生まれて初めての気がした。

……そう、一番、落ち着けて一緒に寝られる娘……リラといたときだって、これほど落ち着けただろうか……

フィレーナは、リラの顔を思い浮かべた。

美人というより……どちらかというと可愛い……さらにいえば、幼く、くるくると表情をかえるその顔……それも笑顔……。

でも、そのリラと別れてから三年以上も経つ……大人になったかな……あの子、いつも自分のことを、美人だ、美人だって、僕に認めさせたがっていたけれど……ほんとうに美人になって……いい人、見つけて一緒になってるかもな……きっと、幸せだよね……今のリラは……フィレーナは、ほほ笑んだ。

今のフィレーナは、リラが不幸などということは考えられないほど、水の流れの子守歌に身をまかせ満ち足りた気持ちだった。

いつの間にか、フィレーナは眠りに落ちていた。

何に対しても無防備な深い眠りだった。

そして、しばらくの間、密林はそれを許してもくれた。

フィレーナが目覚めるときまで……。

*

リラの前に砂漠が広がっていた。

通り過ぎたいくつかの灯台の向きから計算すると、フィレーナが砂漠を真っすぐ越えて行こ

うとしたのは、推測できた。

「困ったな……はい、リラは困ったです」

リラは、自分自身に呟いて溜め息をついた。

リラは自分が砂漠を渡れるかどうか、携帯通信電算機で、何度も計算した。

帝国地図局の南部海岸地方北西に横たわる砂漠の数年前の資料によれば、この砂の海は絶望的に広い……しかも、砂漠は生き物のように広がり成長するのが常だから、現在はさらに大きくなっているに違いない。

太陽の照射による砂漠の暑さ……昼夜の温度差……必要な水と食料の量……どれもこれも、女の一人旅には無理な数字だった。

いや、一個師団規模の大探検隊を組織しても、渡れるかどうか疑問だった。

まして、リラが渡るには、五百パーセントの幸運があったとしても不可能だという計算を、携帯通信電算機ははじき出した。

百パーセントの幸運だって、現実にはあるはずのない確率だから五百パーセントの確率などという数字を出されても、リラは困るしかない。

しかも、それで、結果が不可能というのだから、……ばかにするな！……と携帯通信電算機を、殴りたくもなる。

フィレーナを追いかけては行きたい。行きたいが……行けば、お馬鹿さんを通り過ぎて……馬も鹿もないただのひからびたミイラである。

……同じ死ぬのでも、自他ともに若くぴちぴちしているつもりの私が、年齢不詳のミイラになるなんてあんまりだと思うわ……

「私がついていけないこと。平気でするもんな……あいつ」

リラは、溜め息をつくしかない。

考えてみれば、フィレーナには狼犬ギャッピーという強い味方がいる。

人知の計り知れない大自然の中では、せいぜい、防水防塵の肩書きしかついていない携帯通信電算機などのデータより、自然の中で生き抜いている生き物……ギャッピーの知恵のほうが頼りになるに決まっていた。

「ハンディつけてくれますよね……」

今……リラの顔を赤く染め砂漠に夕陽が沈んでいく。

「でもね。フィレーナ……」

リラは、夕陽に向かって呟いた。

「私、あんたほど、無鉄砲じゃないけれど、待ってなさい。そのうち、したたかと言って褒めてもらうわ……」

リラは、自分が渡るには五百パーセント絶望的な砂漠も、フィレーナには無理ではないと決めつけていた。

生きていると確信していた。

ミイラになったフィレーナなど、想像もしなかった。

……砂漠の中でだけ自由にしていなさい……出てきたら、必ず見つけるわ……
リラは、砂漠を迂回して帝国の北西を目指すことにした。
それは、砂漠を直進する距離の七倍あると、携帯通信電算機は表示した。
「七倍?……上等じゃない……」
リラは、携帯通信電算機に話しかけた。
「数字だけ並べてどうすんの……お馬鹿さん……自分の才能を信じなさい。砂漠の中ではギャッピーに負けてもあんたの通信傍受能力は、帝国の三分の一を網羅できるわ。あんたの目と耳は、七倍の距離なんてひとっ飛びでしょ……頭を使いなさいね」
そして、急速に沈んでいく夕陽と、赤黒くなる砂漠の空ににっこり笑いかけた。
「世の中、真っ暗にしたって駄目だもん。狼犬を連れた若者なんてすぐに見つけちゃうもん」
リラは、いたって元気に歩きだした。
今は、ともかく明るく元気で歩くしかない。
どうせ、毎夜、一人で寝るときは、嫌だなと思っても、ひとりでに涙が出てきて泣いてしまうのだから……。
「拝啓、フィレーナ様……リラは頑固に元気です……うん。よろしい……」
リラは、そう呟いて、自分で自分に頷いた。

＊

何の音だろう。

ネストは、目覚めつつあるぼんやりとした意識の中で、耳鳴りのような響きを聞いた。
それは、押しては返し、また、返しては押し、そのひと呼吸、ひと呼吸が、妙なざわめきを胸の中に沸きたたせ始めている。
……ここはどこだ……
朦朧とした意識の中で、ネストは自分に問いかけた。
いきなり……。
……うっ……
顔中に、むせかえるような空気が吹きかかってきたのだ。
意識がはじけるように戻った。
一瞬、ネストは、そう思い、転がり落ちるように、ベッドから、飛び降りた。
……窒息する……
だが、息苦しさは、そこまでだった。
まるで、呼吸器を覆っていたベールが取れたように、喉ごしに空気がすり抜けていく。
肺の中の汚物が、みるみる洗浄されて吹き飛ばされていく爽やかさがあった。
そして、その空気にははっきりとした味があった。
ありとあらゆる匂いの成分が、微妙に入り混じった不思議な香りがある。
だが、その匂いも味も決して不快なものでなく、むしろ、上等な酒を味わったような深みのある豊饒さを感じる空気だ。

……これは?……

ネストは、思わず声をあげそうになった。

……それは、ネストが、帝国の都市の空気では、一度も感じたことのない、含有物を含めるだけ溜め込んだ自然味の空気だった。

そして、さっきから鳴り続けている音の繰り返しは、打ち寄せる海の音だということに、気がついた。

……海の潮騒……でも、なぜここにそんなものが聞こえるのか……

部屋の天井の集音機から、声がした。

「お目覚めですね」

若い女の声だった。

「取り調べかね」

ネストが答えた。

「はい。とりあえず。いろいろと」

「覚悟はしている」

ネストがそう言うと、女の声はいきなり妙なことを聞いた。

「どうやら苦痛にならないようですね……」

「苦痛?……何のことだ」

「普通の帝国人なら、この音もこの空気も不快なはずなんです」

「この音が……空気が？」
ネストは聞き返した。
「ええ……はい……この音は天候の穏やかな日の海の波が、陸に打ち寄せる音なんです。波の音は、荒れていようと、静かであろうと、帝国人の神経を苛立たせるのが、常なんです。違いますか？」
「この音が、人を苛立たせる？……」
「はい……なんとなくいらいらしませんか？……どこか落ち着かない気分になるとか……いかがですか？」
帝国の集音機器から流れる声は、いつも感情のこもっていない無表情な声が多いが、この女性の声は、妙にしたしげに語りかけてくる。
闘技が専門とはいえ、少なくとも演劇関係の脚本家の端くれであるつもりのネストには、その口調に、わざとらしい演技のようなものを感じた。
しかし、その演技に、人に媚びるような嫌味はない。
ただ、未熟でぎごちない感じなのだ。
……まるで新人の役者だな……一生懸命は分かるが、演技というもののわざとらしさが、どこか板についていないのだ。
それは、子供を育てたことのない娘が、子守りを頼まれて必死に赤ん坊をあやしている感じに似ている。

……そういえば、酔っ払ったおれを面倒見るあの娘にも、似たようなところがあったな……

ネストはリラを思いだし微笑した。

部屋に流れる女の声に、ネストはほほえましさすら感じてきた。

「どうやら、この音にいらいらしなければいけないようだね」

「そんな……無理していらつかなくてもいいんです。でも、普通ですと、いい気分ではないはずです。特に近年の帝国の優秀種には、この音が、耐えられない騒音に聞こえるはずです。不愉快な頭痛や耳鳴りに思える傾向が顕著のはずなんです。違いますか？　あなたは、優秀種として生まれた帝国人のはずでしょう？」

「いちおう、そういうことにはなっていたがね。今、おれはこの海の音には、苛立ちどころか、心地よいやすらぎのようなものを感じているよ」

ネストは正直な感想を言った。

「そうですか……やっぱり……そうなんですね」

その女の声は、勝手に一人で納得したような口調だった。

「で、その部屋の空気はどうですか……？」

「至極、快適だと言ったら、あなたは、喜ぶのかね？」

ネストが聞き返した。

「喜ぶなんて……そんな問題ではないんです」

いかにも、生真面目そうに女の声は答えた。

「その部屋の空気を、以前に体験した覚えはありますか？」
「この部屋の空気？　体験したこと？……」
言われてみれば、あるようなないような、しかし、その部屋に吹き込む空気には、妙に懐かしい気分にさせられていた。
だが、それがどこで体験した感じなのか、ネストには、どうしても思い出せなかった。
「あなたには体験したことはないはずです……たぶん……」
女が言った。
「なんの根拠でそう決めつけるのかね……だいいち先刻から質問ずくめだが、どうかな？　こちらから質問するのは許されるのかね？」
ネストが、聞いた。
「私に答えられることなら、どうぞ……構わないと思います」
女の声は素直だった。
「なぜ、私がこの部屋の空気を経験したことがないと言い切れるのかね」
ネストの質問に、女の声はあまりにあっけなく答えた。
「その部屋の空気は、十万年前の空気なのです」
「十万年前……？」
多少のことでは驚くつもりのないネストも、思わず息を飲まずにいられなかった。

「十万年前の空気……」
そう繰り返し、大きな溜め息を漏らし、ベッドに座り込んだ。
そんなネストに女の声はうろたえたようだった。
「あ……あの……驚かれました？　ご免なさい。ショックを与えるつもりではなかったんです。あんまりあなたが、落ち着いて見えたので、本当のことを言っても大丈夫だと、思って……それはそうですよね。起きてみたら、周りが十万年前の空気だなんて……だれでもびっくりするはずですよね……ご免なさい……私、どうしましょう。まだまだ、未熟なんですよね。駄目だなあ。私って……」
女の声はネストの様子に、明らかに取り乱していた。
……おやおや……なんなんだ。この取り調べは……
すぐに我を取り戻したネストは、今度は女の声をなだめるように言った。
「落ち着いて……おれがびっくりして、あんたがうろたえていちゃ、話が進まないだろう？」
「え……あ……そうですよね。ご免なさい」
「ご免なさいはほどほどにして……」
「ええ……ご免なさ……」
また言いかけて……女の声からくすっと笑いが漏れた。
ネストも、思わず苦笑して続けた。
「で……この部屋の空気が十万年前のものとは、どういうことかな。まさか、大昔にタイムス

リップさせられたわけでもあるまい？」
「ええ、この空気は十万年前のこの星の空気を再現したものです。具体的にいうと帝国都市部の普通の空気よりはいろいろな不純物が含まれているのです。ただし、古代の言葉でいうところのおいしい空気であることは確かです」
「おいしい空気？」
「ええ、今の帝国都市部の空気や水は、絶えず濾過されて有毒な不純物だけでなく不用なものを何もかも除去しています。ですから帝国の空気は純度は高いけれど、おいしいとかまずいという表現は、似合いません」
「帝国の空気は生きるために必要な空気ということかな」
「というより現在の帝国都市部の空気は、帝国人には一番合った空気のはずです。酸素、窒素、炭素、水素、空気を形成するさまざまな成分がしっかりと管理されていて、たぶん、この星ができてから今まで、今の帝国の空気ほど純粋な空気はないかもしれません」
「ならば、なぜ、昔の不純物の含まれた空気をわざわざ再現してまで、ここに十万年前の空気がなければならないのかね」
「あなたがどう反応するか調べたいからです。もう、ご存じのように、不純物の含まれた空気や水に対して、帝国人は拒絶反応を起こします。でも、あなたは、優秀種でありながら、違うようです」
「私が、優秀種に認定されたのは数十年も前のことだ。今、誕生している優秀種よりは古いタ

イプで欠陥も多いだろう。だいいち、私の年ごろでは、海や汚れた空気を今ほど苦にしない優秀種は、少なくない。今なら、私など優秀種どころか普通種の認定もあやしいもんだな。種で選別するなら、私は、自分を不純種と呼んでいるがね」
「それって言えるかもしれませんね。優秀種の中から生まれた不純種ですか……」
感心したように呟くので、ネストはいささか白けた。
そんなネストの気持ちを見透かせるはずもなく女の声は続いた。
「確かに、優秀種とは別の種にしたほうがいいかもしれません」
女の声は続けた。
「ここ数十年の帝国人は急速に進歩していますから。そのうち、不純な空気の中で、帝国人は生きていけなくなるかもしれません」
「それが、理想だろう？　純粋なる人間は、純粋なる空気と水に育つ」
ネストは、帝国の使い古された標語を言って、肩を竦めた。
「帝国の理想はそうです。そして、帝国人種の進化進歩もそこを目指しています」
女の声は、そう言った。
そして、少し間をおいて小さく呟いた。
「でも純粋な空気が本当の空気でしょうか……純粋な水が本当の水でしょうか」
「何が言いたいのかな？」
ネストは聞き返した。

「その部屋に流れている十万年前の空気は、確かに不純です。でも、その不純物はみんなこの星が作り出したものです。この星が本来持っていた空気です。不純物が含まれてはいても、人間の文明が汚染する以前のこの星本来の空気です。帝国都市部の空気や水が、人間の生存に不必要な不純物を取り去った理想に近いものだといっても、それが、本当の空気と言えるでしょうか？」

……妙なことをいう女だ……と、ネストは思った。

少なくともここは帝国の施設のはずだ。

しかも、ネストは帝国への反逆を扇動していた男だ。

そんなネストに帝国の現状に疑問を投げかけるような言葉を吐く人間がいるとは思えなかった。

ネストは、声の主に会いたくなった。

ネストは天井に向かって言った。

「このまま、集音機相手の会話をさせる気なのかね」

「え？」

「あなたの声が電算機の合成音でないのなら、会って話したいものだ」

「私には、あなたの姿が見えています」

「映像機で見張られているのは分かっている。だが、会話というものは、声だけで交わすものではない。それともこれは、何かの尋問かね」

「……」
女の声は黙った。
やがて、女の声が聞こえた。
「これは会話です。患者と心理病理観察看護人との……」
心理病理観察看護人……ネストの聞いたことのない職名だった。
「私は病人というわけか。で、あなたは心理病理観察看護……舌を咬みそうだな」
「この病院にしかいない特別職ですわ。医学の発達していない時代には、ただ単に看護婦と呼んで、女性に多い職でしたそうですけど……今は、医者で処理しきれない病気を担当するのが役目です」
「医者で治せなければ、死ぬか殺されるだけと思っていたが……」
「殺したくないのです。帝国上層部は、あなたを……」
「帝国上層部がね……あなたも上層部の一員というわけだ」
「いいえ……ほんの使い走りです……でも、殺したくないという気持ちは一緒です」
ネストは、肩を竦めて言った。
「お手柔らかに生かしてほしいものだ」
そして、女の声に聞いた。
「あなたはここを、病院と言ったね……」
「首都ボーの帝国人民心理更正病院です……」

女の声は、あっさりと答えた。
その声に、病院の名を隠そうとする気配はまるで見えなかった。
だが、病院の名を聞いたネストは、思わず溜め息をついた。
「心理更正病院……」
女の職名の心理病理観察看護の名は知らなかったが、首都ボーの住民でこの病院の名を知らぬ者はいなかった。
更正とは名ばかりで、社会生活に不適合な心理や精神障害を持った帝国人民を、隔離して収容する病院だった。
「一度入ったら、二度と出ては来れない病院か」
「この病院に入ってきて、出ていった患者さんは確かにいません……でも、人が噂するほど、ひどいところではないと思います。少なくとも私はそう思っています」
「ひどいかどうか、決めるのは患者の私だろう……あなたと、こんな部屋の中で集音機越しに話している状態が、まともな待遇と呼べるかな？」
ネストが、皮肉っぽく言った。
「それはそうですけど……少しだけお時間、ください」
女は、いかにも困ったように呟いて、しばらく黙った。
が、すぐに、明るい声が、聞こえてきた。
「あ、許可がでましたわ……ネストさん」

「許可……？」

ネストは、聞き返した。

「あなたと直接、お話しできる許可です……今まで許可を待っていたんです。いまさらこんなことを言うのは、とっても失礼なんですけれど、あなたが、目覚めてからの動きと会話を、電算機で分析させてもらっていたのですが……」

ネストは、驚いた様子もなく肩を竦めた。

「ここが、心理更正病院なら患者の分析は当然だろうな……で、その結果は……？」

「あなたは、落ち着いている。心理異常は認められない。それに……」

女の声は、くすっと笑いをもらした。

「何かね？」

ネストが聞いた。

「女性を見てむやみに襲いかかるような危険なタイプじゃないそうです……少し、皮肉屋さんですけれど……」

「それも電算機の分析結果かね」

「あ……これ、ご免なさい。私の個人的な意見でした」

そのとき……部屋の扉が開いた。

空の車椅子を押した女がいた。

「はじめまして……あの……私、ネストさんを担当する心理病理観察看護の……名前はテスと

言います」

おずおずとそう言ってから、ちょこんと頭を下げた。

ネストは呆気に取られて女を見つめた。

帝国の病院に勤める医療関係者には見たことのない仕事着だった。

帝国の医者が着ているのは、ほとんどが死をイメージさせるような黒衣なのに、この女が着ている仕事着は淡い空色だった。

だが、それよりなによりネストが驚いたのは、その女が心理病理観察看護という無骨な名称にあまりに似つかわしくない娘だったからだった。

ともかく美しい娘だった。

仕事柄、女優や接待用女奴隷の、いわゆる美女を見慣れているはずのネストが、あきれるほどの整った顔立ちだった。

美しい女という表現には、当然、趣味や好みが作用する。

だが、個人の趣味や男女の差を問わず、だれもが認めざるをえない美しい顔立ちの娘がいるとしたら、まさにこの娘がそうだと……ネストには思えた。

そして、その顔に化粧気は一つもなく、あるがままで十分過ぎるほど美しい……しかもおそらく二十歳をわずかに過ぎた……女性の若さのぎりぎりの短い円熟期にいるように見えた。

さらに、ネストを見つめるその娘の瞳は、まるで子猫の目を思わせるように、いたずらっぽく、若さの好奇心に満ちているように見え、その顔をただ美しいだけでなく、見事に個性的な

なんです。よろしくお願いします」

ものにもしていた。

「君は……君があの声か……」

ネストは部屋の集音機のある天井を見上げた。

「はい……不手際なことを言ったらご免なさい……私、本当の患者さんを担当するのは初めて

テスと名乗った娘の猫の目が、今度はすがるようにネストを見つめた。

ネストは、テスに見つめられて、なんとなく自分が照れているのを感じた。

女性を前にして、こんな気分にさせられるのは、この数十年、記憶になかった。

いや、生涯なかったかもしれない。

あるとしたら遠い昔、十代の青くさい一時期にあったかもしれないなあ……と、ふと、ネストはそう思い、かなり慌てた。

……よせよ……自分を幾つだと考えている……？

ネストは、照れくささを振り払って娘に言った。

「よろしくお願いするのは患者の私のはずだがね」

テスは、真顔でこくりと頷いた。

「あ……そうですよね……私が患者さんに面倒見てもらっては……困りますよね……」

そして、ふーっと溜め息をついて言った。

「駄目だ。駄目だ。私、あがってしまって……初めてで……」

「だれにでも初舞台はある……」
妙なフォローの仕方だとは思ったが、つい口に出てしまった。
しかし、それでも効果はあったらしく、テスの頰に微笑があふれた。
「そうですか？　そうですよね？……ありがとうございます。あの、気分がよろしかったら、病院をご案内しますけれど……どうぞ」
テスは車椅子を前に出した。
「車椅子……？　私は歩けるつもりだがね」
「無理はしないでください。長く寝てらしたから、体力は回復しているにしても、きっと歩くのに慣れていません。さ……どうぞ」
テスは、ネストにしきりと車椅子を勧めた。
「私の体を、気づかってくれているというより……どうしても、それに乗せたいようだね」
「え……？　私ってそんなふうに見えるんですか？……」
テスは、肩を落としてうつむいてしまった。
「未熟な看護って……親切の押し売りに見えるのですよね」
ネストは、テスのあまりの落胆ぶりに慌てた。
「いや、そうは見えないが……」
「いいえ、ネストさんのおっしゃるとおりかもしれません……私、本当の患者さんを担当するの初めてだから……初めての患者さんは……どうしても、車椅子に乗せて病院を案内したく



ネストは集音機の声の主テスがまだ若く大変美しい女性であることを知って驚く

て……それが、ええ……いかにも心理病理観察看護やっておりますって感じで……そんな気分にひたりたくて……車椅子を勧めているのかもしれません。こういう態度になってしまうのは……患者さんの気持ちを、少しも考えていないことなのかもしれません」
テスは、今にも泣き出しそうだった。
ネストはたかが車椅子で、この娘の涙など見たくなかった。
「乗ろう……車椅子に」
「いいえ、必要ないのならいいんです」
「いや、いいんだ」
ネストは、車椅子に乗ろうとした。
そして、一歩踏み出すといきなり膝から崩れ落ちそうになり、車椅子に縋りついた。
関節が笑っていて、思うように動かなかった。
テスの言うように、足が歩くのに慣れていなかった。
長い間寝ていたとはいえ、ネストは自分の体力の衰えにあきれ果てて呟いた。
「必要なようだ。少しの間、車椅子が……」
「よかった。やっぱりお役にたてて」
テスが、ほっとしたようにほほ笑んだ。
「そのようだ……」
だが、ネストは、よかったとはとても思えるはずもなく、憮然として車椅子に座った。

＊

輝くような木々の緑。
咲き乱れる花。
頬をすり抜けるそよ風。
涼しげな音を転がして流れる小川……。
抜けるような青空。
降りそそぐ日の光。
さらに、丘の向こうに白い砂浜と青い海が広がり、背後には霞のかかった、遠くに白い雪を被った山なみが続いている。
病棟の長い廊下の向こうは、別の世界が広がっていた。
息をのむような大自然の景観がそこにあった。
それはほとんど絵画の世界に思えた。
それも、この星の古代の絵画、今は美術館ではなく博物館でしか見ることのできない、印象派の画家が描いた田園そのままのような風景だった。
「ここが心理更正病院……？」
テスの押す車椅子に乗って部屋の外に出たネストは、目を見張らざるをえなかった。
「ええ……ここが、中庭です」
「中庭？」

……首都ボーの病院に、こんな広い中庭があってたまるか……。
そう言いかけて、すぐにネストは、この風景ができ過ぎなことに気がついた。
まるで、古代の遺跡の浴場の壁画のように、きわめて俗っぽい構図に思えたのだ。
だいいち、これほど豊かな自然が、現在のこの星に残っているとは思えなかった。
ないはずの風景があるとしたら、……考えられるのは一つしかなかった。
「立体映像か」
テスはあっさりと頷いた。
「ええ、そのとおりです。……でも、中庭と、それを取り巻く病院施設の壁に映された映像部分の境目……ほとんど分かりませんよね？」
テスは背後に浮かんで見える操作ボタンのボードを押した。
たちまち、波打ち際から向こうの広い海と、背後の景観が消えた。
青い空は、頭上高くを覆っている霧に映されたものだった。
太陽に見えたものは、おそらく天井に備えつけられた移動式の巨大な発光電球のようなものだった。
一瞬のうちに、まるで特殊撮影の合成画面の種明かしを見せられたように、視界の上部がぽっかりと、白い壁の建物と霧の天井になった。
それでも、かなり広大な敷地が、自然を模倣した中庭のために使われていた。
「けっこう、ここの中庭、広いですよね。立体映像の部分がなくてもかなり自然の風景らしい

でしょ？　少なくとも、あの発光球から出てくる光の成分は、十万年前の太陽光線と同じはずですし、草も、木も、水も、波打ち際だけの海さえ、十万年前の本物その物といえると思います。箱庭には違いありませんけど……あ……それからこの空気もね……」
「この中に住む人間だけが十万年前と違うというわけか……」
「ええ……この中庭は、この星のどんな生き物にとっても住みやすいところのはずです。でも、帝国人の進歩した種にとっては、なぜか住みよい場所とはいえない」
「あんたたちのような心理病理観察看護とかいう人間は、この空気は平気なのかな」
「あ……私たち、心理病理観察看護職も、優秀種なんです」
テスは肩を竦めて言った。
「あんたが……優秀種？」
いささか意外な思いで、ネストはテスを見つめた。
少なくとも帝国に反逆したネストを看護するテスの仕事が、優秀種という上層階級に属するのが当然に思える種の就く職業に思えなかったからだ。
テスは、そんなネストの気持ちを見透かしたのか、少しだけネストを睨んだ。
「それはそうです。だって、いちおう、このお仕事。医学関係。学術関係ですもの。……なりたがる人は、ほとんどいませんけれど……」
「優秀種がこの空気で大丈夫なのか？　その若さだ。私のような古いタイプの優秀種でもあるまい？」

「ええ。体質だってしっかり進化したまっとうな優秀種です。だから、あんまりこの空気は、得意ではありません。でも、人間は、訓練すればある程度慣れるんです。空気には……三時間程度はここにいても耐えられます。部屋に戻って純粋な空気吸入を六時間。これ、少し辛いんですけれど……私は、新米ですけれど、空気だけは他の心理病理観察看護の人に負けないつもりです。……ええ」

テスは自分で自分に言い聞かすように頷いた。

「空気マスクをつけたらどうなのかね」

ネストの言葉はテスの気持ちに水を差した。

テスは、むきになって言い返した。

「そんなことで心理病の患者さんと交感ができますか？　さっき、ネストさんも集音機越しの会話は嫌だっておっしゃっていたじゃないですか。それとも、マスク越しならいいとでも言うのですか」

ネストには、テスのむきになった表情が眩しかった。

「確かに……今のは私の失言だったようだ」

テスはうつむいて続けた。

「そりゃあ、この仕事、長期的に見れば、確かに体に害があるとは思いますけど……帝国の平均的な優秀種よりは、寿命は短いでしょうけれど……でも、希望してなった仕事だからいいんです」

自分に納得させるというより、まるで、希望して帝国に反逆したネストなら自分の気持ちが分かるでしょう？……とでも言いたげな様子だった。
……それにしても、体への悪影響を押してまで、どうして心理病理観察看護の仕事をこの娘はやりたかったのか……。
ネストはそのわけを知りたくなった。
だが、会ったばかりのテスにそれを聞くのは、まだ早すぎる気がした。
一般的に優秀種の若い女性に望まれるのは、帝国最高の種である最優秀種を生む可能性……要するに優秀種度数の高い男性との結婚なのだ。
それが、優秀種の女性の幸福とされている時代だった。
たまに仕事を選ぶ優秀種の女性がいたにしても、テスの選んだ仕事は、普通の帝国の優秀種の女性が、簡単にあこがれる職業ではない。
この仕事を希望した理由に、もしかしたらこの娘の触れられたくない部分があるかもしれない。
そこに下手に土足で踏み込んで、この娘の気持ちを傷つけるのは避けたかった。
……今のところ、この娘は、患者としてのおれに好意的に接している……その好意を、頑なものに変質させたくなかった。
なにしろ、自分が収容された心理更正病院が、どんなところかすら、まだネストは把握していないのだ。

そして、帝国が自分を殺さなかった明解な理由も摑めた訳ではない。
まして、経験の浅い若い娘を、なぜ、自分の看護に当ててたのかも疑問だった。
とりあえずは、今の自分の位置を知るべきだ。
ネストは、話題を変えることにした。
「で……この箱庭の中で私はどの程度の自由を得られるのかな？」
「治療時間外の行動は自由です」
「自由？」
「ええ、どこに行かれても結構です。たぶん、出口は見つかりません。私ですら、知らないんですから……」
「あんたが知らない？」
「ええ、私の仕事は終身制なんです。この心理更正病院のこの部分は、職員も患者も一度入ったら帝国上層の特別指令がない限り、二度と外には出られません。私が十六歳で首都医科大学を卒業してここに来て以来、私だけでなくだれかに特別指令が出た気配は一度もありません」
テスはそう言って肩を竦めた。
「すると、あんたは、ここに来てから一度も、病院から出たことはないのか？」
「ええ……もう……七年になります。あ……私の歳が分かってしまったかしら……ま、いいです。私、二十三歳です。この仕事、基礎の勉強がけっこう大変で、私のように、現場に立てるようになったときはけっこうおばさんなんですよね。まあでも、結婚する気や、当分、子供を

生む気のない女性には、歳は関係ないかな？……ともかく……慣れれば、別に衣食住に不自由することもないし……外の情報だって、制限されているわけでもないから不満はないと思います」
「ただし、こちらの情報は、外に漏れないわけか……」
「ええ……だから、この中では患者のネストさんに隠すような秘密は何もありません。外に漏れなければ、秘密を作っても意味がないですものね。その代わり、心理更正病院のこの部分は……全体がそのまま外に対しては秘密です。外の世界の帝国人の中で心理更正病院にこんな部分のあることを知っているのは、たぶん、帝国上層でも限られた人たちだけなんです」
「すると……ここは……」
ネストは、改めて十万年前を模倣した中庭を見つめた。
テスは頷いた。
「ええ……ネストさんには、もうお分かりになられた様子ですけれど、ここそのものが、この国に幾つかある帝国機密のひとつなんです」
「ここが帝国機密の場所……」
「というより、ここで私たちが研究しているテーマが、帝国の機密の中核なんです」
ネストはテスを見据えて言った。
「あんたは……」
「あ……テスです。私、あんたとかおまえとかきみとか代名詞って苦手なんです。後ろから呼

び掛けられたら、自分のことを呼んでいるのかどうか分からないですもの。よろしかったら、名前で呼んでください」

ネストは苦笑していい直すことにした。

「テス……質問に答えてくれるかな」

テスは、にっこりと笑って頷いた。

「はい。知っている限りは……秘密を持っていたら患者との交感(コミュニケーション)はうまくいきませんから……」

「すでに帝国は、私のことを調べつくしているだろうね」

「ネストさんに関する帝国の資料は、患者のカルテとして当然、私の手元にもあります」

「……すると、君は……」

「ええ、テスです」

テスは……名前を呼んでくれ……とでも言いたげに答えた。

「……テス。君は私の資料を十分読んでいるね」

「ええ。三年以上前から、データ上の検討はつくしたつもりです」

「三年以上？　私が捕らえられる三年以上も前にか……」

「正確に言えば、本格的に検討を始めたのは『狼(おおかみ)のフィレーナ』が首都ボーの神殿を破壊(はかい)したときからなんです。帝国は、フィレーナ、リラの二人の奴隷(クレチア)とあなたのことを調べつくしました」

「では、この三年間、私は完全に泳がされていたわけか……」

「ネストさんもある程度は気がついていらしたと思います」

「おれが？……」

「ええ……正直な感想を言えば、ネストさんの三年間の逃亡の仕方は、杜撰に過ぎます。優秀な闘技作家の逃げ方じゃありません」

「そりゃ、闘技作家の逃げ方じゃないだろう。ただの酔っ払いのいい加減な逃走さ」

「それは、なおさら違うと思います。ネストさんのようなタイプは、酒に溺れると被害妄想、強迫観念が強くなるはずです。必要以上に周囲の様子が気になるはずです。より慎重になるはずです。違いますか？」

ネストは肩を竦めた。

「はず……はず……はず……はずばかり……テス……あんたの勉強している心理分析の基本は、人間の心理をパターンに分けることだから、その言い方は、どうにもならないのだろうが……」

テスは、首を振った。

「いいえ、違います。それはネストさんの誤解です。私はパターンでネストさんを解釈しようなんてしていません。人間の心理をパターンで色分けするのは、数千年にわたる心理分析の歴史の変わらない欠点だと、私、思ってます。人間の本質は、潜在意識……夢の中にあるなどという、とぼけた古代の心理学者の決めつけから始まって、なんでもかんでも人間をあるパター

ンに分けた決めつけで解釈しようとする。心理学や精神医学は数千年もその方法論を変えようとしていません。これはおかしいと思ってます」

テスは、ネストの顔を真っ正面から見据えた。

「ともかく……ともかく、人間の気持ちを、心を、決められたパターンでとらえるのは私、ともかく好きではないんです。私が……だ、です、ます、なる……なんていう、決めつけの表現を使わずに、はず、はず、はずという曖昧な言葉を使うのは、ネストさんをパターンでとらえたくないからです。私の、言っているのは一般的な心理分析の結果で……ネストさんを決めつけているわけじゃありません。むしろ私は、こういう分析結果が、正しいのかどうか、本人のネストさんにうかがいたいんです」

テスの顔には若い真剣さが溢れていた。

こんなストレートな若さを見せられると、ネストはどこか辛くなる。

それは、フィレーナに対しても、リラに対しても感じたものだった。

ネストは、テスの矛先をかわすように言った。

「テス……あんたが、勉強家で頭も悪くないことはよく分かったよ」

「はぐらかさずに、聞いてください。私、ネストさんの心理病理観察看護人としてだけでなく人間同士として交感したいんです」

ネストはテスのひた向きな瞳にいささか圧倒された。

しんどいことだが、まともに受け止めるしかないと思った。

「分かった。話を続けて……」
ネストは答えて、テスを見つめ返した。
「はい……」
テスは、こくりと頷いた。
「たぶん、ネストさんは、杜撰な逃げ方をしながら、帝国上層部の出方を見ていたのだと思います。そして、帝国警察と黒い悪魔の緩慢な動きを見て、帝国上層部は、ネストさんを生かすつもりでいると思った」
ネストは頷いた。
「そう、帝国警察も黒い悪魔も、私の出す反乱情報誌『フィエーブ』に対して明らかに情報が制限されていた。十分な情報が、彼らに伝わっていたら私は狭い首都ボーの中を三年も逃げ切ることはできなかったろう。帝国警察と黒い悪魔への情報を操作できるのは、帝国の最優秀種で構成された帝国上層部しかいない。帝国上層部は私を何らかの目的で生かしておこうとしていると思った。何らかの目的とは、おそらく私の『フィエーブ』の持つ反乱暴動情報網だろう。全国に起こる反乱が帝国の脅威になるほど増大すれば、おそらく私の『フィエーブ』の情報網を利用して反乱を操作するつもりだったのだろう」
「ネストさんには、帝国に抹殺されないよほどの確信があったのですよね。でなければ、リラという娘さんを手元においてはおかない。ネストさんのそばにいる方がリラさんにとって安全だと思ってらしたんですね」

「ずいぶん、こちらの気持ちを読めているようだね」
「読んでいるのではなくて、そう感じたんです。私がネストさんだったらどうするだろうかと……私がネストさんなら、まず、何をおいても一番大切なものの安全を図るはずですから」
「一番、大切なもの？」
「私が、ネストさんなら、帝国への反乱などよりリラさんとフィレーナを大切にしようと思います……。反乱情報誌『フィエーブ』を続けたのも、反乱が本当の目的ではない。リラさんとフィレーナを守り見つめるつもりだった」
テスは、ネストにではなく、自分で呟くようにそう言った。
「テス……あんたがおれなら、そう思うのかね」
「ええ。なぜなら……ネストさんにとって、帝国も反乱軍もどちらが勝とうと大した問題じゃないと思うのです……自分が、生きることも死ぬことも大した問題じゃない。自分の何か大切なものを守る……それは少なくとも自分の生命ではない。そして、ネストさんは昔、一度大切なものを失っている」
「昔、失った？」
ネストはテスに聞き返した。
「あ……すいません。僭越に過ぎました」
「いや……かまわんよ。テスの思っていることを言ってごらん。それが違っていようと言葉に出してみなければ交感にはならんだろう。昔、私が失ったものとはなんなのかね……」

「………」

テスはしばらく黙っていた。言葉を捜しているようだった。

「言ってごらん」

ネストに言われて意を決したように、テスは口を開いた。

「この話は私が、心理病理観察看護を目指す前のことです。確か十二歳のときでした」

「テス……君の昔話になるのかね」

「いえ……ともかく聞いてください……私、家で古い雑誌盤を見つけたのです。帝国人画家専門の美術雑誌でした。何気なく投影機にかけたら、いろんな絵が映しだされて……帝国人の描く絵は、ひどい絵ばかりでうんざりしました。でも、一枚だけ、釘づけにされた絵がありました。それは……」

テスは、先を続けるのをためらったように言葉を切り、ネストを見た。

「それは……？」

ネストが、うながすように聞いた。

テスは、意を決したように自分に頷いて続けた。

「北の地方都市ドラの新人芸術家の作品でした。凄い絵でした。血まみれの若い女性が泣いている顔が描かれていました。絵の題名は……『私』と、つけられてありました。ええ、『私』という名の女性の自画像でした」

ネストは、息を吐いた。

それ以上テスが何も言わなくても、それが、だれの絵であるか分かっていた。
闘技演出家バラバの妹……。
そして、ネストが愛した女……。
芸術家を目指し、自らの才能の限界に苦悩し悲嘆し、薬に溺れドラの浮き草地区で、ぼろぼろになって死んでいった女性……。
バラバも、ネストも、彼女をだれよりも愛しながらその苦痛を救うことができなかった。
その女がたった一枚だけ美術雑誌に取り上げられた絵が「私」だった。
しかも、取り上げられた理由は、芸術的な価値ではなく、その絵のグロテスクな残酷さが評価されたのだ。
「あの絵をどう思ったというのかね」
「悲しいと思いました。なんて辛い絵だろうって……」
ネストは、吐き捨てるように言った。
「きいたふうな言い方をするな。下手な絵だ。ただひたすらひどい絵だ。あの悲しさがあんたに分かってたまるか」
テスはうつむいた。
が、すぐに顔を上げて言った。
涙が浮かんでいた。
「そんなことない……分かる気……してます。私。……私も絵を、彫刻をやりたかった。でも、

帝国人には先天的な能力として芸術を創造する才能はない。でも、やりたい。ないものねだりでも、何かを作り出したい。でも、諦めるしかない。諦め切れないとしたら、私もきっとあんな絵を描いたかもしれません。だから、私に分かるはずないなんて決めつけないでください。だって、あの絵を見て感じたことは確かです。悲しいって……辛いって……」

テスは、泣いていた。

ネストは、溜め息をつくしかなかった。

テスは、嗚咽を押さえながら話し続けた。

「私、あの絵の作者のこと……知りたくなりました。そして、何年も前に亡くなったこと。そのお兄さんが、闘技の演出家になっていること……そして、ネストさんが、脚本家になったことを知りました。帝国人が、他民族にただ一つ芸術的才能を誇れる闘技試合の作家になったこと……少女の勝手な思い込みですけれど……何の関わり合いもなかったけれど、私、それを知ってうれしかったんです……何だか、あの絵を描いた女性が、とっても大切にされている気がして……」

「昔のことだ……」

ネストはぼそりと言った。

「ええ……でも、今、ネストさんが大切にしているものがあるとすれば、それがなんであるか、私、分かる気がします。それは絶対、帝国を倒すことなんかではない。きっと、一番、大切なのは、フィレーナとリラさんに出会ったことだろうと……」

「昔、失ったものをネストさんは、あの二人の中に見つけたんじゃないかと……私、そう、感じたんです」

「なるほど……」

ネストは苦笑した。

「私は昔の恋人にやってあげられなかったことを、フィレーナとリラに叶えてあげようとしている……そう、テスはいうんだね」

「言いきったりはしません」

涙顔のテスはネストを見つめてほほ笑んだ。

「そうだったらいいなと思っただけです」

「いずれにしろ、ずいぶん私たちの資料が、君の手元には集まっているようだ。いったい、どこまで、私たちは知られているのかね」

「どこまで知っていると言ったら、ネストさんが満足なさるか分かりませんが……ともかく、この三年間、日夜、検討を続けられるほどのデータは、集まっています。たとえば、もしかしたら、ネストさんも知らないかもしれない皆さんの秘密もあります」

「私が知らない私たちの秘密？」

「ええ、私は、まさかネストさんが知らないはずがないと思いますが、少なくとも反乱軍も黒い悪魔もまだ掴んでいない秘密です」

「ほう？　反乱情報網の回線を開く暗号でも知っているのかな。あれは絶えず変わっているから、私も全部、把握しているわけではない」

「いいえ……暗号などはとっくに解読されています。私の言う秘密は『狼のフィレーナ』が男ではないと言うことです」

「！……」

ネストは呆然とテスを見据えた。

「やはり、ネストさんは知っていたのですね。もしかしたらフィレーナはネストさんにも秘密にしているかもしれないと思ったのですけれど……隠し切れるはずがないですよね。帝国上層部は、フィレーナがボーの神殿を破壊する前に知っていました。でも、その事実を帝国機密として封印しました。男であろうと女であろうと、フィレーナは反乱のシンボルであればいい。それが、上層部の最初の対処の仕方です。でも、今のように大きくなった『狼のフィレーナ』にあっては、フィレーナは絶対、女であってはならない。それが、反乱軍内部に知れれば、動揺が起こります。女であるフィレーナを狙って男たちの間に、争いが起こるのは目に見えていますから……。最終的に、帝国上層部は、『狼のフィレーナ』が最大の敵に成長すると見込んでいるんです。女であることさえ隠しおおせれば、『狼のフィレーナ』には帝国の敵としてふさわしい力も魅力もあると計算しているんです。そして、フィレーナと帝国は、世界を二分する戦いになる。けれど、その前に反乱組織にバラバラになられては困るんです」

「帝国を二分する戦い？」

「ええ、何年か後には、起きても不思議はない状況だし、帝国上層部は、そのつもりのようです」

「そこまでフィレーナを敵として育てるつもりなのか……しかし、そうなれば、たとえ、鎮圧するにしろ、この反乱は平和に飽きた帝国人民への刺激程度の損害では済まない」

ネストには、自滅にもなりかねない戦いを、帝国がわざわざ育てて起こそうとしているとは考えていなかった。

「単なる帝国人民への刺激や、活性化のために、フィレーナを育てているのではありません。そして、ネストさんを帝国上層部が、こうして、生かしているのも反乱情報の要として利用するためだけではありません。利用するだけなら、ネストさんの脳に、ちょっとした手術をすれば、思いのままに動かせる操り人形に仕立てあげられます」

ネストは、頷くしかない。

「確かに、私などを利用するより、フィレーナが女であることを知らせるだけで、反乱軍はフィレーナを巡って自然に仲間割れするだろう。テス……君の話だと私がいなければ分からない情報など、今は帝国上層部にはなさそうだ。では、なぜ、私を生かして、こんなところへ収容しておくんだ？」

「ネストさん自身の存在が、もしかしたら帝国機密になるかもしれないからです」

「おれ自身が帝国機密？」

「ここに収容されている患者さんすべてが帝国機密に関連するものですわ」

「ここにいる患者すべてね……」
あらためてネストは、中庭を見渡した。
どこにも人影はなかった。
テスは肩を竦めて言った。
「今、ここは明るいけれど、ネストさんにお見せするために昼間の時間に設定しただけで本当の時間は深夜なんです。患者さんの皆さん、お休みの時間です。今、本来の時間に戻します。夜のほうが、帝国機密の一端が分かりやすいかもしれません」
「帝国機密の一端？」
「ええ……十万年前のこの星の深夜です」
テスが、背後のボードのスイッチを押した。
一瞬のうちに闇が訪れた。
ネストの知る夜より遥かに暗い夜だった。
何も見えないと言っていい。
自然に目は、明るさを求めて上を向いていった。
いきなりめまいがした。
いつも目にしていながら、意識していなかったものが、見えた。
そして、ネストの驚嘆の溜め息が漏れた。
「これは……！　なんだ！」

そこに、降るような星空があった。
無数の星に包まれて立っている気分だった。
星の光が身体の中をひとつひとつ突き抜けていく気がした。
星の瞬きは、手の中でこぼれそうだった。
ネストの生涯で、これほど星を意識したことはなかった。
テスの声がすぐそばで聞こえた。
「これが十万年前の夜空です。私たちは星に包まれていた。人間は星に手を伸ばそうとした。でも、届かなかった。人間は星との距離を知った。自分のいる地上以外に星のある別の世界があることを知った。そして、その世界、宇宙に行きたいと思った」
「星が夜空にあることなど知っている」
ネストは夢見ごこちで呟いた。
「ええ……だれもが知っています」
テスが答えた。
「でも、人はいつの間にか、そこに星があることを意識しなくなった」
「なぜだ……今はこんなに見えるのに……素晴らしいじゃないか」
「たぶん、ネストさんだから見えるのです。感じられるのです。他の帝国人には不快なめまいを感じ、目を背けるに違いない光景です」
「テス、君はどうなんだ？」

「慣れました。でも、帝国人のそれも優秀種の私には、目を開けていられないほど、まぶしく感じます」

「こんなに暗いのに」

「暗すぎるから、星が目立ち、まぶしすぎてめまいを感じるんです。明るい現代の帝国の夜空なら、帝国人は星を意識しないで済みます」

「帝国の夜は明るい？」

そう呟いたネストは、すぐにそのわけに気づいた。

「月が……」

なかった。

夜空にあるはずの三つの月が、そこになかった。

三つはおろか一つもなかった。

「ええ……今日は新月ですから……」

テスが答えた。

「新月？……」

「ええ……月の見えない日です」

「この星に月の見えない日があったのか」

「本来、月は一つでした。でも今は三つです。それぞれが照らし合うために三つの月が見えなくなることはありません。そして、夜空を明るくし、見える星の数を少なくした。帝国人は、

空に星のあることを意識しなくなりました。そして、空の向こうに宇宙という星の世界があることも……今、意識して星を見ることのできるのは、帝国人以外の属国人か奴隷か……ネストさん、あなたのような特別の帝国人だけです」

テスは、まぶしさに目から涙をあふれさせながら、それでも、ネストの見つめる夜空を見上げて呟いた。

「十万年前の星空を、私もあなたのように感じられたらいいのに……」

ネストはその声が、耳には入らなかった。

今まで、意識していなかった星空に、身も心も奪われていた。

ネストはいつまでも星空をむさぼるように見つめていた。

その夜空が、たとえ、十万年昔を想定して作られた映像だとしても、星の光にまみれて立ちつくす感覚は、限りなく優しい浮遊感があった。

＊

同じ時刻……。

現実の三つの月は、夜の高みからフィレーナの辿り着いた密林に光を投げかけていた。

その光は幾重にも重なる木々の枝と葉の障害をすり抜けて、巨木の根に寄りかかって寝ているフィレーナの横顔を、しっかりと照らしていた。

風一つなく木々も葉も草も寝静まり、泉の水のわきでる音だけが聞こえている。

動いているのは、泉からわきでる水の面で、生き物のように跳ねている月の光だけだった。

いままでフィレーナを見守り続けていたギャッピーも、静まりかえった密林の気配に気を許したのか、フィレーナのかたわらに横たわり、前足に頭を乗せ、かすかな寝息をたてていた。
やがて、密林の木々をかすかに揺らして、風が吹き出した。
密林の間際まで迫った砂漠の昼夜の温度差は激しい。
昼に溜め込んだ太陽の熱を砂漠が吐き出し、持ち前の砂の冷たさを持ち出すと、密林の暖かい空気に向かって冷気を吹き込み始めたのだ。
砂漠と密林の境にできていた霧は冷気に押され上昇し、みるみる雲になっていった。
雲は、夜空に輝く月を一つまた一つ隠していった。
最後の月が雲の向こうに消えると、星も見えない闇が密林から光を奪った。
そのときだった。
ギャッピーの耳がかすかに動いた。
何かの気配に気づいたのだ。
それは、近づいてくる。
ギャッピーは、前足に頭をつけたそのままの姿勢で鼻をひくつかした。
次の瞬間、……ぴくりっ……身体中に緊張感が走り、身を固くした。
身体中が文字どおり総毛だつような恐怖を感じていた。
ギャッピーは目を開けた。
闇だ。

密林には闇しかない。

何も見えない。

もとより犬や狼の視力は、人間に較べても数段落ちる。

ギャッピー自身、自分の目には何も期待していない。

だが、この星のどんな動物にも負けない自信のある鼻と耳を持っていた。

目など見えなくても、並はずれた嗅覚と聴覚で、相手の正体がなんであるか、どれほどの大きさであるかを頭の中に描くことができた。

そして、長年の一匹狼暮らしで生存のためにやらねばならなかったさまざまな戦いは、ギャッピーに、戦闘に対する超一流の感覚を培っていた。

相手の敵意はどれほどなのか……戦闘能力はどれほどか……急所はどこか……効果的な戦い方は何か……。

鼻と耳と身体中が感じる気配で、一瞬のうちに相手の情報を把握して、どうすべきか判断し次の行動に移る。

敵の武器が、ギャッピーの知らない人間の使う兵器であっても、ギャッピーの戦闘的な勘が予測した危険度や射程距離が現実に闘って違ったことはなかった。

ギャッピーは、自分の嗅覚と聴覚を信じていた。

だが、今は目を開けずにはいられなかった。

当てにならない視覚に頼らざるをえなかった。

何かが近づいてくる気配は確かだった。
だが、何も聞こえなかった。
何も匂わなかった。
何かの気配を感じるギャッピーの感覚だけが警報を鳴らしていた。
それが、ギャッピーとフィレーナに敵意を持っているのかいないのかすら分からなかった。
ギャッピーは、近づいてくる何かにおびえを感じた。
嗅覚も聴覚も視覚も通じない相手……今まで何ものにもひるむことのなかったギャッピーが、体験した初めての恐怖だった。
逃げて逃げられるものならば、当然ギャッピーは逃げただろう。
しかし、相手が何者であるか分からない以上、逃げられる確信はなかった。
分からないものを相手に尻尾を巻くのは、狼の血が許さなかった。
だが、どうしたらいいのか……。
ギャッピーは、途方に暮れた。
そのときだった。
「なんだろうね。ギャッピー」
フィレーナの手のひらが、やさしくギャッピーの頭を撫でた。
巨木の根に寄りかかったままの格好で、フィレーナも目を覚ましていた。
おそらくギャッピーが感じた同じ気配を感じたのだろう。

ギャッピーもフィレーナに甘えたような声を漏らした。
今まで、一匹狼のギャッピーはだれの力にも頼ろうとしなかった。
今日まで、狼犬の犬としてのギャッピーの血は、別にフィレーナを頼ったわけでなく、主人を守ろうとしていた。
主人に忠実であろうとしていた。
けして狼犬の狼としての血に、人間に頼ろうなどという感覚はなかった。
ギャッピーは狼犬のほうが人間より数段優れている動物だと感じていた。
聴覚、嗅覚、体力、運動能力、自然への適応力……どれをとっても狼犬のほうが上だ。
動物としての能力において人間をばかにしていた。
まして、飢えてもいないのに同じ人間同士で、道具まで使って共食いのように殺し合うのを頻繁に見せつけられては、同じ動物とも感じられなかった。
人間の感じ方で表現すれば、軽蔑……ギャッピーは人間を動物として蔑視していた。
だが、今、ギャッピーにとってフィレーナだけは、人間という動物ではなかった。
ギャッピーの能力の通じない相手に、ともに向かい合う頼りになる動物がフィレーナだった。
それは、二本足で歩く動物にギャッピーが、今、初めて持った感情だった。
フィレーナは、闇を見据えてギャッピーに呟いた。
「近づいてくる。それも一つじゃない。幾つもだ」
フィレーナは近づいてくるものを人とも、動物とも表現できなかった。

ギャッピーに言葉が言えたらさらに付け加えただろう。
……植物ともいえない……。
人間や動物や植物はおろか……今、闇の中を近づいてくる何かのように、物音をさせず動き、わずかな匂いさえ感じさせないような生物にギャッピーは出会ったことがなかった。
フィレーナは、剣を持ちゆっくりと身を起こした。
剣を気配のほうに構えた。
ギャッピーも頭を低くし、闇の中のものにいつでも飛びかかれる姿勢をとった。
相手から見れば、挑戦的で危険な姿だったが、仕方なかった。
闇の中の気配はぐんぐん近づいてくる。
フィレーナたちが身構えるのが遅れ、もし、相手が不意に攻撃してきたら、受け止める間もなくやられてしまう。
闘技士フィレーナと一匹狼のギャッピーが、相手に先制攻撃させる隙（すき）を与えるはずがなかった。
そして、身構えることで、相手の出方、反応が分かるはずだ。
せめて、相手が緊張（きんちょう）や警戒心（けいかいしん）を持ってくれれば、その気配が感じ取れるはずだ。
だが、近づいてくるものの気配が、まるで変わった様子はなかった。
耳に聞こえるのも相変わらず水の音と森林をすり抜ける風の音と、木々の葉のざわめきだけだ。

　フィレーナは、いささか拍子抜けした気分で、ギャッピーに囁いた。
「変だね。なんの変化もない」
　しかし、何かの気配は、もうすぐそこまで来ている。
「敵意はなさそうだ。それとも、こっちがあっちを見えないように、あっちもこっちに気がつかないのか……」
　フィレーナは、ゆっくりと剣の構えを降ろした。
　何かの気配は、それにも反応を示さない。
　そのまま、近づくのを止めない。
「僕らを見て見ぬふりで、無視する気なのかな」
　そのときだった。
　……**無視はしてない**……
　いきなり、頭の中で声がした。
「!?……」
　フィレーナは、体の内部から突然聞こえた自分以外の声に動転し、身体中に電流が走ったように竦み上がった。
　ギャッピーは、唸り声を上げた。
　フィレーナがなんらかの攻撃を受けたと思ったのだ。
　ギャッピーは、牙をむき目の前の気配に向かって飛び掛かった。

だが、今まで狙った獲物を逃したことがなく、いつもなら必ず一撃で相手の急所を食いちぎっていたはずのギャッピーの牙には、何の手答えもなかった。
がしっ！
ギャッピーの上顎の牙と下顎の牙が激しく咬み合った音が、響いただけだった。
飛び掛かったギャッピーの身体が、気配のある場所の後ろの茂みに勢い余って突っ込んだ。
ギャッピーの牙も身体も、密林の闇の空間を空しく、通り過ぎただけの結果だった。
ギャッピーは、突っ込んだ茂みの中で、素早く体勢を整え、気配のあった場所を振り返った。
そこには、未だ、何者かの気配がした。
ギャッピーの身体はなんの抵抗もなく、闇の気配を突き抜けてしまったのだ。
「だれだ、あんたは……」
フィレーナは、頭の中から聞こえた声に話しかけようとした。
……**聞きたいのは、むしろこちらだ**……
フィレーナの頭の中の声が答えた。
それは、頭の頂点から足のつま先まで響き渡り身体がばらばらになりそうな声だった。
「うっ！」
フィレーナは、思わず両手で耳を押さえしゃがみこんだ。
だが、それはフィレーナの身体の中を駆け回る声で、耳を押さえたからといってどうなるものでもなかった。

ギャッピーは、そんなフィレーナの姿を見て途方に暮れた。
ギャッピーには、声が聞こえなかったのだ。
ただ、何かの気配が、フィレーナの真正面にいることは感じられた。
ギャッピーは、気配の脇をすり抜けてフィレーナに駆け寄った。
……どうしたんだ？……とでも言いたげにギャッピーは、フィレーナの顔に鼻をすり寄せた。
巨大な声の残響が消えたのを確かめてから、フィレーナはギャッピーに聞いた。
「今の声は、なんだったんだ？」
再び、声が頭の奥から聞こえた。
……その動物には聞こえていない……
「え？」
……われわれの声は、聞かせたい相手にだけ聞かせる……残念だがわれわれには、その動物に正確に意思を伝えられるほど、その動物の交感言語や思考方法や感性に詳しくない。妙な声を聞かせても、脅えさせるだけなのでね……
今度の声は、先刻とは違いフィレーナにとって耳障りのない適度な音量に思えた。
……もっとも、あなたもずいぶん、衝撃を受けたようだ。驚かせてすまない。人に話しかけたのは久しぶりだ。どの程度、声を感じさせたらいいのか加減を忘れていた……
「僕らをどうする気だ？」
フィレーナは目の前の気配に向けて言った。

……ここは、私たちの森だ。何のために来たのかそのわけを聞かせてもらう……どうするかは、それからだ……

フィレーナは頷いた。

「無断で入ってきてすまないと思う。僕はただ、灯台の指し示す方向に行きたいだけだ」

……口で説明する必要はない……あなたがここに来た事情を知ってもいいかな?……

得体の知れない力を持つ相手だが、敵意は感じられない。

妙な隠しごとをして、悪意を持たれるほうが危険だと思った。

だいいち、頭の中に直接話しかけてくるような相手に、隠しごとなどできるのだろうか。

ここは、相手の言うなりにするしかないとフィレーナは思った。

「ああ……少し、長くはなるけれど……」

……長くはかからない……口で話す必要はないと言っただろう?……われわれに隠したいことがあれば話したくないと心の中で思え。あなたが、そう思えば、そこまで、私たちは踏み込もうとはしない……

その声が、フィレーナの頭の奥で聞こえたとたん、何かがいきなり、頭の中に入ってきた。

「あ!」

フィレーナは、思わず声を上げた。

それは、フィレーナが、今まで感じたことのないものだった。

フィレーナは、うろたえた。

恥ずかしさでいたたまれなかった。

服を一枚一枚脱がされているような、いや、それ以上の恥ずかしさだ。

痛みは感じないが、膚を剝がれ、肉を触られ、骨を嘗められているような……身体の内部から明かりで照らされているような、しかし、身体の中を駆け回るものに対して屈辱感のようなものは感じなかった。

むしろ、病気に居直った病人が、精密検査を受けるときのように、自分の知らない病根があれば捜してもらおうじゃないか……というような潔さをくすぐるような快感さえあった。

そして、フィレーナの頭の中を駆け回る何かも、貴金属を扱う職人のように慎重にかつ大胆に、フィレーナの心の扉を開けているのが感じられた。

フィレーナは、いつの間にか、この相手に、隠すことなど何もない気になっていた。

帝国に反乱している「狼のフィレーナ」本人であることも……帝国に滅ぼされたフィロセラの末裔であることも……そして、女であることも……。

この相手に対して、隠す価値のあることに思えなかった。

フィレーナは、今、身体の中を駆け回る何かに、身も心も預けようとしていた。

だが、それはわずかな時間で終わった。

フィレーナの頭の中で声がした。

……**正直な人だ……あなたが、愛しているものまで教えてくれることはないのに……**

「愛しているもの？」

フィレーナは、その声に呆然となった。

自分が愛しているもの……愛……？　フィレーナはそんなことを真正面から考えた覚えがなかった。

「ちょっと、待って……僕が愛しているって……何を……だれを……」

……おやおや……本人の気づいていない部分まで聞いてしまったようだ。それは、他のものから指摘されることではなかろう。やがて、本人が分かればいいことだ。それに、われわれには関わりあいのないことだし、関心もない。

フィレーナは、自分が何を愛しているのか聞きたかった。

……それは、本人の問題だ……

声の感じは、明らかに答えるのを拒絶していた。

声はその後もフィレーナの愛するものについて、いっさい触れようとはしなかった。

……あなたが、なんであり、何を目指しているかは分かった……われわれはこの森にある灯台へあなたを案内しよう……そこでまた、あなたは、これから行く道を見つければいい……

次の瞬間。

フィレーナとギャッピーの体が軽々と浮いた。

もがこうとする余裕もなかった。

凄まじい速さで、周囲の空気が動いた。

いや、闇の中で宙に浮いたフィレーナとギャッピーの身体が移動したのだ。

フィレーナはかたわらにさまざまな気配がして、一緒に移動しているのを感じていた。
フィレーナとギャッピーは、彼らに宙を運ばれているのだ。
やがて、雲間から、月が一つ、二つ、三つ……この世界を照らすすべての月が姿を現した。
闇が消えぼんやりと密林の木々が浮かび上がって見えてくる。
フィレーナとギャッピーは、静かに密林のただなかに着地させられた。
目の前に、巨木を組み合わた緑の塔がそそり立っていた。
表面を蔦がからまりあって、塔自体が、まるで生きている一本の巨木のようだった。
その頂点は、三つある月の一つをぶち抜いているかに見えた。
……**これがこの森の灯台だ……光を忘れたこの灯台の闇の中がわれわれの場所だ**……
声がフィレーナに言った。
フィレーナもギャッピーも、灯台の中に、何かの気配が森で出会ったときの何十倍もするのに気がついていた。

第3章

機密への扉

まだ、空は暗い。

だが、朝が来るのが分かる。

大気を、おぼろげに、しかし、確実に膨らませながら朝の予感が夜を侵食してくる。

身体中の細胞が、日の光を受け入れるために火照りだす。

闇の中で、ネストの身体は朝を待ち受ける。

やがて、東の空が暗闇から紫色に薄れだし、ちりばめられた星々が、夜空に光を滲ませながら一つまた一つと溶けるように消えていく。

と同時に、一つまた一つ、夜にまみれた細胞が目覚めていく。

眠い。

だが、神経は日の出を待って興奮している。

そして、その気分にぴったり付き添って、まわりの木々も草も空気もそこにあるすべてのものが、ともに気持ちを昂ぶらせてくれているのが伝わってくる。

ネストは、この世に生まれてから今まで、一万数千回は体験したはずの朝なのに、これほど

朝を予感し、太陽の上昇を期待する自分に気づいたことはなかった。
ネストは呻くように呟いた。
「これが朝か……」
「ええ、十万年前の朝です。すべての生物の基準になる瞬間です。夜行性の生物の体の細胞は眠りのために睡眠性の分泌物が吹き出し、昼の生物は、太陽の下の活動のために、目覚めの分泌物が生物の細胞を活性化させる。ネストさんは朝を感じられる。帝国人にとって明るいと暗いの区別でしかない昼と夜……一日の息づかいに答えられる身体を持っている」
「ずいぶん、大袈裟に言うね」
「大袈裟に聞こえますか？　でも、私には十分、大袈裟なことです。もし、私にその息づかいが分かれば、今すぐに、朝をキャンバスに描いてみたい。でも、あなたは、きっとおっしゃるでしょうね。朝を描いてなんになると……朝はだれの上にも来る。だれもが感じられる感性をあえて、人に描いて見せる必要があるのか」
「どこかで、それに似た台詞を聞いたような気がする」
「ええ……歌の文句です。昔の児童歌謡にあるんです」
テスは、歌詞を口ずさんだ。
「私は、お目々が見えません。わははははは。
私は、お耳も聞こえません。わはははは。
私は、お手々も足もありません。わははははは……」

テスはいったん口ずさむのを止めて説明した。
「これは、子供の鬼ごっこの始まりに歌われる歌なんですが、実は、調べてみると原形は身体の不自由な子供をいじめる唄なんです。一節の終わりのわはははははという笑いは、まわりの子供たちが、不自由な子供を笑う声です」
「気持ちのいい歌ではないな」
テスは、頷いた。
「ええ……弱者虐待ですもの……まともな大人には不快に聞こえるでしょう。でも、人間の子供というのは、もともと弱者に対しては、残酷なものです。そして、この歌は教育上よくないという理由で、帝国では禁止されています。でも、そんな禁句や禁じられた歌ほど、結局は民衆の子供の間で歌い継がれ、残り続けてしまうのです。今はもう、歌の意味すら分からずに、残っている。おそらく、歌の持つ旋律や言葉の響きが、人の心をとらえて放さないんでしょう。でもね、この歌が面白いのは、身体の不自由な子供の反抗の唄が、続いているんです」
「反抗の唄？」
テスは頷くと、歌詞の続きを口ずさんだ。
「笑ってください……わはははは
なんにも分からぬ私だけれど……。
だけど、私は分かります。
朝が、来るのは分かります。

身体が、朝を知らせます。
わざわざ朝が来たなんて
知らせてくれずで、結構です。
朝はだれの上にも来る。
いちいち朝が来たなんて
教えてくれずで結構です。
おまえら以上に、私は分かる。
朝の来るのが、身体で分かる。
絵に描く必要、ありません。
朝の絵なんか……。
どうせ、私は見えないのだから。わはははは。
身体が朝を感じれば
絵に描く必要ありません
絵にも描けない楽しさを目で見る必要ありません。
あんたになんかにゃ分かるまい。わはははは
目のない身体が知っている。朝が来る来る楽しさを。わはははは
さあ……朝だぞう……わはははは」
テスは肩を竦(すく)めた。

「これで、鬼ごっこの歌は終わり。後半の笑いは、身体の不自由な子供の笑いです。最後の笑いが終わったときが、目隠しされた鬼ごっこの鬼が、「子供たちを追い掛ける合図なんです」

「鬼が子供を追い掛ける合図か……」

「いじめられている弱者が、いつしか、弱点を利点に変え、それまで、自分をいじめていた強者を捕まえて食べてしまう。そのきっかけが、朝……。これって、昔の説話や歌謡には珍しいタイプなんです。普通は、鬼が活躍するのは、子供たちが暗闇で目の見えない夜のはずなんですが……」

「朝、目の見える子供たちよりも、朝を身体で感じられる鬼のほうが強いということか」

「でしょうね……これは児童の歌謡ですから理屈なんかないと思います。ただ、子供の潜在的ななにかが、目が見えなくても朝を感じられる鬼が、恐いと感じさせるのでしょうね」

ネストは、白んでいく空から目を離さずに言った。

今、訪れつつある朝を一刻でも見落としたくなかったからだ。

「テス……君はそれを、どう思うのかね」

「え？」

テスは、顔に手をかざし、明るさから目を避けるような素振りで聞き返した。

「心理学や精神医学は、民話や説話や古典歌謡を人間の心理分析に使いたがるらしい。当然、君もそれは勉強したはずだろう……君の意見では、朝を身体で感じられる鬼というやつを、この病院……いや、帝国支配のこの世界でどう、位置づけるのかね」

「この古典民謡は人間の歴史上、そう古いものではないんです。民俗学者の調べる限り帝国の勃興以前には、見られません。どうやら、帝国人の子供たちの潜在意識のなかで生まれたもののようです」

「だから……？」

「帝国人種は急激に進化を続けています。そして、他民族を旧人種の劣等として駆逐してきました。まるで、身体の不自由な人間をいじめる子供のように……でも、どこかで、恐れているのかもしれません。古いタイプの人種を……」

　ネストは、肩を竦めて言った。

「だが、私は帝国人種だ。帝国人種でありながら、十万年前の空気に馴染める私は、どういう位置にいる？……」

「最近では、上層部でネストさんのような特殊変形優秀種を、俗に先祖返りなんて呼んでいます」

「先祖返り？　私は帝国人から生まれた猿のようなものか……」

「でも……」

　テスは、首を振った。

「私の意見でよろしいんでしょう？」

「そう、テス……君は、私をどう思う？」

　テスは、顔にかざした手を降ろし、眩しそうにネストを見た。

「うらやましいです……ネストさんが……私が朝を感じられるなら、猿だって……いいえ、アメーバーにだっていい。先祖返りしたい」

ネストは、苦笑した。

「アメーバーは言いすぎだろう」

「いいえ、ネストさんと同じ気持ちになれるなら、私、なんにだってなりたい」

テスはそこまで言って、うつむいた。

頬が、朝の光でなく赤く染まっていた。

そのときだった。

「あ……」

水平線に目を据えていたネストが、うめき声ともつかぬ小さな叫び声をあげた。

そして、いきなり全身を貫く刺激が、ネストを襲った。

だが、それは、決して、苦痛や苛立ちのともなうものではなく、身体中の細胞が弾み踊り出しそうな心地よい衝撃波だった。

それは、水平線から昇る朝日だった。

「これが、太陽か」

ネストが呻くように言った。

テスは、両手で目を覆って頷いた。

朝日を直視できないのだ。

「ええ、紫外線も赤外線の量も昔のままです。とはいっても、現代のようにオゾン層が破壊されていないころの量ですから、さほど有害ではありません……それでも私には、眩しすぎますけれど……」

「私にも眩しすぎる。だが、朝日と向かい合うのが、これほど、さわやかだとは思わなかった」

「でしょうね……普通の生き物は、朝日とともに活動を開始するのが、正常な生理です」

どこからか軽快な音楽が流れてきた。

ネストには聞き覚えのない単調で面白みのないピアノのメロディだったが、だからといって、脚本家という仕事柄、背景音楽にうるさいネストにしても、聞き苦しいと文句を言う気はしなかった。

むしろ、身体中の細胞が活性化する朝の雰囲気に似つかわしい気すらした。

「この曲は?」

ネストは、テスに聞いた。

「朝の曲です」

テスは微笑んだ。

「十万年前にこんな曲があったのかね」

「まさか……十万年前の人類に音楽があったとしても、ピアノのような弦楽器があったはずがありませんわ。この曲は、数万年前、辺境の有色系人種の国で、朝のひと時に、毎日、音響放

送されたという体操のための伴奏音楽です。この病院の患者さんがどう反応するかテストしてみたら、好評だったので、以後、毎朝この曲を流すことになったそうです。今はもう、この病棟の身体の動ける患者さんの日課のようになってしまいました」

テスは後を振り返って言った。

「ほら、ネストさんもおやりになりません?」

いつの間にか、病棟の前に、白衣を来た男女が出てきて、音楽に合わせ身体を動かしていた。

それは、簡単な柔軟体操のようだった。

「音響体操というわけか……」

ネストは肩を竦めた。

「これは強制かね。朝のすがすがしさは、確かに感じるが、まだ、朝に運動をする気にはなれない。いつも朝は二日酔いで布団にくるまっているようにと、長年、私の脳は学習されてしまっているようなのでね。身体からアルコールは抜けても、脳の学習だけはなかなか忘れないもののようだ」

「この運動は、別に強制ではありませんわ。でも、ここにいる患者さんは、朝になると身体を動かしたくなるのが普通で、この体操をしない人たちも、ほら……」

テスは人工の浜辺を、指差した。

数人の男女が、並んで駆けていく。

「朝の駆け足運動……朝になるとここの患者さんみんな、じっとしていられない気分になるん

ですわ。ネストさんも一度試されたら、そのうち、やめられなくなるかもしれませんよ」
「みんな健康そうでなによりだが、病院に、健康は似つかわしくない。いったい、何が理由で、ここに閉じこめられているのかね」
「彼らは、正常な帝国人に見えます。さらに付け加えれば、帝国人の、それも優秀種に属する人たちばかりです」
「それがなぜ？」
「彼らをよく見てください。どこか、普通の人と違うとお思いになりませんか？」
ネストは、体操する患者たちを見つめた。
確かに、正常とはいえなかった。
妙にリズミカルに動く人……。
流れる音楽をまったく無視して緩慢に、全身を揺らせながら手足を動かす人……。
それぞれが、自分の世界に浸りきっていて、共通の音楽に合わせているという統一感はまるでなかった。
機械仕掛けの人形と夢遊病の猿が、舞踏場で踊っているような感じだった。
それが、装飾華美の電飾が瞬く夜の街ではなく、人工とはいえ十万年前の朝日を浴びた大自然の中の風景だけに、まるで、超現実主義の立体映像を見るように思えた。
しかも、体操を続ける患者たちの目は、うつろに、何の意志もなく、ただ、太陽に向け邪気のない薄ら笑いを浮かべていた。

その笑顔だけは、意味もなく一様に幸せそうに見えた。

だれの目にも、彼らの精神が、なんらかの形で破壊されているのが分かった。

「精神破壊……そういうことか……確かにここは病院だったな」

ネストは、溜め息をついた。

テスは、頷いた。

「彼らは、帝国の尺度でいうと精神障害者なんです。とくに、ネストさんと同じ病棟の人たちは強度の依存症患者です」

「依存症……？　私のようなアルコール患者というわけか」

「他に、薬物の患者。そして、軽度の躁鬱症と分裂症のある人たちもいます。……別の病棟には、もっと重い精神障害者が、収容されています」

「いわば、帝国優秀種の落ちこぼれだな……私も含めてね。だが、なぜ、そんな人たちをここに生かしておくのかな。精神障害者で治療のためにここに入院したが、全快して退院し社会復帰したものの噂を聞いたことがない。おそらく、この病院は、患者を治療するところではなく、障害者を処分する処刑場だと思っていたがね」

「処刑場？……」

テスは、明らかに気分を害した様子で、言い返した。

「ここは、あなたが脚本を書く奴隷の闘技場ではありませんわ。いくら帝国が、闘争好きの民族でも、病院は病院……死者よりは、たとえ、患者が死の寸前であろうと生きている病人を大

切にするところです」
「それはまた……失礼なことを言ってしまったかな。では、処刑場ではなく検疫隔離場というわけだ。ただし、みんな、検疫にひっかかり外に出ることは許されない」
ネストはさりげない口調で、それでいながら強烈な皮肉を言った。
「そんな……」
テスは、うつむいた。
「確かにここから出ていったものはだれもいません。でも、あなたのように、ここの患者さんを私たちは、帝国優秀種の落ちこぼれとは言いません……特殊変形優秀種と呼んでいます。彼らの異常を、帝国人の進化のうえでの奇形やでき損ないとは言い切れないからです」
「この人たちができ損ないでないとしたら、まともな帝国人はなんなのかね？　人間としてできすぎの人種とでも言いたいのかね」
「いいえ……もしかしたら、この星の生物として、進化を続ける帝国人自体ができ損ないなのかもしれません。いいえ、それが言いすぎなら、帝国人はでき損ないの生物になる道を、急いでいるのかもしれません」
「帝国人ができ損ないの人種だと……？」
ネストは、呆れてテスを見据えた。
この世界で、もっとも優秀な人種が帝国人である……。
それが、帝国の世界制覇の唄い文句だ。

そのスローガンに真っ向から疑問を唱える言葉が、帝国人のしかも優秀種の女であるテスの口から漏れるなど信じられないことだった。

「ずいぶん、過激な発言だな」

テスは、肩を竦めた。

「この病院の外でこんなことを言ったら、帝国侮辱罪で死刑になるかもしれませんね。でも、ここで私たちが、帝国の上層部から指令を受けて、極秘に研究しているのはまさにそのことなんです。今の帝国人民の種の過激な進歩は生物として間違っていはしないか。それが、この病院における私たちの研究主題なのです」

「帝国上層部は、自分たちの存在と進化に疑問を持っているというのか」

「帝国上層部の大部分の意見は、今のままの進み具合で、帝国人の種は進化していくべきだと確信していると思います。でも、その確信は絶対ではない。もしも、間違っていた場合、どうなるのか。帝国上層部は、慎重なのです。万が一の状況にも対応できるようにするために、私たちに研究を命じたのです」

「万が一の状況？」

「帝国人種の進化が間違っていれば、帝国人種は人類として、いえ、生物として、存続できないでしょう」

「帝国人はこの星に存続できない……絶滅ということか」

ネストは溜め息をついた。

「この意味ってお分かりですよね？」
テスは、ネストが、答えをすでに知っているかのような聞き方をした。
「帝国人種の滅亡は、人類自体の滅亡を意味する」
ネストは呟いた。
「ええ……」
テスは、あっさりと頷いて話を続けた。
「帝国人種が進化を続けるうちに、属国人や奴隷などの他の人種は、帝国人種によって絶滅させられます。そうなれば、帝国人種は、この星に生き残る単一で最後の人類ということになります。……でも、生き残るべき帝国人種の進化が間違っていて、万が一、絶滅するようなことがあれば、そのときは、この星に生き残る人類はいないことを意味します」
「人類の進化と滅亡か……ものみな滅びるとしたらそれもよかろう。しかし、帝国の上層部はずいぶん、先のことを心配するものだな。その前に、目の前の火事の、反乱をどうする気だ。人種よりも帝国という国の存続のほうが、目先の問題だと思うがね」
「そうでしょうか？　帝国という国をいかに存続させるという問題より……もしかしたら、人類の滅亡のほうが目先の問題かもしれません。言い方を変えれば、帝国人種のいない帝国などありえませんから、帝国の滅亡の時が、この星の人類の滅亡の時かもしれませんわ。そして、たぶん、万が一のとき……」
テスは、やるせなさそうに、微笑んだ。

「万が一の時？」
ネストは、もう一度、同じ言葉を繰り返した。
「帝国人種の進化が間違っていたとき……そのときは……」
テスは肩を竦めた。
「人類の滅亡……これって、子供騙しの空想小説でしか見ないような大袈裟な言葉ですよね……でも、その日の光景を、もしかしたらネストさんも私も見ることができるかもしれません。帝国人種の進化は、日を追って早くなっています。進化の間違いに気づくなら急がなければなりません」
「テス、君はどう思っているのかな」
「何がです？」
「間違いなのかね。帝国人種というやつは……」
テスは、微笑んだ。
「私、これでも帝国人種の……それも、優秀種なんですよ」
「だから……？」
「間違いだとしたら、悲しいですよ……でも……」
テスは、体操を続ける患者たちをいとおしむように見つめた。
そして、呟いた。
「もしかしたらここにいる特殊変形優秀種の人たちが、帝国人としては最後の人類かもしれま

せん」
「どういうことかね？」
「彼らは、帝国人から見れば、精神に異常を持つ人々です。でもそのかわり、この星の十万年前の空気を、苦痛に感じない人々です。彼らは、精神の異常と引き換えに、何かを取り戻したのかもしれません。正常の帝国人優秀種と、特殊変形優秀種の、どちらがこの星の人類としてふさわしいのでしょう。そして、ネストさん……」
テスは、ネストを見つめた。
「あなたは、精神が正常でありながら、なおかつ特殊変形優秀種の要素を持った珍しい帝国人種です」
「そんなに珍しいとも思えんがね」
ネストは、そっけなく答えた。
それは、本音でもあった。
ネストの年ごろには、帝国のいうところの不純な空気や海が、苦にならぬ優秀種は少なくないはずだった。
テスは、首を振った。
「いいえ……たとえ、特殊変形優秀種の要素を持っていても、ここまであからさまに帝国に対し反発した帝国人は、いません。いたとしても、表面に出ずに隠れているか、すでに、生きてはいません。帝国は、上層部の方針に少しでも逆らう者を、今まで抹殺し過ぎました」

「抹殺し過ぎたか……」

ネストの脳裏に一瞬、演出家のバラバや、浮き草地区の医者キルの顔が浮かんだ。

彼ら以外にも、ネストの前から消えていった顔は無数にあった。

ネストは、深い息を吐き、頷いた。

「そう……みんな、もう、いない。おれだけが生き残ってしまったようだ」

そのときだった。

「お願いです」

テスは、すがるようなまなざしでネストを見据えた。

「……帝国人種の進化が間違いかどうかを、私と一緒に、調べていただけませんか？　正常な神経の特殊変形優秀種の目で、今の帝国人種を見つめたらどうなるのか？」

「私を研究材料にするわけだね」

ネストは、冷えた目でテスを見据えた。

だが、テスの目は熱かった。

「上層部は、そのつもりでしょう。でも、ネストさんが研究材料だとしたら、この私も含めて研究材料のひとつです」

ネストは、テスを見つめ返した。

「君を含めて……？」

「心理病理観察看護をやりたがる帝国優秀種なんて、そうはいません。絵を描きたがる優秀種

だって……ネストさんの世代はともかく、私の年ごろにはほとんどいません」
「君も特殊変形優秀種だというのか」
「分かりません。でも、ネストさんの看護に上層部が私を選んだ決め手は、それのはずです」
「落ちこぼれは、落ちこぼれの気持ちが分かるというやつか」
「上層部の考えがどうであれ、私は知りたいんです」
「帝国人種と人類の明日をかね……」
茶化す気などなく、ネストは呟いた。
「いいえ」
テスはきっぱりと言った。
「私は自分を知りたいんです。私がなんであるか。帝国人種の優秀種として生まれた私が、人間という生き物の中のどこに位置しているのか。どんな存在なのか、帝国人種や人類の明日なんかどうでもいい。今の私が、なんなのかを知りたいんです」
ネストは、テスに眩しさのようなものを感じた。
「今の自分がなんなのか……か」
ネストは、若い娘テスの言葉を自分に問い掛けてみた。
……おれはおれさ……
簡単な答えが出た。
だが、別な問いかけが、ネストに降りかかる。

……本当におまえはおまえか？……自分がなんであるか、本気で自分に問い掛けたことがあるか？……ある。あるに決まっている。……これも答えは即座に出た。

……生まれてから今の今まで、その問い掛けを止めたことはないはずだ。

だが……その答えをを出すのは諦めていた。……ような気がする。

自分がなんであるか……問い掛け続けてはいた。

だが、答えを出そうとしなかった。

……おれはおれだ……その答えから先は、目を閉じていた気もする。

そして……。

もしかしたら……。

ネストは、フィレーナとの関わりを思った。

ネストの答えに目を閉じた自分への問い掛けが、……「僕はなんなんだ！」……という目を見開いて答えを見つけようとする若い問い掛け……若いフィレーナやリラのような問い掛けにであったとき、ネストは、まるで、盲人が、目の見える人間の後に縋るように、フィレーナと帝国の戦いに紛れ込んでいったのかもしれない。

そこには、フィレーナとリラを見守るという自分自身への口実はあったかもしれない。

帝国という巨大な敵を作り無謀な挑戦をするという、酒では得られない酔いに身を委ねたい気持ちもあったかもしれない。

だが、実は……「自分はなんなのか」……という答えに目を閉じた自分自身の問いの答えを、

フィレーナが見つけるかもしれない答えに代用させようとしていたのかもしれない。

けれど、帝国と闘って出る答えは、あくまでフィレーナの答えであって、ネスト自身の答えではない。

ネストの答えは、いぜん、目を閉じたままにすぎない。

……自分はなんなのか……何度も繰り返したはずの問いの答えを、目を開けて見ようとしてもいいのではないか……

少なくとも、酔いから覚めたネスト自身に突きつけられているのは、フィレーナの問題ではなく優秀種の落ちこぼれである自分自身の問題だった。

帝国に抵抗しようと迎合しようと、それはネスト自身がやらねばならないことだった。

「なるほど……」

ネストは呟いた。

「私も私がなんであるか知りたくなった」

「協力していただけるんですね」

テスのほほ笑みが輝いた。

「私、頑張ります。資料なら山ほどありますから……だって、ここ、帝国機密の内側ですもの。ここには、もう、隠される秘密はありませんわ」

「ここから出られなければ他にやることもないしな」

いささかつっぱった子供っぽい台詞だとは思ったが、ネストはそう言って肩を竦めた。

それから、言わずもがなのことを言った。
「で、君の期待どおり、帝国人種の進化が間違いだと分かったらどうするつもりかね」
「たぶん……帝国の優秀種としての私は、一時間ぐらいは泣くかもしれません。それから……
あっそう、進化さん、ご苦労さん……って言って笑っちゃいます。きっと」
「それで……」
ネストは、聞いた。
「それから先は、またきっと考えます。だって、それで、私が何か……という答えが出たわけでもないでしょう……?」
「で、帝国は、そのときどうするかな」
「あ……きっと大騒ぎですよね……どうするのかな……帝国の上層部……いまさら、帝国機密にするといったって、しょうもないし……面白いな」
テスは、いたずらっぽく笑った。
そして、大きくのびをした。
患者の体操の音楽が、そのとき、終わった。
朝日が、さんさんと輝いていた。
ネストは、テスを見た眩しさで、十万年前を模した人工の太陽を見上げた。
……自分はなんなのか……の問いかけ……
自分の問題とはいえ、やはり、フィレーナに対したときと同じように、今の自分も結局のと

ころ、テスの問いかけに便乗しているのかもしれないと思い、自分自身に後ろめたい気もした。

＊

帝国の上層部……その頂点に立つ七人がそこにいる。

薄布だけをまとった三人の男と三人の女……そして、どちらともつかぬもう一人が七つ輪のように並んだ長椅子に横たわっていた。

七人とも若く、古代の神々の彫刻そのままのように均整のとれた体格で、彫刻としてなら、非のうちどころのない身体をしていた。

人体に美という形容が当てはまるなら、美の極致といっても言い過ぎでないかもしれない。

そして、その顔は、どの人種から見ても整い過ぎていた。

あまりに美男美女であり、どちらともつかぬ一人も、男女の見分けがつかぬなりに美形だった。

美しいという形容詞がはまり過ぎて、目は見張らされるが面白みがなさ過ぎるとさえいえるかもしれない。

さらに、彼らの表情はほとんど変わらず、彼ら自身に面白みはおろか喜怒哀楽があるのかすら分からない無感動な表情をしていた。

彼らの前には青い海と、後ろには緑の草原が、広がっている。

それは、一見、ネストとテスの目の前に広がる人工の自然と、そっくりの世界に見えた。

だが、空に輝いているはずの太陽はなく、不透明な明るさの染まるような青い空が広がって

いた。

ここもまた人工的に作られ映像処理で装飾された海辺に違いなかったが、この星の五十億年近い歴史の中で、ただの一度も経験したことのない風景だった。

地平線も水平線も霞一つなく、視力のある限りどこまでもはっきりと見通せそうだった。

まるで、それは、必要以上に超高画質な映像か写真を見せられたような、見え過ぎて照れ臭くなるような、とまどいを与える鮮明な景観だった。

それは空気が、どこまでも澄んでいるせいだった。

そして、空を映す海は、光の届く限り吸い込まれるように青かった。

水の果てしない透明度が、そんな海の色にさせていた。

純粋な空気と純粋な水がなければ作り出せない、この星でここだけの光景……。

そこは、帝国の中枢、帝国上層部……大地の間という巨大なホールだった。

場所は首都ボーの中央に位置する、国立帝国病院の地下深く……。

生まれたときから親元から隔離され育てられる最優秀種が暮らし、帝国人の他のどの種にも秘密にされている帝国上層部は、皮肉にも、帝国の首都ボーの最下層部にあったのだ。

そして、最優秀種の中から誕生した子供の中でさらに優秀な六人の成人男女と、どちらともつかぬ一人が皇帝種として選択され、大地の間の長椅子に横たわり、静かに話し合いながら、帝国の最高決定事項を決めていた。

帝国といってもデビスは、一人の皇帝ではなく、皇帝種に選ばれた七人の頭脳による話し合

いの結果に支配されていたのだ。

彼らの名は、性別の差はなく、若いほうから順に一から七まで単に番号で呼ばれていた。そして、皇帝種が、生まれ育ち成人するたびに、歳老いたほうから七つある皇帝種の座を去っていった。

皇帝種としてのすべての教育は十七歳で終わり、十八歳が成人だった。

十八になると、新しい皇帝種が成人するまで、七つの座の一角にいて皇帝の仕事をした。

一人が、皇帝についてから皇帝の座を降りるまで、新しい皇帝種になる者の性別にもよるが二年以上ということはなかった。

だから、絶えず男女三人づついる皇帝種の、最年長者にしても二十歳を越える者はいなかった。

そして、残りのどちらでもない一人は、最優秀種の精子と卵子によって絶えず作為的に試験管の中で生み出される両性を持つ人間の中から選ばれたから、候補がなくなることもなく、確実に二年に一度、十八歳が二十歳になるまでには入れ替わっていた。

いずれにしろ、生物学上、帝国人種の人間の脳がもっとも活性化する頂点の時期……十八歳から二十歳の、帝国の最高の頭脳集団が彼らだった。

男女どちらでもない皇帝種、五と呼ばれている両性が口を開いた。

「今日、決めるべきことを決めましょう」

どうやら、両性の五は長椅子に寝そべる七人の意見の進行役のようだ。

七人の長椅子に囲まれた空間に、ネストとテスの立体映像が浮かび上がった。
同時に、その空間から声が聞こえる。
「帝国種研究調査課題。第四百九十一段階……心理更正病院の特別病棟に収容されたあの男は、心理病理観察看護の特殊変形優秀種とともに、帝国種の研究に参加することを同意した。この男に帝国機密のすべてを開放して差し支えありませんか。確認をいただきたい」
「かまいません。帝国の秘密のすべてを知らせ、その反応を見るのが目的ですから」
皇帝種の一と呼ばれる男が答えた。
他の六人も頷く。
「分かりました。心理更正病院は、帝国上層部の指示どおり、この男と、心理病理観察看護の特殊変形優秀種テスに、帝国機密を開放します」
空間の声が答えた。
五の両性が他の六人を見回して言った。
「この件についての雑談があれば……」
皇帝種の二と呼ばれる女が呟いた。
「これで、揃えられる限りの資料は揃いましたね」
「あの二人が、帝国人種の進化をどう評価するか……興味深い。なにしろ、あの二人は、先祖返りした帝国人の中で、判断能力のある、珍しい特殊変形優秀種ですからね。今となれば健康的な通常の精神心理構造でいながら、特殊変形優秀種の兆候を持った帝国人種はほとんど残っ



帝国を支配する帝国上層部とはじつは７人の最上級の種・皇帝種で構成されていた

ていないのですからね……」

男の三が言った。

「今、誕生する特殊変形優秀種は、ほとんどが精神破壊を起こしている、いわば帝国人種の奇形です。しかも、その数は、当然、帝国機密にされているが年々増加の傾向にあります。これを、われわれは、どう判断するか。急激な進化における単なる多少の歪みと見るか……進化の失敗の兆候と見るか……そこが、われわれの迷いであり不安なのですが……」

両性の五が、七人の意見のまとめ役のような口調で言った。

「迷いがあろうと、不安があろうと、ここまで来たら、進化を続けるしかありませんよね」

女の四が、肩を竦めて言った。

七人は、それぞれ頷いた。

「あの男に対しての興味は私にもあります。でも、あの男がわれわれの種の進化を間違いだと思ったところで、先祖返りは先祖返り……生きている化石です。進化の中では異形です。われわれは今さら、先祖には戻れません」

女の六が、達観したように無表情に言った。

「どうにもならないということはないでしょう。少なくとも、われわれの進化の結果が失敗と分かれば、出直しのとき、どこまで戻ればいいかの重要な資料になります」

男の七も、他人事のように言った。

「出直す？……そのとき、だれが出直すのでしょう。そのとき、この星に出直しを図れる人類

がいます？」
女の六が、だれに聞くでもなく呟くように言った。
「いるとしても、それは、われわれ帝国人種ではない」
七人は、他人事のように頷いた。
女の四が、また肩を竦めた。
「帝国人の先祖返りに種を存続する能力はありません」
両性の五が、話を収めた。
「よしましょう。この雑談は……どちらにしろ、この問題に関してわれわれはすでにあらゆる手をつくしてあるのですから……そして結論の出る日はそう遠くなくやってくるのですからね」
七人は頷き合った。
両性の五は、長椅子が取り巻いている中央の空間に向かって話し掛けた。
「反乱暴動に関して、推定外の展開は、ありますか？」
帝国の地図が、浮かび上がる。
「ここ七日間にわたり帝国全土で一日平均百二十五万人の帝国人が、反乱暴動によって死亡しています。これは、予定どおりの減少です……一方、他人種の死亡者は平均六十万……他人種と帝国の人口勢力が平均化するまで、あと、百二十九日プラスマイナス三日、かかるでしょう」

声の報告に、両性の五が答える。
「予定どおりならば、そのまま続けてください」
「了解……仰せのとおりにいたします……」
いかにも、軍人ふうの口調の声が返ってくる。
長椅子の七人は、その返答に優雅に頷いた。
「これについて雑談はありますか？」
両性の五が他の六人に聞いた。
六人は、首を振った。
「何もかも推定どおりです。話題になりそうなことといえば……」
両性の五は、退屈そうな溜め息をついて、中央の空間に話し掛けた。
「帝国周辺の情報で、変わったことはありませんか」
「予想された事態の一つですが、南部海岸地方北西の砂漠の中の森から感知される精神波に、異物がまぎれこんだようです。おそらく、あのフィレーナが砂漠をいちおう越えて森と接触したもようです」
女の二が、微笑んだ。
「あの娘が、そこまで行きましたか」
中央の空間にフィレーナの立体映像が浮かび上がった。
それは、今から三年以上前のフィレーナだった。

帝国を敵と見定めリラをネストに託し、たった一人で、首都ボーの神殿に、攻撃をしかけていたときのものだった。
中型剣(ミドルスオード)を振りあげ、手当たりしだいに白熱光線を発射し、ボーの神殿の内部を片っ端(かたっぱし)から破壊し尽くしたときの姿だ。
その表情には、生死を賭(か)けて戦う闘技士の、命に執着(しゅうちゃく)する厳しさも切なさもなかった。
フィレーナにあるのは、やるせない怒りだった。
その怒りは、この世界全てに対する透明で純粋な怒りだった。
すべてを敵に回し、怒りに身を震(ふる)わせ、果てしない孤独の中で、ただひとりで帝国に立ち向かう、一匹(いっぴき)の小さな修羅(しゅら)（鬼）を、思わせた。
だが、それが鬼だとしても、そこには、子供たちにいじめられ、向きになって逆襲する鬼ごっこの目の見えない鬼っ子のような幼ささえ見てとれた。
優雅に横たわる七人の皇帝種の中央に浮かび上がり、剣を振り回している立体映像のフィレーナは、神の手のひらの上で暴れ回る小さな猿のようにすら見えた。
「これは、フィレーナが、ボーの神殿を破壊したときの姿です」
長椅子の中央の空間から、解説の声が聞こえた。
「またまた、三年以上も前のこの映像ですか」
男の一が、欠伸(あくび)を嚙(か)み殺して言った。
「お嫌(きら)いですか？　私、今までいくつもあるフィレーナの資料映像の中では、このころのフィ

レーナが一番美しいと思いますわ。このころのフィレーナにあるのは、帝国への怒り……ただ、それだけの気がします。いわば、帝国への反乱の原点ですわ。このころのフィレーナの姿は、生きている美術品といってもいい価値があると思いませんこと？」

「今は、飾っておくだけの美術品ではなくなりましたわ。戦いのための美しい実用品。実用なくして美学なし……いわゆる帝国の理想の美学に近い生き物がフィレーナかもしれません」

女の二が、微笑みを絶やさずに言った。

「戦士が戦う姿は美しい……それは認めるとしても、なぜ、われわれに対抗する者としてのフィレーナは、女だったんでしょうね」

両性の五が、肩を竦めながら言った。

敵とは言わず、対抗する者という表現を使った。

「両性のあなたには、ご不満ですか？」

女の四が、両性の五に聞いた。

「いいえ、私は、男と女の両方の機能を持って生み出されましたから、帝国に対抗する者が、女であろうと男であろうとこだわりはありませんが……」

両性の五は、ちらりと男たちを、意識した。

「まだ、あのフィレーナが、帝国に対抗する者といえるほど、成長しているわけではありませんん」

男の二が、冷ややかに言い、さらに付け加えた。

「それにわれわれが最後まで残したフィロセラの後継者に、たまたま男が生まれなかっただけかもしれません」

「そうでしょうか……男女の生みわけなど、何百年も前から可能なはずでしょう？」

女の六が、言い返した。

「フィロセラは、何ごとにも自然な形態を尊ぶ、原始的な民族性の海洋国でした。子供の出産に生みわけなどという人為を加えるとは思えません……まして、あの娘は王家の子供です」

「いずれにしろ、フィレーナが女であったことは、今や、反乱の象徴的な存在になったフィレーナの障害になったとは思えませんわ」

女の四が、言った。

「女であることを秘密にしている以外にはね……」

男の一が、そう言って肩を竦め、話を続けた。

「女であることが知れたら、フィレーナに従っていた反乱暴徒の男たちはどうするか……」

女の二が苦笑した。

「確かに、男は、体力においては女に勝ります。力で女を押さえつけ、子を生ますことはできるでしょう。でも、子を生むのは、女ですわ。この世界で種の子孫を残し生存させるのは、生存競争という戦いです。生き物は、この星に誕生したときから生存という戦いを続けています。子供を生むというのは、メスの持つ本質的な戦闘能力かもしれません。だとしたら本当に戦い慣れているのは……本来、戦いにむいているのはオスとメスのどちらでしょうか……人類の文

明の歴史でみても、古代の昔から戦いの神というものは、女神が少なくありませんわ」
男の一が、溜め息をついた。
「お喋(しゃべ)りの戦闘能力に関しては、メスが確かに強い……それは認めましょう。だが、歴史上における実際の戦闘を、戦闘技術を進歩させたのは、圧倒的にオスです。敵に対する攻撃本能はオスが、勝ります。だが、オスに見られないメスの持つ特有の母性本能……子を守る本能は、攻撃的といえますか？　守備本能は、本来、戦いには向かないと思いますが……」
「だから、なんだというのです？」
両性の五が、男と女に分かれた皇帝種の雑談に割って入った。
「今、オスとメスの、戦いに対する優劣を話して意義があるのでしょうか。フィレーナが、男であろうと女であろうと、帝国に対抗する資格を持つ可能性が、あることは確かです」
男の一は頷いた。
「確かにそのとおりです。そして、フィレーナの他に、これといった候補者も見当たりません」
「対抗者になるかもしれない芽は、大切に育てなければなりませんわ」
女の六の呟きに一同は頷いた。
「われわれの進化させる超皇帝種が、この先、上手(うま)くいってくれれば、何の問題もないのですがね……」
「超皇帝種……さらなるわれわれの進化のかたち……か……」

男の七が、肩を竦めた。
「何ごとにも万が一の備えが必要です。たとえ、帝国が滅亡したとしても、人類の滅亡の責任まで、帝国皇帝種のわれわれが負うのは避けたいですからね」
男の三が、溜め息をつく。
「それも、これも、今はフィレーナ次第ですか……」
男の一が言った。
「まだまだ、研究中のものもあるにはありますが……」
男の七が聞き返した。
「異民族の急成長型ですね」
「ええ……元は、帝国種の進化促進を研究するための実験材料だったのですが……」
男の一は、長椅子に囲まれた空間を見つめた。
フィレーナの立体映像が消え、替わりに保育器に入れられた赤ん坊が浮かび上がった。
「これは、四年前に地方都市ドラで生まれた奴隷の子です。闘技士として育てられていましたが……」
赤ん坊は無邪気に、笑っていた。
その笑いには、何の屈託もないように見えた。
だが、その子供が、フィレーナがドラの闘技士だったころ、心ならずも殺してしまった道化師とその妻ミリカの間に生まれた男の子だということを、皇帝種の七人は、だれも知らなかっ

た。

いや、男の子の周囲のだれ一人、フィレーナとこの子の関係を気にかけるものはいなかった。

男の一は、赤ん坊の説明を続けた。

「この素材は、闘技士の人員不足を補うためもあり、人体素材実験を受けました。生理進化学で研究中の成長促進剤（そくしんざい）を細胞に注入することによって……」

赤ん坊の立体映像が、消えた。

「これが、四年後の今です」

少年の裸像が浮かび上がった。

少年とはいえ、皇帝種の男たちに勝るとも劣らない均整のとれた身体がそこにあった。

無駄（むだ）な肉など、微塵（みじん）もない全身筋肉と表現しても過言ではない肉体だった。

「帝国人の年齢でいえば、ほぼ、十二歳から十三歳……一年で三年分の成長を遂げています。運動神経だけでなく知能も奴隷の平均値の二倍……帝国人でいえば優秀種の最新種の知能指数と同等……しかも、さらに、頭脳は成長しています。闘技士として最高の素材であるばかりでなく、人類学上も、闘技で殺すにはおしい素材です」

男の三は、しかし、首を振り溜め息をついた。

「ただし、今のところ、その促進剤の実験材料の生存率は一パーセントもない。まして、生殖能力（せいしょくのうりょく）には不明の点が多すぎる。そんな状態で、子孫を残して、この星で、生きぬいていけるのかどうか？　いずれにしろ、自然に生まれたものではなく人為的に作られた人種に、人類

としての資格があるのかどうか……」
「資格はありますよ」
両性の五が、答えた。
「それを言えば、帝国人も同じでしょう。もともと人為的に人間の遺伝子を操作して、急速に進化するように生み出されたのが、帝国人種のはずです。この実験材料を人類と呼ばないというなら、われわれも人類ではない。いや、われわればかりか、今の人類自体がさまざまな人種の遺伝子が交じりあった混血種です。だいたい、子供が生まれる可能性のある生殖行為自体が、オスとメスの二種の人間の人為で行われている以上は、人類が、この星に生まれてから今まで、人為的に作られていない人種など、どこにも存在しません。さらに、試験管の中で生み出された男女両性の私が、この帝国で皇帝種として認められているのなら、どんな方法で、どんな形で生み出されようと人類は人類です。それが、滅びゆく人種か、生き残るべき人種かは別の問題ですがね……」
両性の五は、七人のまとめ役の立場を越えて、自分の意見を話しているようだった。
最年長の男、七が、両性の五に代わって話をまとめるように口を開いた。
「要するに、われわれの次なる超皇帝種が生き残ろうが、病院にいるような特殊変形優秀種が生き残ろうが、帝国種以外の民族種が生き残ろうが、成長促進された実験材料が生き残ろうが、生き残れるものがいれば、この星から人類は滅びない。生き残るものさえいればね……」
「どうなんでしょうねえ……生き残れるんでしょうか」

男の一が、他人事のように呟いた。
「われわれは精いっぱい、やっていますけれど」
男の三が、これも他人事のように言った。
「結果が興味深いですわ」
女の六が、肩を竦めて苦笑した。
「どうも、私たちって……」
女の二が、ぽつりと言った。
「人類の進化や滅亡を、ゲームの駒を操るように楽しんでいません？」
一同は女の二を見た。
女の二は続けた。
「何だか、私たち遊んでいるような気がするんです。人類ってものを……こういうこと、人間のすることでしょうか……」
そして、溜め息まじりに言った。
「私たち、もうすでに、人間ではなくなっているのかもしれません」
一同は、肩を竦めて微笑した。
七人の中央で、また声がした。
「森の精神波の異物反応が高まっています。彼らは、フィレーナと本格的な接触……交信を始めたようです」

「交信をね……」
男の七が頷いた。
「これだけは確かです。森の彼らはもはや人類ではない。彼らがフィレーナに何をするか」
「うまく、成長させてくれればいいのですけれど……」
女の二が呟いた。
「フィレーナが違う方向に行きそうならば……森の彼らを追い払うしかありませんね」
男の一が皆の同意を求めた。
一同は頷いた。
両性が、一同の意見をまとめるように言った。
「彼らが、フィレーナに何をしてくれるか……今は見守りましょう」
帝国の上層部、皇帝種は、反乱に対しては、ほとんど了解していた。
それだけではない……フィレーナのことも……ネストのことも……知ろうとすればリラのことも……調べる気にすらなれば、成長促進した奴隷の少年とフィレーナの関係も気がつくはずだ。
今、すべての動きが、帝国上層部の手のひらの中も同然だった。
帝国上層部が分からないのは、この星の人類の未来がどうなるかだけだった。

＊

森の中にひときわ高くそそり立つ灯台……その中には無数の気配……しかし、フィレーナは、

躊躇しなかった。

フィレーナは、蔦のからまった灯台の扉をこじ開けた。

「入っていいですね？」

フィレーナは、森の気配に声を出して聞いた。

……**われわれと話せる人間はそういない……せっかく、訪れた客を……拒みはしない……**

声が答えた。

フィレーナは頷くと、ギャッピーに言った。

「いくよ……ギャッピー」

ギャッピーは唸り声をあげて、動こうとしない。

ギャッピーが、唸り声をあげるのは、珍しいことだった。

いつものギャッピーなら、唸り声をあげるまでもなく敵を倒しているはずだった。

野獣が唸るときは、相手に対する警告や威嚇に見えて、実は自分の怯えを悟られまいとして強がっているときが多い。

弱い犬ほど吠えたがるのと同じだ。

ギャッピーは、得体の知れない気配に恐怖を感じていた。

たとえ、それに敵意が感じられないにしろ、警戒を解く軽率さをギャッピーは、持ち合わせていなかった。

本当ならフィレーナさえいなければ、一目散にその場から走り去りたかった。

が、フィレーナを、ほうって逃げるほど、臆病でもなかった。
ギャッピーは、困り果てていた。
それが、思わず唸り声になって出たのだ。
フィレーナは、そんなギャッピーの気持ちが分かって微笑した。
「いいよ、ギャッピー。君はそこで待っていてくれれば……」
ギャッピーは、そんなフィレーナをうらめしそうに見た。
……今までは、守ってやれたのに、あんたは、おれの守りきれないところに足を踏み込もうとしている……
まるで、娘を嫁に出す父親のような、情けない目だった。
いや、恋人の旅立ちの後ろ姿を見送るような、不安いっぱいの目だったかもしれない。
だが、ギャッピーは、フィレーナの様子を見て、唸るのを止めた。
フィレーナは信じられないほど落ち着いていた。
ギャッピーが生まれて初めて感じた恐怖の相手を、フィレーナが感じないはずはなかった。
……それなのに、この落ち着きは何だ？……フィレーナ、おまえはこの相手を、恐れていないのか？……
フィレーナは、ギャッピーの緊張をほぐすように顎を撫でた。
「安心して……かならず戻ってくるから……ね」
その手のひらは、今までギャッピーの感じたことのない確かさがあった。

ギャッピーは、そのとき、本能的に意を決した。

……今はフィレーナに頼ろう……このわけの分からない気配を相手にしたら、ここで待つより、フィレーナについていったほうが安全だ……

それは、ギャッピーがフィレーナに対して、初めて感じた「守られたい」という依存心だった。

今まで、フィレーナを守ろうとはしてきたが、フィレーナに守られたいと感じたことはなかった。

ギャッピーは、こんな気分にさせてくれるフィレーナが、なんとなく誇らしかった。

それが、「主人なしではいられない」という、自分の中にあるあまり好きではない犬の血がさせる気持ちだとしても悪い気がしなかった。

ギャッピーは、甘えるように鼻をかすかに鳴らした。

フィレーナは、そのとき初めて、ギャッピーが頼れる相棒に昇格した。

フィレーナは、灯台の中に足を踏み入れた。

ギャッピーは、黙ってフィレーナについていく。

中は、真っ暗で何も見えない。

だが、あふれんばかりの気配が、感じられる。

フィレーナは、ギャッピーの頭に手を置いて言った。

「ギャッピー、落ち着いて……」

もちろん、ギャッピーは、フィレーナに従う気だ。
静かに伏せの姿勢をとった。
いきなり、無数の気配がフィレーナとギャッピーの側に来た。
ギャッピーは、思わず毛を逆立て起き上がろうとした。
「落ち着いて、ギャッピー！　恐くない！」
フィレーナが、低く叫んだ。
ギャッピーは、フィレーナの声に釘づけになったように動くのを止めた。
フィレーナとギャッピーを覆い尽くすようにある気配は、決して気分のいいものではなかったが、今のギャッピーはフィレーナにとことん従うつもりだった。
……**人間**？……
溜め息のような声が、フィレーナの頭の中で聞こえた。
「ええ……僕はフィレーナ……」
……**フィレーナ**？……
……**フィレーナ**……**人間**？……
……**人間**……
……**人間**！……
どよめきのようなものが、無数の気配に湧き起こった。
……**人間の身体**？……

……**人間の身体**……

……**人間の身体！**……

気配は、次々にフィレーナの身体に触れまさぐった。

まるで、いとおしむように体中を擦り探った。

それがフィレーナには肌の感触ではなく、頭の中の感覚で感じられた。

それは、泡立つ粘液の中に浮かび身を任すような、湿った無数の刷毛で心を撫でられるような、気持ちがいいとも悪いともいえないくすぐったいような奇妙な気分だった。

だが、すぐに森の中で出会った気配の声がした。

……**止めろ！　断りもなく触るのは、人体を持つ人間への挨拶にしては失礼だ**……

潮が引くように身体を触られる感覚が消えた。

けれど、気配は目の前にひしめきあって動かない。

フィレーナは、ふっとひと息ついてから、聞いた。

「僕のことは、さっき僕の中に入り込んで、もう、分かっただろう？　でも、僕は、何も知らない。あんたたちは、いったいだれなんだ……」

……**人間だ**……**われわれも**……

「人間？」

フィレーナは、暗闇の中で目をこらした。

いくら暗いとはいえ人間らしきものはない。

気配だけは満ち溢れているのに、何もないのだ。
気配に手を伸ばす。
何も触れない。
「そんな馬鹿な……人間だとしたら……どこにいるんだい？　いや、あんたたちが、いっぱいいるのは分かるよ。感じるよ。でも、姿がない。どうして？」
……**姿はない……とうの昔に姿は失った……だが、人間だ……**
「見えない人間？　そんなのあり？」
……**われわれは身体のない心のようなものだ……人間の意識とでもいおうかね……**
フィレーナは、茫然とあたりを見回した。
「……そんなのが、身体もなしでいられるわけ？……じゃ、あんたたちは、死んだ人なわけ……幽霊だとでもいうの？……止してくれ！　僕は、幽霊なんか信じない」
フィレーナはむきになって叫んだ。
「僕は、闘技士だった。闘いのときに、死んだ後のことなんか考えられない。それに闘った相手に恨まれて化けて出られたら、それこそ僕は生きていけない。嫌だよ。そんなの！」
フィレーナは、駄々を捏ねるように身をよじらせ叫んだ。
その姿は、いささか滑稽ではあったが、フィレーナにとっては冗談ではなかった。
「ふざけるな！……といいたいよ」
死後の世界があり幽霊がいるのなら、人を殺したり人が殺されることに、これほど悩むこと

はなかった。

いや、とっとと、自分で首でもくくって死んだだろう。

でなきゃ、リラと一緒に心中したっていい。

こうやって生きているより、二人で幽霊やったほうが楽だったろう。

「それを今さら……それはないでしょう？　それ言われちゃたまんないよ……」

フィレーナは、何度も首を振った。

なんだか、涙がこぼれそうだった。

声が、なだめるように言った。

……**安心しなさい。われわれは死んではおらん……生きている人間だ……だが、身体はあったとしても、とっくに朽ち果てているだろうがね……**

「身体が朽ち果てたって？……じゃあ、あんたたち、歳は幾つなわけ？　男なの？……女なの？……人間だっていう証拠を見せてよ。少なくとも幽霊でも化物でもないっていう証拠を揃えて見せてよ」

……**証拠か……具体的な証拠は見せられない……だが、あなたの頭の中にわれわれの姿を描写させることはできる……だが、あなたにとって見たくない姿かもしれないね……**

「何だっていい……見たいか見たくないかは見てから決めるよ……」

声は、溜め息混じりに言った。

……**きっとあなたは驚くだろう……**

「どんなのが出てきて驚かそうとしても僕は大丈夫さ……僕は、狼のフィレーナだ。見たくないものは見過ぎてきた……」

フィレーナは、声の姿にたとえ驚いたとしても、それから目をそらす気はなかった。

フィレーナの思いは、声にして出さなかったが、森の気配には通じた。

……分かった……

声は答えた。

……われわれはみんなほとんど同じ姿だ……なにしろ、平均年齢が三百歳だ……

「三百歳？」

……あなたの十五倍は生きている……百歳までの若さならともかく……この歳になってはもうそれぞれの区別もつかない……一人の姿で代表させよう……

す〜っと、何かが、フィレーナの中に入り込んできた。

……目をこらしてごらん。私の姿をあなたの網膜に感じさせてあげよう……

フィレーナは、闇の一点を見つめた。

なにかうずくまったようなものが、ゆっくりと見えてきた。

……この歳になればもう男でも女でもない……子を生むことはできないからわれわれに若い者はいない……われわれに身体はない……あるとしたら三百歳の……

それは、人間とはとても呼べなかった。

背丈はフィレーナの半分ほど……身体中が、ひび割れかさかさになった干物のような皺だら

けの生き物だった……それを人間だと識別できるとしたら、頭のような突起があり、痩せ細った四本の手足らしきものが胴体からぶらさがっていることしかなかった。

頭らしき突起が、フィレーナのほうに向いた。

皺だらけでどこに目鼻と口があるのかも分からない。

「あんたが、この声の人間？」

……そう、見て楽しいものではないだろう……三百年間、われわれの意識は生きているが、身体はそう長くはもたん……身体があるとすればこんな姿だ……幽霊だったら、もっと若い姿で会えたかもしれないがね……

フィレーナは、目を背けなかった。

醜悪な姿だとは思ったが、目をそらしては失礼だと思った。

人間が、いや、生き物が生きてこんな姿になるとしたら、気味が悪いというより、憐れで悲しくて気の毒でなおさら、目をそらしてはいけないと思った。

その気持ちを読んだらしく、声が言った。

……あなたのわれわれへの感想には感謝すると言っておこう。やはり、あなたは、今時の人間とは違う感じ方をする人らしい……

「違う感じ方って？」

……並みの人間ならわれわれから目をそらすはずだ。今の人間は姿形を既成の美しさだけで判断し、醜いと思われるものを、嫌悪し、遠ざけ、排除しようとするからね。だが、その美し

さ醜さが、本当に正しいといえるかね……はたして既成の美醜が、間違っていないと言い切ることができるかね。たとえば、帝国人の思う美しさは、本当に美しいものだろうか……

「それは……分からない……でも」

フィレーナ自身も、声の主を決して美しいと思いはしなかった。

それを、今は、悪いと思った。

「でも、僕も……」

……分かっているよ。私を醜いと思った。人間という動物として、生き物の身体として醜いと思ったのだろう。それは、決して誤った価値観ではない。われわれは生き物として美しい身体の時期はとっくに過ぎてしまっている。だが、あんたは醜いと思った次に、われわれを憐れと思った。気の毒と思った。なぜかな……

「えっ？」

フィレーナは、答えられなかった。

ただ、そう感じたのだから……としか言えなかった。

声の主が、代わりに答えた。

……あなたが、生命を大切にしているからだ。命の生きることを大切にしているからだ……

「僕が？　命を大切にしている？」

フィレーナは、虚をつかれたように声の主を見つめた。

……そう、生きることが大切だから、生き物の美しさが、感じられるし、衰えゆく生き物の

身体を憐れみ気の毒だと感じることもできる……

「闘技士だった僕が？　行くところ、どこもかしこも、屍体（したい）の山だった僕が……」

……だが、本当は殺したい相手などいなかった……

「僕は何度も自分が死んでいいと思ったことがある。このまま死ねたら楽だと思ったことがある。そんな僕が生きることを大切にしてるって言うの？」

……しかし、死ななかった。そして、あなたが出会っただれもが、あなたに生きてほしいと感じた。それは、あなたが自覚していようといまいと、生き物の生きることを……生き物の命を……大切にしているからだ。だれもが、そんなあなたに、生きていてほしいと感じた……

フィレーナは、何度も首を振った。

「違うよ。僕は、行く先々で、屍体の山を作ってきた。死んでほしいと思われても、生きていてほしいなんてだれも、本気で思いやしない。僕は狼のフィレーナだ。……今、世界中で起こっているフィレーナの反乱と暴動は、僕から始まっている。そんな僕が、どうして、命を大切にしているなんて言えるんだ！」

……フィレーナ、もしもあなたがあなたでなかったら、もっと多くの命が消え、これからも消えていくかもしれない……あなただからこそ、本来消えていくはずだった命を、少なくできているのかもしれない……そうは思えないかな？……

「言っていることが分からないよ。これだけたくさんの人が死んでいるのに、僕が僕じゃなければ、もっと、死んでいるって言うの？」

……かもしれないし、そうでないかもしれない……いずれにしろ、あなたが、帝国人種でないことは確かだ。そして、私たちのような意識だけの肉体のない人間でもない。この星に生き残る可能性のある人類がもうひとつあるということかもしれない……

フィレーナには、声の主の言っている意味がますます分からなかった。

「この星？　人類？　何のことなんだ。僕は、ただのけちな闘技士だ。闘技士でなければ南部海岸地方のちっちゃな国、フィロセラのけちな後継ぎだ。そうでもないとしたら帝国に喧嘩を売ったけちな反乱軍の親玉だ……」

フィレーナは、喋り続けるうちに、どんどん大きくなる自分の世界に茫然となった。

声の主は、こっくりと頭のような突起物を頷かせた。

……そして、その帝国はこの星を……人類を支配している……フィレーナ、あなたが、われわれに会えたのは偶然かもしれない。だが、その偶然を、そのまま見逃してはいけないのかもしれない……教えてあげよう。われわれが、こうして生き続けた三百年間に知ったこと……この星に何が起こり、何が起こりつつあるかを……

……だから何だというんだ……

フィレーナは、とてつもないものに、巻き込まれそうな予感がした。

妙にいらつく気持ちを、押さえながらフィレーナは聞いた。

「それを知ったからって、僕にどうしろというんだ」

……さあ、未来のことはわれわれにも分からない……あなたの未来は、あなたが決めること

だ……そして、それが、この星と人類の未来を決めるかもしれない……

「この星と人類の未来?……」

唐突に姿を見せたあまりに巨大なものにフィレーナは竦むしかなかった。

フィレーナは、後ずさった。

「そんなでかいこと……知らないよ……知りたくもない」

フィレーナは、ギャッピーに叫んだ。

「行くぞ! ギャッピー」

ギャッピーは、いかにも不服げに、のっそりと起き上がった。

ギャッピーには、得体の知れない気配とフィレーナの間に、どんなやりとりがあったかは分からなかった。

だが、フィレーナが、何かに怖じけ、逃げようとしているのは感じていた。

……なんだ? せっかく、フィレーナを頼ろうとしたのに、このざまは何だ? 相手が、敵意も見せぬのに、尻尾を巻いて逃げようというのか?

ギャッピーは、失望した気分をあからさまにして、ゆっくりとフィレーナの後を追った。

フィレーナは、後も見ずに扉を、蹴破るようにして外に出た。

そして、一刻も早く森の灯台から遠ざかりたかった。

だが、その脳裏に声が聞こえた。

……行くがいい……どこでも好きなところへ……やはり、あなたには資格がない……フィロ

セラの末裔に、この星の未来を決められるはずがない……

フィレーナの足が止まった。

「フィロセラ？　僕の国とさっきの話に何の関係があるんだ」

声は、何も答えなかった。

フィレーナは、灯台を振り返った。

密林の闇の中から突き出した灯台の先端が、夜空を照らす三つの月の光の中でかすかに光っていた。

先端にはたぶん鏡玉があり、そこから指し示す光が、行くべき道をフィレーナに教えてくれるはずだった。

ギャッピーと目があった。

厳しい目だった。

明らかに逃げたことを非難していた。

フィレーナは、照れたように微笑して肩を竦めた。

「ギャッピー。ここまで来たんだ」

フィレーナは、ギャッピーに言った。

「僕、引き返せないよね」

ギャッピーには、フィレーナが、次に何をするつもりか分かっていた。

ギャッピーは、何も答えず、「だったら、逃げるな。面倒臭い……」とでも言いたげに、た

だ、すたすたと、今出てきたばかりの灯台の扉へ戻っていった。

……**なにかな?　忘れ物かね?**……

フィレーナが、灯台の中に来ると、声の主はまだ三百歳の姿でいた。

「もう、その姿でなくていいです。見えなくてもどうせ声は聞こえるんでしょう?」

声の主は、姿を消すと直接、フィレーナの頭の中に語り始めた。

それは、この星と人類の話だった。

＊

この星と人類の話……。

それは、帝国機密そのものだった。

心理更正病院の電算機の持つ膨大な資料の中から、今、ネストはテスの助けを借りて、フィレーナが聞く同じ内容を、別の角度から知ろうとしていた。

＊

この星も人類のことも、今のリラにとっては関わりのないことだ。

リラは、砂漠の周辺を遠回りして砂漠の北西に出る道を、歩き続けていた。

携帯通信電算機に、狼犬を連れた若者の情報は、いっこうに入ってこない。

だが、砂漠までの灯台の間隔を見れば、砂漠のどのあたりに中継の灯台が、点在しているか計算はできた。

そして、フィレーナが砂漠を抜け出したとき、どのあたりに現れるかも見当はついた。

問題はいつ、そこに現れるかだった。

フィレーナがなんの道草もせず、砂漠を直進できたなら、遠回りしているリラが、追いつけるはずがなかった。

フィレーナは、とっくに砂漠を抜けているのかもしれない。

リラは、あまりの情報不足に焦りを感じていた。

見落としがあるかもしれない。

リラは、何度も情報を見返した。

そして、フィレーナとは直接関係のなさそうに思える帝国軍の動きに目を止めた。

反乱鎮圧のため、帝国軍の一個大隊が、砂漠の北西に向けて動き出したのだ。

ここ、数十日、帝国軍の反乱鎮圧は、目立った動きを見せていない。

反乱軍の暴れ放題といってよかった。

それなのに、この出兵は、いささか変だった。

しかも、砂漠の北西には小さな村しかなく、反乱暴徒の情報もなかった。

いったい、何のために？……。

妙な、胸騒ぎに襲われて、リラは、その帝国軍師団の通信を傍受してみた。

帝国軍師団は砂漠の北西に面した何もない荒地に野営し、待機せよとの命令を受けていた。

リラは首を傾げた。

その近くに村はなく、反乱や暴動の起こるはずのない場所だった。

しかも、野営の陣形は、まるで砂漠に向かって攻撃を仕掛けるように見えた。
砂漠に一個師団が攻撃するような目標があるのだろうか？
今、砂漠を攻撃して、いぶり出されてくる生き物がいるとしたら、それこそフィレーナとギャッピーぐらいなものしか考えられなかった。
だが、狼犬とたった一人の若者に、いくらなんでも一個師団は多すぎる。
けれど……。
リラは思い直してみる。
南部海岸地方を制圧した狼のフィレーナの頭目を捕まえるためなら……。
もしかして……。
帝国にとって狼のフィレーナ軍が、それほど大きな存在だとしたら……帝国中枢（ていこくちゅうすう）も一個師団の派遣（はけん）を考えるかもしれない……。
リラはそう思い出すと、いても立ってもいられなかった。
リラの足は、自然と一個師団の野営地に向いていた。
リラの思いは、当たらずとも遠からずだった。
その一個師団は、フィレーナと砂漠の中の森の存在との接触を知った帝国上層部が、事があれば森を攻撃させるつもりで用意したものだったからだ。

*

帝国上層部の皇帝種、七人は、帝国全土のどんな大規模な反乱よりも、フィレーナと砂漠の

森の動向を興味深く見つめていた。
そして、フィレーナが、森に辿りついてもうすぐ三十日が過ぎようとしていた。

第4章

月に吠えて……

ネストとテスは三カ月の間、心理更正病院の資料庫の中に入り浸っていた。
資料庫の巨大な記録収容力を持つ電算機の中には、この星のさまざまな歴史書と歴史映像が記憶されていた。
帝国機密とは、この星の人類の歴史そのものだった。
人類の歴史とは、永遠に続くであろう時の流れの中にわずかに瞬いた人類という生物が、どのように存続してきたかの記録だ。
もちろん、そこに人類が残した記録のすべてが集められているわけではない。
歴史などというものは、通り過ぎていく時代の趨勢で、価値観が変わり、何度も解釈し直され、書き替えられてきた。
書物や映像に記録された歴史などというものは、どんなに冷静に事実のみを記録したといっても、しょせんはその記載者、作者の視点というフィルターによって色づけされた、事実を素材にしている創作物といっていい。
ネストは、殺し合いの筋書を作る闘技脚本家とはいえ、曲がりなりにも創作者の隅っこに

しがみつこうとした男だ。
だから、世に残る歴史とは、創作物の一種として見ている。
いや、歴史だけではない。
日々、報道機関で公衆に流される情報自体が、事実を素材にした創作物だと思っている。
いかにも、嘘臭く思える、三流情報機関の流す芸能報道の偶像美形の醜聞も、しかめ面をして、いかにもこれが真実であるという装いをして流される、一流情報機関の政治経済報道も、その情報の記載者がいる以上、書き手に創作意識があろうとなかろうと、真実とはもう一つ別の作りものなのだ。
真実は、人を通して語られた瞬間から、その人間のフィルターで色づけされた虚構であることをネストは知っている。
その虚構を信じるか信じないかは知らされた者次第で、知らせた者は、その虚構を恥じる必要はないとすら思っている。
だから、情報が間違っているからといって誤報を流されたと、怒るほうがおかしいのだ。
人間の間を行き来する情報とは、もともと、そういうものなのだ。
情報を、鵜呑みにして信じるほうが間違っている。
それが、情報というものを告げる側と、受け取る側に対するネストの姿勢だ。
したがって、情報は、時代の時流、創作者の置かれている立場と、その創作者の感性によって、同じ事実が幾通りにも枝分かれし、評価、表現される。

その評価と表現のために、あえて目を閉じられた真実、闇に葬りさられた真相、歴史的な評価を与えられず消されていった事実は、ここに収容されている歴史の何百倍もあるだろう。

たとえば、帝国支配のこの時代なら、帝国にとって不都合な記録や思想は、抹消させるために焼き捨てられて当然のはずだった。

それは、過去の歴史上、ありとあらゆる国々と民族とその支配者の手で、行われたことだ。

いや、支配者ばかりではない、もともと、人間という生物は、都合の悪いことを忘れたがる生き物なのだ。

人間個々のわずかな時間の人生……。

数十年の経験すら、自分の都合のいい解釈で記憶されがちだ。

どうしても忘れられないような嫌な記憶があったとしても、少なくとも、自己責任だけは免れようとする。

たとえば、単なる金目当ての強盗殺人のように弁解のしようもなく自分の利害だけで人を殺しても、その行為が一時的には、罪の意識を生んだにしろ、時がたてば、相手を殺す羽目になった理由を見つけ、自分の責任意識をすりかえる。

相手が抵抗しさえしなければ殺さなかった。金が、欲しくならなければ、殺さなかった。あげくの果ては、金が欲しくなるように自分を追い込んだ、社会が、時代が悪い。いや、たまたまそのとき、金を持っていた相手が、悪いのだ。自分が殺人を犯したのは、相手が悪かったからだ。人は、弁解の種を見つけ、口実で自分を納得させ生きている。

たまに、過去の出来事に罪を意識することがあっても……「あのときは仕方がなかったんだ」と、時の流れが都合よく、その罪悪感を、癒してくれる。

さらに、どうしようもなくなると、「人間はもともと生まれながらにして罪深い生き物です。あなただけが悪いのではない」……という救いの神に逃げ込む智恵に人間は逃げ込める。

「私だけが悪いんじゃない。仕方ないんだ。さあ、みんな、手を繋いで幸せになろうよ」

こうなると、神様に責任と弁解と口実を委ねてしまえる。

そして……。

時が流れれば、真実などどうでもよくなり、都合のいい口実だけが残るのだ。

もともと、自分に起こるさまざまな出来事にいちいち罪の意識や悲嘆を感じ続けていたら、人間は生きていけない。

精神を病むか、自殺してしまうだろう。

けれど、精神を病んだそぶりもなくほとんどの人間は生きている。

なぜなのか……？

人間は道具を使う珍しい動物だ。

火を操る不思議な動物でもある。

そして、時とともに経験を積み上げることもするが、同時に本人にとって悪い経験は忘却するか、甘美に変質させる術を脳の中に持っている、ずいぶん、身勝手な動物だ。

それが、もしかしたら、人間という動物の持っている他の生物とは違う基本的な特徴かもし

れない……とすらネストは思っている。

こんなネストの人間に対する考えを、もし、心理病理観察看護のテスが聞いたらこともなげに頷くだろう。

……忘れたものや変質された記憶を手繰る。それが、古来からの精神医学と心理学の基本的方向です。その人間が忘れていながら、なお潜在意識の底に残っている何かを探りだして、それを思い出させ、本人に自分とは何かを自覚させる。それが、今も昔も考えられ試みられた最も適切な心理病の治療法だとされています……

そして、付け加えることだろう。

……もっとも、忘れることが心理や精神の病気だとしたら、人間は、個人も民族もみんな病気だといえるかもしれません……

個人ですら、自発的健忘症に陥りがちな人間だ。

まして、そんな人間の集合体である民族や国家が、存続するためには、忘れなければならないことは山ほどあるはずだ。

そして、忘れたふりをして、やがて、本当に忘れてしまう。

都合の悪いことは、みんなで忘れれば怖くないのだ。

だから……。

人間の歴史は、物忘れの名人だ。

そして、世代が五つか六つ変われば、民族や国家が忘れたいと思う事実など、完全に闇の底

に消えてしまう。

今、自分たちの持っている歴史を、過去に本当に起こった正しい事実だと言い切れる人は、一人もいないはずだ。

わずか、数百年前に起こった歴史上の事件ですら、残された文字や写真や遺物で知るだけで、本当の事件を体験した人は、もはや、だれ一人……生きてはいない。

過去に起こったあの戦争は、あの革命は、人類を揺るがしたというあの思想は、あの人物は、本当に存在していたのだろうか……。

……よく考えてみれば、自分がこの星に生存している時間のほか、確かなものなど何一つない。

だとしたら、人類の歴史など、今を生きている人間にとって何の意味があるのだろう。

ネストは、人間個人の持つはかない時間と、人類の歴史という名の不確かにして膨大な資料を比べてそう思わずにいられない。

さらに巨大な時の流れの中、大宇宙の片隅に浮かぶ小さなかけらにすぎない、この星……その寿命のまして一瞬でしかない人類の時間の不確かな記録を、知ったからといって、何の価値があるのだろう……。

「おれは、この星について、ここまで知る必要があるのだろうか……知らないでいれば、それはそれで、済むかもしれないのに」

だが、大雑把に資料の概要を眺めるうち、ネストは集められている資料の意外さに気づいた。

「この資料庫は、何のために……」
ネストは、いささか、あきれてテスの顔を見た。
心理更正病院の資料庫には、帝国支配の現在、収拾できうるありとあらゆる記録が、保管されていた。
おそらく、帝国にとって何の役にも立たないだろう記録があった。
さらに、驚くべきことには、帝国支配にとって不都合と思われる資料すら、きっちりと保管されていたのだ。
テスは、ネストの疑問を察して頷いた。
「帝国が、帝国の繁栄と存続のためだけを考えていれば、帝国に不都合な歴史資料は抹殺したに違いありません。でも、帝国はこうして、残しておいた。……私、思うんです。もしかしたら機密というものは、あばかれるためにあるのかもしれません。あばかれる必要のない秘密は、もともと秘密にはならない。抹消されるか忘れ去ればいいんです。人間はそれが簡単にできるはずの動物でしょう？」
「それを機密として残しておいたのは、何かに役立つと考えたからか……」
「私もそう思っています」
ネストは肩を竦めた。
「……しかし、過去の歴史が、現在に、直接、役立ったことはまずない。人間は、あやまちをいつも繰り返す……」

「繰り返さなかったことが、ひとつだけありますわ」
「ひとつだけ……？」
テスは頷いた。
「核兵器開発後の核兵器による世界全面戦争です。その後に局地戦はいくつも起こりました。核兵器も使われました……それでも、全面戦争は、起こらなかった。核兵器を使った全面戦争は人類そのものの破滅を意味するからです。核兵器全面戦争の危機を人類は抹消できなかった。忘れられなかった。
けれど帝国の世界制覇の後は、核兵器による全面戦争に恐怖を感じている人はほとんどいません。当然ですわ……もうこの世に、帝国によって核兵器は根絶されたし、全面戦争になろうにも帝国の一国支配では、世界を二分するような戦いは起こりそうにもありませんもの……核の全面戦争は、人類にとって、もう、忘れてもいいことなのかもしれません。
でも、核兵器の脅威以外にも人類が忘れてはならないことがある。帝国が、帝国に不都合に思える歴史を機密として残したのは、それが、帝国だけではなく、人類の滅亡にかかわることだからです」
「帝国上層部は、帝国だけのことを考えていたのではないということか……」
「ええ……彼らが考えているのは、たぶん、人類そのものの未来……歴史という名の人類の過去が役立つかもしれないとしたら、それは、帝国だけではない人類そのものの未来への参考としてです。そして、それを、今、ネストさんに、開放するとしたら、それほど、人類自体がせ

っぱ詰まっているということです……でも、この星の人類の歴史を知ったからって、私たちに何ができるというのか……っていわれたら……」

テスは、肩を竦めた。

「知らないよりは知ったほうがいいって……いうしかないのかもしれません」

「知ったところで、かえってろくでもないことになりそうだ」

テスは、溜め息をつきながら頷いた。

「はい……けっこう、ろくでもないです」

テスは否定しなかった。

そして……。

今……その答えはネストの予想したとおり、ろくでもないものだった。

「知らなければよかった。知りたくなかった」

この数週間、この台詞がネストの口癖になってしまった。

人類の歴史は、ネストにとって、ほとんど他愛のないものだった。

思ったとおりの、戦争と休息程度の平和がおりなす単純なモザイクに見えた。

文明の進歩によって、人類の世界が広がるにつれて、戦争の規模が、拡大していくだけの話だ。

戦争の理由が、食糧調達のためから、土地争い、民族、宗教、経済、思想と変わるだけで、結局は殺し合いが、繰り返されるにすぎない退屈な歴史だ。

だが、デビス帝国のくだりに差しかかると、とうとう、退屈からろくでもなさへの溜め息が混じり始めた。

そして、帝国の歴史は、もしかしたら、人類が避けることのできない歩みのひとつかもしれない……と、ネストは思った。

それだけに、なおさら、情けなくろくでもなく、溜め息を出すのも馬鹿馬鹿しくなった。

テスは、落胆の度合いが増す一方のネストを、患者として、研究対象としてだけ、観察してはいられなかった。

「ネストさん……」

ある日、テスが、耐え切れずに聞いた。

「やっぱり、知らなければよかったんでしょうか……ネストさんは、機密を知らないほうが楽だったんですよね？」

「かもね……」

「ですよね……」

テスは、今にも泣き出しそうな顔でネストを見つめそれから深い溜め息をついた。

「いいや……」

ネストは、首を振った。

「いいも悪いもないよ……ここまできたら、最後まで機密を知ってみるさ」

今はもう、ネストは帝国の機密を、これ以上知る情けなさよりも、テスの溜め息を聞くほう

がつらかった。

「……はい……」

テスも、心理病理観察看護職特有の、思いやりのある微笑（びしょう）という表情を作って、頷くしかなかった。

こうして、ネストとテスは、帝国機密の核心の奥へ奥へと、足を踏み入れていった。

＊

帝国の歴史は、こんな語り口で始まっていた。

「人間は数限りない異人種との交配と突然変異を繰り返し進化を続け、現在の人間の形になった」

ネストとテスの前に見渡すかぎり、人間が見える。

衣装は何一つまとっていない裸のままの男女だ。

それは、帝国勃興（ていこくぼっこう）以前に、この星に住んでいたさまざまな人間、男女一対ずつだった。

「これが、この星のさまざまな人種です。これは、帝国勃興のわずか二百年前に、この星に住む人類を可能な限り分類した映像です。しかし、それは、精密に分類したというよりむりやり分類したようなもので、現実には、人種といえるほどの差はありません」

頭上から資料庫の電算機の声が聞こえた。

そこは心理更正病院の資料フロアの多層立体映像の空間舞台（立体スクリーン）であり、実際にいるのはネストとテスだけで、あとは、映像の幻にすぎない。

大雑把に白色、黄色、黒人種の三種類に見えるが、さらによく見れば、それぞれ、わずかな違いもあり、その数は、数万を越える。

これだけの人間の数を一堂に映しだせるのは、並はずれた解像度を持つ立体映像映写機ならばこそだ。

資料庫の電算機の声が告げた。

「ここにいる人間は、なるほど肌の色や体格、骨格が違いますが、この星の人種は交配に交配を重ね、ありとあらゆる人種という人種が交じりあい、生物学上、この星の人類に、人種としての区別はもはや見つけられなくなっていました。ここには、純粋な民族どころか肌の色も白人も黒人も黄色も純粋な人種はいません。

帝国勃興前、この星は人類という名の類人猿種の中の人間種が、一種類いるだけだったのです。人間に種別をつけるとすれば、それは、国と、宗教と、言葉と民族意識……といってもその民族は、生物学上には交配に交配を重ね、けっして純粋ではない民族なのですが、とりあえず意識としての民族意識……どれもこれも、生物上の差ではなく、観念としての差でしかありませんでした。

それでも、人類は互いに差をつけて戦いを続けなければなりませんでした。なぜなら、この星に人間は繁殖しすぎたのです。人間が生存するには数が多すぎたのです。人間は、まるで、増殖しすぎたレミングが、群れをなして、海に飛び込み死んでいくように、互いに戦いを起こし殺し合いました。

大規模な人間の戦い……戦争や侵略……それは、この星から人間を減らす作業に、ほかならなかったのです。
そうしなければこの星は増え過ぎた人類によって生態系を維持できず、とうの昔にこの星の人類は他の生物もろとも絶滅していたでしょう」
ネストは肩を竦めた。
「何やら、その理屈は、帝国が他民族を滅ぼし世界制覇をなしとげるための口実に、受け取れぬこともないな」
だが、資料庫の電算機は、資料集積のためのもので、ネストの問いには何も答えず蓄積した資料の要約だけを語り続けた。
「かつて、この星には、戦争と侵略という人間本来の好戦的性質に根ざした自滅作業以外にも人間を減らす天敵がいました。
人間の寿命は今ほど長くなく、疫病や寄生虫など、人間の数を調整できるものが自然界に幾つもあったのです。
天敵は生物だけではありません。干魃や洪水……地震、火山活動、氷河期などの星自体の変化による飢餓や破壊が人間の数を、適度に保っていたのです。
けれど、人間の技術の進歩によって、それらの天敵は駆逐され始めました。農耕地の開発や水資源などの利用技術は、人間から干魃や洪水による飢えという天敵を奪い、医学は生物上の天敵を次々に抹殺していきました。

もっとも、その分、人間自身が起こす自滅作業である戦争や侵略の規模も大きくなったのですが、人口の増加を抑制するほどのものにはなりませんでした。

……戦いによって、滅ぼされた民族は、数限りなくありましたが、人間の数自体は限りなく増え続けたのです。

この星が、星本来の健全な状態で許容できる生物としての人類の数は最高四億個体です。それが、この星には、一時期、その二十倍以上の人間が住むようになってしまっていたのです……明らかにこの星の生態系は異常な状態であり、当然、その人間は、他の生物の犠牲なしで存続は不可能です。

人間による自然破壊は頂点に達し、日に三百を超す生物種が絶滅する状態になりました。人間による自然汚染は、他の生物種だけでなく同時に本来この星で生存のできる人間の許容数を下げていきます。本来、人間による自然破壊がなければ四億人は生存できていたこの星が、百五十年前には三千万しか生きられない星になっていました。だが、この星には、その当時八十億の人間がいました」

「定員三千万に八十億の人間か……」

ネストは、溜め息をつくのも忘れてしまった。

いうまでもなく七十九億七千万の人間が多すぎるのだ。

帝国統治下の現在ですら、五億を越す人間が、この星に生きているのだ。

「これから先、もっと、減らなければならないのか……」

テスは肩を竦めた。

「それは確かです。今、帝国中で起こっているフィレーナ関連の反乱でおそらく、この星に住む半数の人間が抹消されると思います。それでも、この星には多すぎる人数が残ります。最終的に何人が残るのかは、上層部の計算次第で、私には分かりません。でも、その数は三千万とは限りません。その数より、多いとも少ないともいえません。定員三千万は、この星本来の環境の中で、生きていけるはずの人間の数です。けれど、この星には本来の環境はもうありません。この星に一番人類の数が似合っていた十万年前の空気も水も、もはや、この星にはどこにもありません」

「十万年前の空気と水……か」

「ええ、心理更正病院の中庭に、人工的に作り出されている空気です。ネストさんが、潜在する記憶のどこかで、懐かしがっていた空気です。でも、私には決して楽な空気とは言えません。けれど、慣れれば、何とか我慢できる。人間は環境に順応しやすい生物です。もっとも、十万年前の空気で生きていた昔の人々が、いきなり現代に連れてこられたら、心理更正病院の中庭以外では呼吸困難を起こして、死んでしまうかもしれませんけれど……」

資料庫の電算機は、ふたりの会話にかまわずこの星の歴史を説明し続けた。

「この星には人間が多すぎる。

人類が生きていくためには、なんとしてでも人類を減らさねばなりません。けれど、問題は、どうやって減らすかです。

七十九億の人間のために三千万を減らすのは簡単かもしれません。人類の過去の歴史に幾つもあることです。仮に、一つの民族を、抹殺すれば民族によっては三千万人を越える人間を同時に消滅させることができます。

けれど、三千万人のために七十九億を減らすことは簡単ではありません。民族も宗教も思想も七十九億から三千万を選び出す基準にはなりません。もう、そのころには民族も宗教も思想も人類の間で混じり合い、おまけにご都合主義的に細かく分化し、純粋なものなど何一つなかったからです。

三千万人を選び出す決め手がない以上、選ばれなかった七十九億は、決して、納得しないでしょう。

おまけに人間の技術の進歩はさらに人減らしを困難にしていました。大規模な戦争による人減らしは、核兵器の開発で不可能になったのです。

なぜなら、大規模な戦争は必ず核兵器使用の危険性が伴います。核の使用はこの星全体の滅亡につながります。三千万はおろか、人類はただの一人もこの星に生存できなくなります。人間は、その危険を冒すほど馬鹿ではなかったのです。こうして、戦争は国家間の紛争程度の、核を使用しない局地戦しか行われなくなりました。もはや、核兵器のある限り、戦争による人減らしは不可能になりました。

さらに、人類の歴史にとって一時的ではあるけれど、技術の進歩によって余裕の出た人類に、ある思想が生まれました。……人命は星よりも重い……。これは、日常、戦争と殺戮に明け暮

れる人類としては短い平和の時期の言い訳じみた思想ではありますが、いつのまにか人類の基本理念になってしまいました。

それが、いわゆる、人道主義（ヒューマニズム）であり、民主主義（デモクラシー）というものです。富める国は、飢餓に苦しむ国を見殺しにできない。まして、自国に飢える国民がいれば、ほうってはおけません。こうして、戦争ばかりでなく、人口拡大に自然破壊による飢餓ですら、人はなかなか減らなくなりました。

かつては、支配者のためだけに存在していた国家というものが、人道主義や民主主義を抜きにして存在しづらくなってきたのです……しかし、人道主義や民主主義は、どうしようもなく増え過ぎた人類を減らせはしません。

他人を生かそうとしても、そもそも自分が生きられないのです……ない袖（そで）は触れないのです。

袖を振ろうにもこの星自体に、人類を生かすだけの余裕がない。

人類はすでに、この星を搾取（さくしゅ）しつくしていました。

人類が、この星を搾取し続けることができたころは、民主主義を実現するためのさまざまな理想論的な思想が生まれました。

でも、その思想もこの星が増え続ける人類を維持できるという前提のある、楽天的なものに過ぎませんでした。

たとえば、人々がともに働き、得た富を公平に分け合い、人間同士の搾取と独占（どくせん）をなくそうなどという主義思想が、働いていても得るものもなく分けるべき富も食料も、もはや、この星

にないことに気づいたときに幻想に終わっていました。
その幻想は支配者を倒す反乱や革命という名で呼ばれる戦争……結局、人類の人減らし本能の口実に使われただけで泡のように消えてしまったのです。
そして、もっとも、人間たちの間で普遍的な人間らしさと呼ばれた人命尊重の考え……人道主義も民主主義も同じ運命になるはずでした。
自分の生存が危ういとき、人道主義も人間にとって幻影に過ぎなかったのかもしれません。
しかし、人間は、表面的にしろ人道主義をなかなか捨てようとしなかった。
人道主義を表面に打ち出した国家は、昔の支配者のためだけの国家には戻れません。
国は、国民のためにあるという考えから世界中の国家が抜け出せなくなっていたのです。
世界中の国が、身動きできない状態が続きました。
飢餓はそこまで迫っている。
生き残るためには、生存競争の戦いしかない。
けれど、人間を苦しめる戦争は人道主義に反する。
仮に戦争をしたとしても、人類滅亡につながる核兵器は使えない。
結局、その場の飢えを凌ぐために、自然破壊を続けるしかない。
そして、それは、この星に生存可能な人間の数をどんどん減らしていくことでした。
それは、多くの人々に予知されていたことでした。
しかし、目の前の草の芽がやがて大きな実を結ぶことが分かっていても、飢えていては、手

を伸ばしもぎ取り、口に運ばざるをえないのです。
やがて、世界の国々はそれぞれの国民を支え切れなくなっていきました。
そして、巨大で多数の人口を抱える国から順に、分裂していきました。
人類が生きていくには、人道主義を捨てた、人類生存のための新しい集団が必要になってきました。
それが、デビス帝国の勃興の下地になったのです」
電算機の説明をそこまで聞いたネストは、肩を竦めた。
「まるで、人類を生存させるために、帝国が誕生したような言い草だな」
「少なくとも帝国を作ろうとした人々は、その目的だったのかもしれません」
テスが、言った。
「その目的が、果たせるかどうかは分かりませんけれど……」

＊

……この星に人や生き物が住めなくなる日はそこまで迫っていた……
そのころ、フィレーナはネストとテスが資料庫の中で見てきた同じ内容を、森の存在から聞かされていた。
……人類が生き残るためには、強引に人減らしするしかない。だが、人を減らしたところで、一度、破壊されたこの星の自然が元どおり、生命の満ち溢れる星に復活する保証はない。生命は一種類だけで生きていけるわけではないのだ。さまざまな種類の生命はつながりあい、互い

を支えあって生きている……

「つながりあって生きている？……うん」

フィレーナは頷いた。

「それって、分かる気がする」

フィレーナが、あの砂漠(さばく)の日陰で感じたことを思い出していた。

照りつける日差しを避け、じっと身を寄せ合う生き物たちとフィレーナは、確かに同じもの同士であることを感じていた。

……生命同士の連帯がなければ、生命はやがて滅びる。おしべとめしべに分かれた花は、花粉を運ぶ虫がいなければ、滅びるしかないのと同じでな。だが、人間は、すでにそんな関係にあるさまざまな生命を滅ぼしつくしていた……そんな星にいっとき長居できたとしても、やがて滅びはやってくるかもしれん……人間が生き残るためには、別の天地を求めたほうがよい。だれもが、それを感じ、目を空に向けた……

「空？」

……そう、宇宙。別の星……まだ、夜空には月が一つしかなく、無数の星が、人間を招くように瞬いていた……

いきなり、フィレーナの目の前に、星空が広がった。

夜空を埋めつくすような星の数だった。

「こんなにいっぱい……」

フィレーナは、息を飲んで見とれるよりなかった。

それは、ネストが心理更正病院で見た人工の夜空に似ていたが、森の意識がフィレーナの脳裏に送り込んだ、本物の実感のある星空だった。

……だが、人間が住める可能性のある星は果てしなく遠い。何千年かかるか分からない。その星が駄目なら、さらに別の星を求めて数千年の旅が必要になる。ともかく人間の住める星に辿りつくまで、宇宙の中で人間が何世代も生きていられるかどうかだれにも分からない。そこで、人間は、可能性を調べるため、夜空にとてつもなく巨大な実験室を作った。それが、三つあるうちの二つの月じゃった。それは、人類の可能性を賭けた、人間の歴史上最大の建造物じゃった……それは今から、三百年ほど昔のことじゃった……

「あの月の二つは、人間が作ったもの……」

……そう……あの実験室の中では、百年もの間、隔離された四世代にわたる人間たちが、この星の人間と生き物がはたして宇宙空間の中でどれぐらい生きていけるかどうかの実験と試験をした……結果は、二世代目で、すでに兆しが現れた……精神に異変をきたした子供が続出した。月は狂気を生むと昔から言われているが、人工の月は、まさに狂気の場になった……三世代目になると、もはや、この星に戻っても生きていけない体質の子供が生まれ出した。彼らは、子供を生み出す能力もなかった。四世代目に誕生した子供たちは、ほとんどがそんな人間たちだった。もうそれは、この星の人間とは呼べないだろう。したがって、あの人工の星の実験は、かろうじて生まれた四世代目を最後にして途切れた……あの人工の月は今は無人で、この星の

周りを回る浮遊物にすぎない……やがて、寿命が尽きれば、この星の引力に負け落ちてくるだろう……

……宇宙空間で人間が変質する原因はいろいろ考えられた。この星のあるがままの空気や水を、宇宙空間では作り出せないこともあるだろう。星の大気に守られていた生体が、宇宙線の飛びかう真空の空間では耐えられないこともあるだろう……

……だが、宇宙で過ごした人間たちには、理屈よりも感性の部分で悟ったものがあった。人間にはこの星しかない。この星でしか生きられない。宇宙は、人間の進出を拒んでいる……

フィレーナの前に、今までと別の星空が広がった。

「これが、宇宙？」

その宇宙は、背筋が寒くなる冷たさがあった。

大気のない宇宙の星は瞬いて見えない。ただ凍ったようにそこに光っている。

確かにそれは、フィレーナを見下ろすだけで、聞く耳も持たず拒絶しているように思える。

何を言っても通じない気がする。

とてつもない寂しさが、いきなりフィレーナを襲う。

孤独だ。ひとりぼっちだ。耐えられない。

じりじりとした焦燥感が身体中に渦巻く。

空気は吸えるのに、たまらず息苦しい。

長くいれば、確かに気が狂いそうだ。

フィレーナは、うめくように言った。
「もういいよ……止めてくれ……」
……これが、人工の月から見た宇宙だ……そしてフィレーナ、後ろを見てごらん……
フィレーナは振り向いた。
フィレーナの顔にほほ笑みが浮かんだ。
長い間、息を止めて水に潜っていた海女が、水面に顔を出したように、大きく息を吐き出した。
目の前に、フィレーナの住む星が浮かんでいた。
果てしなく暗い宇宙の中で、頼りなげで、けなげで、しかし、十分頼れそうにも見える青さだった。
よく見れば、たしかに地表は赤茶けて、荒れ果てて見える。
それでも、緑がある。海は青い。大気は、青さをまだ逃がしていない。
「うん」
フィレーナの瞳が、自然に涙で濡れてくる。
「僕らの住む星は、ここしかない……」
フィレーナは、それを理屈でなく実感した。

＊

ネストとテスの前にも、宇宙に浮かぶこの星が立体映像で映されていた。

資料庫の電算機が、響いている。

「この長期間の実験で分かったことは、この人間は、今の体質でいる限り宇宙へ進出できないということです。しかし、このまま、この星にいても、人類は滅びの時を待つしかない。人類の未来は八方ふさがりです。この八方ふさがりを、打ち破るために考え出されたのが、帝国人の発想です。当時の最新科学は生物の遺伝子操作や原子の並べ換えをかろうじて可能にするところまで発達していました。核爆弾の脅威は、原料のウランやプルトニウムなどの原子構造を変えることによって廃絶されるまでにいたりました」

テスが、肩を竦める。

「核爆弾がなくなった代わりに原子の並べ換えは帝国に超爆弾という新しい兵器をもたらしました。科学って火薬から始まって核から超爆弾……爆弾がつきもののようです。超爆弾は生体に末代まで影響を与える、核よりたちの悪い爆弾です。爆弾はたちが悪くなる一方みたい……」

テスは、その存在はまだ知らないにしろ、今、帝国が開発中の新爆弾……デビ要塞都市で、実験した爆弾を予想しているかのように溜め息をついた。

電算機の声は、記憶していることだけを、二人の気持ちなどおかまいなしで続けていく。

「人間が、人間であることを損なうことなく、宇宙で生きられる体質に進化させる。それも、時間は切迫しています。この星が、人類の生存を許しているうちに、そこまで、人類を進化させなければなりません。それは、人類史上かつてない未曾有の計画でした。この星の人類の数

を減らしながら滅亡への時間かせぎをして、急速に人類を進化させなければならない。そのためには、今までに存在した国家と違う価値観を持って、人類を征服し人減らししていく侵略国家が必要になったのです。それが、デビス帝国という全く新しい国でした。帝国にとっては、この星のすべての国が侵略対象でした。どの国に対しても、侵略に対する気兼ねはいりません。なぜなら人類を生存させる目的という、今までにない発想ででき上がった国だからです」

＊

……人類の種を変化させていく以外にも、他の星へ移ることを考えたものもいた……それは、帝国とは、全く別の発想じゃった……

森の存在は、フィレーナの脳裏に語り続ける。

……彼らは、体験から思った。人体ではしょせん、宇宙を移動するのは不可能だ……人間の能力を越えた力ならどうなのか……彼らは、宇宙で人間を拒む何かの意思を感じた……それは、まるで神の啓示のように思えた……そして、われわれは思った……人体を越えた意思の力なら、宇宙はわれわれを受け入れるかもしれない……われわれは超能力を……心の力を……宗教とは全く別の宇宙の神の力を探究した……

「われわれ……って。あんたたち？」

フィレーナは聞いた。

……そう、われわれはあの、人工の月に住んでいた人間たちや、宇宙を飛行した体験のある者たちのかたわれだ……一度でも宇宙に出たことのある人間は、通常の科学では解明できない



フィレーナは森の民からこの星の歴史と帝国の成り立ちについて聞かされた

感じを体験して戻ってくるといわれていた……そのため、地上に戻った後は、世俗を離れ哲学や宗教や超能力の研究に身を投じるものが多い……そして、感性の特殊なわずかな数の人が、超能力といってもいい心の力を、身につけた……われわれは、歳老いて、肉体は朽ち果てても精神だけで存在できる……

「存在してるっていうのは分かる……幽霊でも、お化けでないってことも……」

フィレーナは頷いた。

「でも……」

フィレーナは聞いた。

「なぜ、ここにいるの？……なぜ、人間が生きていける他の星に行っちゃわなかったの」

……われわれは、こんな姿になってもこの星から逃れられないのじゃ……

「逃げられない？」

……こんな姿になってもわれわれはこの星の生命なのじゃよ……われわれは、確かに飛んでいける。だが、それは、この星の生命エネルギーの届く範囲でしかない。この星に溢れる他の生命のエネルギーが、なければ生きていけないのだ。今、われわれを支えているのは、この森の持つ自然の生命の輝きなのじゃ。帝国の他の大地にここほどの生命エネルギーはない。そんな場所があったにしてもそこに行くまでに、われわれの力はついえてしまうじゃろう。肉体がないから子孫もできない。ただわれわれは存在するだけじゃ。われわれは、この森で、生きることも死ぬこともなく肉体すらない精神の存在のまま最後を待つことになる……

「ここにいるみんなが……」

……そう……われわれは、この星の生命エネルギーの滅亡とともに、滅びる運命にある。

……今はそれがいつのことかすら分からないのじゃ……

……おそらく、この森が消えるときがわれわれの滅びの時なのだろう……

森の存在は、自らを達観しているのか、無表情にそう言った。

＊

「フィレーナは、今日も森の彼らと盛んに交信しています」

帝国上層部……七人の長椅子の中央で声がした。

「森と出会ってから、ほとんど毎日です。これ以上接触すると、フィレーナ自身に、人間以上の精神エネルギーが身につくかもしれませんわ」

女の二が言った。

「今までも、十分、能力を開発する訓練にはなったでしょう」

女の六が答えた。

「われわれと闘うのを決意するため帝国機密を知られるのは構いませんが、人間と別な存在になられては困ります」

両性が言った。

「この程度の精神波ならまだまだ、大丈夫。あなたより十分人間らしいですわ」

女の二が両性に言った。

両性は、女の二を睨み返した。
割って入るように男の一が言った。
「見極めが難しい。でも、用意はしておいたほうがいいでしょう。蚤のフィレーナが、狼になるのはかまわないが、飛び過ぎて鳥にでもなられては、もう人間とはいえない」
一同は、頷いた。

＊

何もない砂漠に向かって、帝国軍が移動を開始した。
……なぜ……なんのために……
リラは、どうしていいか迷った。
携帯通信電算機にフィレーナが、砂漠から出たらしい情報はまるで入っていない。
……フィレーナと帝国軍の動きに関係があるのか……それは、分からなかった。
……でも……
リラは立ち上がって、帝国軍の後を追うことにした。
……気になることをほうっておいて、後で後悔したくない……
その一心だった。

＊

資料庫の電算機が、説明を続けている。
「精神エネルギーとなった宇宙飛行士や、宇宙の実験室の人々には、人類生存の可能性を託せ

ません。帝国の人種進化しか人類生存の手段はないのです」
「待ってくれ……」
ネストが呟いた。
「え？……」
テスは、手に持った小さな電算指示機を押した。
電算機の声と映像が停止した。
「あの巨大な月にしろ、人間を進化させる計画にしろ……この帝国にしろ……いったい、だれが仕掛けたんだ？　それができそうな巨大な国家も、権力も、そのころには、すでに潰れていたのではなかったのか」
テスは頷いた。
「それができたのは、いわゆる国家ではありませんわ。民主主義の元では、国民のことを考えなければ国家は存在できない時代でした……そして、その国民は飢えている。国家にこの計画を推進させる力はありません……」
テスは、電算指示機を操作した。
停止していた声と映像が動き出した。
「いわゆる、民主主義を称する国家の力は衰退し、かわって、新たなる勢力が国家に代わる力を持ち出した。それが、企業主義というものです。企業は利益を追求する。国民よりも企業利益を第一目的に考えます。

利益に反するものは切り捨てればいい。国と国の隔たりなどなく企業の利益のみを追求する大企業が世界を動かすようになったのです。そして、大企業間の買収と合併が相次ぎ、勝ち残った企業が事実上、この世界を支配しました。

その企業の母国は、小さな島国で、何の資源も持っていません。しかし、企業にとって母国の資源などどうでもいい。もはや企業には国籍はない。財力さえ集まれば工場も原料も他国にあって構わないのです。他国の土地が国民がどんなに荒廃しようと企業の利益さえ上がればいいのです。飢餓に喘ぐ国々は、そんな企業の進出を防止する力はありませんでした。

自国民に、より安くより大量に商品を供給してくれ、いっときでも失業者を労働力として雇ってくれる多国籍大企業を、その企業の母国が他の国だからと言って、だれが拒めるでしょう。しかも、その大企業の母国の民族性は、企業というものの本質に向いていた。自分の家、企業の中は奇麗にするが、みんなで使う道や公園は、汚し放題。

事実……。

その国は、自然破壊の極致まで至ったこの星で、国の存続する最後まで、財力にものをいわせ自国の周りの海や自然を汚染させずに守りきりました。

島国で、他国から孤立していたので、この星で珍しく民族間の交配が少なく単一民族といっていいまとまりを持つ国。いわば、民族自体が、一家の構造を持っている国……一家の利益のためには、他の土地などどうなってもいい民族……自分の家が汚れるのは困るが、他はどう汚しても気にならない性格……他人とのもめごとは金銭だけで済ませたがる性格……民主国家を

うたいながら、形だけは象徴としての君主国家を唱える奇妙なまとまり……利益だけを追求する集団として、民主主義でもなく人道主義でもなく、企業主義にこれほど向いた民族はいません。そして、その民族を中心にした見掛けだけの多国籍大企業は、この星の自然を汚染しつくすと、目を宇宙に向けるしかなかったのです」

「その企業が、二つの月を作り、帝国の基礎を作った母体です」

テスは、そう言って電算機の声を止めた。

ネストは、首を何度も振りながら、呻くように言った。

「帝国の母体……その企業の生まれた国は……」

「ええ……時は、ものを忘れもさせますが、皮肉な悪戯もしますわ……素朴で自然の中で生き、最も、古代の人間に近い生き方をしていた国……でも、自然破壊が究極まで行ったこの星で、そんな贅沢ができるのはよほどの財力があったからです。帝国が人類の進化への道を一人歩き始めて、もはや、母国の意味など何もないのに、最後まであの国を滅ぼさなかったのは、母国への郷愁が、潜在意識の中に残っていたから……

といえないこともありません」

＊

「嘘だ！」

フィレーナは、叫んだ。

叫ばずにいられなかった。

帝国を作ろうとした企業……その企業の。
母国はフィロセラだった。
「嘘だ！」
フィレーナは、もう一度叫ぶと、頭を抱えしゃがみこんだ。
だが、森の存在の声は、耳を押さえても聞こえてくる。
……嘘ではない。フィレーナ、おまえの国が帝国を生みだしたのだ……おまえが闘っていたのは、おまえ自身の分身といっていい……
……この世界は、この星の人類は、ここ何百年、フィロセラによって、生かされも殺されもしてきた。フィロセラがなければ、人類はもっと早く滅びたかもしれないし、もっと生き伸びるかもしれない。
それはだれも分からない。
だが、フィロセラがなければ帝国はなかった。少なくとも、帝国の侵略による長い間の殺戮は、別の形になっただろう……
フィレーナは、考えたくなかった。
どこで生まれようと僕の勝手だろうと言いたかった。
だが、この星を変えた国の末裔(まつえい)が自分であることも確かだった。
……今の帝国にとってフィロセラは母国でもなんでもない。だから、最後に滅ぼした……
……そして、最後まで残したことで、皮肉な結果になった。フィロセラは、他国の犠牲で、

自分の周辺の自然を最後まで守った。
そのため、おまえの身体は、進化という名で変化した今の帝国人と最も違った、古来の人間に近い精神構造と身体を持っている。
だれが、この星を継ぎ、人類がどうなるのかは分からない……だが、この星の歴史を知れば、フィロセラの唯一の後継者であるおまえが、ひとつの決着をつけるべきなのかもしれない……たとえそれが、偶然の悪戯だとしても、おまえが、他のだれよりもそれにふさわしい気がわれわれにもしてきている……
フィレーナはふらふらと立ち上がった。
どうしていいのか分からない。
ただ、今、唯一の味方だと思っているギャッピーに抱きついて、思い切り泣きたかった。

*

資料庫の電算機は、説明を続ける。
「帝国は、宇宙進出に耐えられる人種を進化させつつ、過剰な人口を減らすべく、侵略戦争を開始しました」
ネストは、もう聞きたくなかった。
「分かった。この先は、見当がつく」
「あと少しです」
テスが言った。

「いらないよ。後は具体的に、その種の進化が間違っていたか……いないか調べるだけだ」
ネストは、テスから電算操作機を取り、電源を切った。
ネストはテスに言った。
「急激な人種改良は帝国人特有の性格を生みだしていった……人間性と生物性の喪失……過剰な攻撃性を押さえるための処置として絶えることのない戦争と見せ物としての闘技試合の必要性……純粋な空気と水でなければ生きられぬ人間……あげくの果てが、優秀種の中から、おれのような先祖返りや精神破壊が出だす。まるで、人工の月で起こったことが、ゆっくりと今ごろ、起こったようなもんだ。で……いまさら、私に、この進化は間違っていたのか？……と聞くのかね……」
「ええ……」
テスは頷いた。
「私たちが、間違いの中で生まれたのなら……間違いの中で、正しい道を捜したいですもの」
ネストは、テスを見つめ返した。
テスは微笑んだ。
「ですよね？」
爽やかに聞いた。
ネストも、微笑むよりなかった。
「確かにそのとおりだ」

った。

ここまで、首を突っ込んだら、人類の滅亡を防ぐため、無駄でも何かをしなければならなかった。

テスという心理病理観察看護の娘の爽やかな微笑のためにも、そうしてやりたかった。

＊

ギャッピーは、森の灯台のかたわらで夢を見ていた。

それはギャッピーにとって覚えのない夢だった。

夜の闇を走っていた。

だが、一頭ではなかった。

無数の仲間たちがいた。

狼が群れをなして草原を走っていた。

どこに行くのかは分からない。

なぜ、こんな夢を見ているのかも分からなかった。

ギャッピーは満ち足りた気分だった。

それは、孤独な狩人だったギャッピーが追い求めていた夢だった。

森の存在の精神エネルギーの影響を受けて、遺伝子の奥で眠っていた狼の記憶が蘇ったなど、知るはずもなかった。

夢の中で、ギャッピーは夜空を見上げた。

月が出ていた。

たった一つ。
本来、あるがままの姿だ。
月に向かって、吠えたくなった。
そして吠えた。
高らかに吠えた。
今まで、ギャッピーは、狼の血を引きながら、月に向かって吠えたことはなかった。
吠えるなど、弱いもののすることだと思っていた。
それが、狼にとって、詩を詠うことだと思っていなかった。
今、ギャッピーは初めて詠う気になった。
仲間に向かって詠う気になった。
そして、目が覚めた。
月が三つあった。
いつも見慣れた夜空だった。
だが、ギャッピーには、そのうちのどれが本物の月かが分かった。
ギャッピーは、月に向かって吠えた。
今はもうこの星から滅び去った狼たちに向かって詠った。
フィレーナは、そのギャッピーの後ろ姿を見つめていた。
孤独で寂しいが、逞しく吠える姿だった。

泣いているのではない、詠っているのが、フィレーナにも分かった。
フィレーナはギャッピーにすがって泣くのは止めた。
そして、灯台を振り返った。
「僕は吠えるよ。ギャッピーのように……」
森の存在にそう呟いた。

＊

ギャッピーの吠える精神波は、フィレーナと見分けがつかない生命のエネルギーを放っていた。
ギャッピーとフィレーナの精神波は重なりあい、増大し帝国に感知された。
帝国上層部は、急激な精神波の高なりに目を見張った。
「このままでは、フィレーナは森の彼らのような精神エネルギーに変体してしまうかもしれません」
両性が呻くように言った。
「精神エネルギーに化したフィレーナは人類とはいえない。防がなければなりません」
男の一が、珍しく慌てた口調で言った。
男の七が叫んだ。
「森を焼き払え」
「森のやつらとフィレーナを切り離すのです」

女の二が決定を下した。

*

帝国軍は、火炎放射器で森を焼き払いにかかった。
「人は殺すな……森だけを焼き払え……」
フィレーナを殺さぬために、全員、そう命令を受けていた。
だが、人は死んだ。
森の周辺にいた帝国軍のすべてが死んだ。
最近の戦いには珍しい無残な屍体だった。
まるで、風船が飛び散るように内部からはじけ飛んでいた。
白熱光や、並の武器ではこんな屍体にはならない。
帝国兵たちが飲み込んだ、爆弾が腹の中で破裂したような感じだった。
それは、森の存在が、帝国軍兵士の体内に入り込んで瞬時のうちに炸裂するように燃え尽きたせいだとは、死んでいく瞬間まで、帝国軍兵士自身が気づかなかっただろう。
森は焼き払われ、森の存在も消えた。
灯台も焼きつくされた。
フィレーナは、ギャッピーと帝国軍兵士の屍体の間をぼんやりと歩いていた。
フィレーナの耳に、森の存在の声が、まだ残っていた。
……灯台の指し示す先は北だ……北へ行け……北へ行け……そこに、帝国人でも属国人でも

ない、フィレーナと同じ人類がいる……
……だが、行ったところでまた、ここにあるような屍体が増えるのか……
さっきまで、森の存在に「吠える」と言い切った胸の高なりが急速に冷えていく気がした。
そのときだった。
「元気？」
「え？」
「見っけた」
リラが立っていた。
四年ぶりだった。
二人とも成長していた。
だが、お互いがすぐに分かった。
何も言わずにしばらく見つめ合った。
「元気？……って、聞いたんだけどな」
「ああ……元気、元気……リラは？」
「元気だよ。うん。元気」
リラは自分で自分に頷いた。
そのそぶりは、昔と一緒だった。
後はもう、言葉はいらなかった。

二人は、並んで歩き出した。
後ろをついていくギャッピーの足取りも、軽かった。

エピローグ

そして、半年が経った。

冬……。

北の海、氷の雪原に氷でできた灯台が立っていた。

灯台の下にフィレーナとリラは、立っていた。

かたわらには、ギャッピーが離れずについている。

灯台の先には、氷山の他、何も見えなかった。

「北の果てだわ」

リラが、携帯通信電算機を見ながら呟いた。

電算機の方向計は、すべてが南を表示していた。

それはそこより先に北のないことを示していた。

「なにもないの？　ここまで来て……」

フィレーナは、ギャッピーの動物としての勘にすがるように聞いた。

ギャッピーはうなだれていた。

凍てついた鼻は何も感じなかった。暗闇があった。星空があった。
ほとんど極点といっていいそこには、この星の軌道を通る三つの月の光は届かなかった。
そこには、本当の夜があった。
すぐそこに見えて、手をのばせば届きそうに見えて、しかし、この星の人類には、あまりに遠すぎる星々が、無数に瞬いていた。
……どんなに、あの星々が手招きしてくれているように見えても、僕らが、生きていくのはこの星しかない……でも、この凍てついた氷原のどこで、生きればいいというのか……
フィレーナは、まるで、この星の人類そのもののように、行き場なく、立ち竦むしかない。
そのときだった。
氷でできた灯台から、光がほとばしり出た。
それは、緯度の低い地点で、別の灯台が受け中継してきた朝の光だった。
朝の光は氷山のひとつを指し示した。
そしてフィレーナは見つけた。
そこには、凍った帆船が閉じこめられていた。
それは、フィロセラの灯台の壁画に描かれていた姿そのままの帆船だった。
船は、フィレーナを、待っていた。

第6部　完



やっと出会ったフィレーナとリラは氷原のかなたに氷に閉ざされた帆船を発見する

帝国地図


N
W
E
S
巨大帆船
北極点
フィレーナの道
北デビス山岳地帯
汚潮海域
ドラ
中部高原地方
首都ボー
汚潮海域
森
西部海岸地方
砂
漠
リラの道
南デビス山岳地帯
ルシベ
デビ
デビス帝国軍事試験場
(旧フィロセラ)
狼のフィレーナ軍
解放地区
南部海岸地方
世界変更線
ドラゴニア大陸(伝説)
南極点

あとがき

目の前に星空が広がっています。

……まるで、ネストが、フィレーナが、この第6巻の中で見たような降るような星の数です。

星は、いつもそこにあったはずなのに、僕は長い間それを忘れて見ようともしなかった。

なぜ、僕はそれを忘れてしまっていたんだろう。

見えるはずなのに見なかったこと……、忘れるはずのないことなのに、忘れていたこと……。

人間って、この世に生まれてからわずか数十年生きているだけなのに、見えなくなったこと……忘れたこと……気づかなくなったことがずいぶんある。

十数年前、一人で旅をした伊豆半島の山奥で、新月の夜、偶然空を見上げた僕が、無数の星を見て漠然と感じたことが、フィレーナという物語を作りだすきっかけになりました。

何を言いたいかというと、フィレーナを発想した原点のようなものを、忘れないうちにここにメモしておこう……それだけのことです。

さて、帝国機密の扉が開かれたフィレーナの世界の全体像が浮かび上がる第6巻が完成しました。やっとここまで、たどりついた……。今の正直な僕の気持ちは、まさにこれです。

一九八五年に第1巻が、この文庫に登場してから七年……。
当時十六歳だったフィレーナも二十歳以上の大人になり、作品自体、ただ単に自由のための戦いとか……、圧政者を打倒するとか……、祖国フィロセラの復興のためとかいう……いわゆる、ヒロイック・ファンタジーの域を越えたものになってきたようです。ここまできたら、後はフィレーナ達も、作者の僕も、結末に向けて、一気呵成になだれこむしかありません。
そう、あと数巻で、この星とフィレーナの戦いのクライマックスが、やってくるはずです。
それも、今までのように、フィレーナの成長にあわせたようなスローペースではなく、フィレーナの星の滅亡への速度に負けないスピードで……。
そこに待っているのが、破局か……希望の灯か……いずれにしろ、答えはもうすぐ出そうです。いまさら、言わなくてもいいことですが、フィレーナの世界は、我々の地球に限りなく似ている星の人間の世界の物語です。
いいえ、もしかしたら、地球そのものとお考えになる方もいるでしょうし、僕も、それを、あえて否定しようとは思いません。
ともかく……フィレーナの戦いは、今も続いていますし……少なくともフィレーナの戦いの終わりは、みなさんがフィレーナの世界の全貌を忘れる前には、やってくるでしょう。
もう、長くはお待たせしません。

1992・春
首藤剛志

アニメージュ文庫

永遠のフィレーナ 6

機密への旅路



首藤剛志

'49年８月18日、福岡生まれ。脚本家・小説家。19歳でシナリオデビュー。「魔法のプリンセス　ミンキーモモ」などのシリーズ構成を務める。小説家としては「ゴーショーグン」と本シリーズが代表作。



高田明美

３月31日、東京生まれ。キャラデザイナー・イラストレーター。「クリィミーマミ」「うる星やつら」のキャラデザインを経て、「機動警察パトレイバー」のキャラデザインを務める。

1992年４月30日初刷　　N-073

Printed in Japan

著者　首藤剛志

発行者　荒井修

〒105-55　東京都港区新橋４—10—１

発行所　株式会社　徳間書店

電話　03(3433)6231(大代)

振替　東京４—44392番

印刷　製本　大日本印刷株式会社

〈編集担当　吉田勝彦〉

★この本を読んでの感想を上記までおよせ下さい。また著者へのお便りもお待ちしています。

ISBN4-19-669655-4

首藤剛志関連作品リスト

戦国魔神ゴーショーグン
その後の戦国魔神ゴーショーグン
狂気の檻
覚醒する密林
時の異邦人
はるか海原の源へ
幕末豪将軍
美しき黄昏(たそがれ)のパバーヌ
永遠のフィレーナ①～⑥
都立高校独立国㊤㊦
いつかきっとピーチブック(ミンキーモモ)
それからのモモ(ミンキーモモ)
夢の中の輪舞(ロンド)(ミンキーモモ)
ラインハルトとヤン(銀河英雄伝説)

カバーイラスト＝高田明美
カバーデザイン＝真野　薫
カバー印刷＝真生印刷(株)

9784196696551

1910174003907

灯台の光を目指して旅を続けるフィレーナは、砂漠のオアシスにたどりつく。そこでフィレーナは肉体を持たない精神だけの生命体「森の民」と出会う。じつは彼らの存在そのものが帝国機密であり、彼らの口から語られたデビス帝国の成り立ちはフィレーナを絶望の淵へと追いやった。一方、帝国人民心理更正病院に収容されたネストもそこで帝国の成り立ちを知る。帝国成立の裏に隠された大いなる計画とはいったい何なのか？

ISBN4-19-669655-4

C0174 P390E (0)

アニメージュ文庫 定価390円(本体379円)